

Adobe® LiveCycle® ES3への 自動アップグレード (JBoss® 版)



法律上の注意

法律上の注意については、http://help.adobe.com/ja_JP/legalnotices/index.html を参照してください。

コンテンツ

第1章：このドキュメントの内容

1.1 このドキュメントの内容	1
1.2 このドキュメントの対象読者	1
1.3 このガイドで使用する表記	1
1.4 追加情報	1

第2章：LiveCycle ES3 への自動アップグレード

2.1 LiveCycle のアップグレード方法	3
--------------------------------	---

第3章：システムの前提条件

3.1 必要システム構成	5
3.2 その他の前提条件	5
3.3 LiveCycle データファイルのバックアップ	6
3.4 事前準備	7

第4章：LiveCycle ES3 へのアップグレード、および LiveCycle ES3 の設定とデプロイ

4.1 LiveCycle のインストール	11
4.2 アップグレードのための Connectors for ECM の準備	13
4.3 サービスパックのインストール	14
4.4 LiveCycle ES3 の設定	14
4.5 次の手順	23

第5章：デプロイメント完了後の作業

5.1 LiveCycle がメンテナスモードを実行中かどうかの確認	24
5.2 メンテナスモードのオフ	24
5.3 スケジューラーサービスの再開	24
5.4 デフォルトのパスワードの変更	25
5.5 JBoss サービスの再起動	25
5.6 JBoss のステータスページの無効化	25
5.7 正しい日付、時刻およびタイムゾーンの設定	25
5.8 JBoss 用 SSL の手動による有効化	26
5.9 Workbench へのアップグレード	27
5.10 Administration Console へのアクセス	28
5.11 LiveCycle アプリケーションへのアクセス	28
5.12 User Management へのアクセス	30
5.13 平文テキストパスワードの暗号化	30
5.14 MySQL データベースの管理	30
5.15 LiveCycle の LDAP アクセス設定	31
5.16 HTML デジタル署名機能の設定	31

5.17 PDF Generator の設定	31
5.18 Connectors for ECM の設定	39
5.19 Connector for EMC Documentum の設定	44
5.20 Connector for IBM Content Manager の設定	47
5.21 SharePoint クライアントアクセスの設定	50
5.22 IPv6 モードでの CIFS の有効化	51
5.23 アップグレード後の LiveCycle ES Update 1 または LiveCycle ES2 のアンインストール	52
5.24 システムイメージバックアップの実行	52
5.25 LiveCycle のアンインストール	53
第 6 章：高度な設定作業	
6.1 連邦情報処理規格 (FIPS) の有効化	54
6.2 AES-256 暗号化の有効化	54
第 7 章：付録 - コマンドラインインターフェイスのインストール	
7.1 概要	55
7.2 LiveCycle のインストール	55
7.3 エラーログ	56
7.4 コンソールモードでの LiveCycle のアンインストール	57
第 8 章：付録 - Configuration Manager コマンドラインインターフェイス	
8.1 操作の順序	58
8.2 コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル	59
8.3 LiveCycle のアップグレードコマンド	59
8.4 一般的な設定プロパティ	65
8.5 使用例	77
8.6 Configuration Manager CLI のログ	77
8.7 次の手順	77
第 9 章：付録 - SharePoint サーバーでの Connector for Microsoft SharePoint の設定	
9.1 インストールと設定	78
9.2 SharePoint Server 2007 でのインストールと設定	78
9.3 SharePoint Server 2010 でのインストールと設定	80

第1章：このドキュメントの内容

1.1 このドキュメントの内容

このドキュメントでは、自動オプションを使用して LiveCycle Update 1 または LiveCycle ES2 (Red Hat® JBoss® 版および MySQL 版) から Adobe® LiveCycle® Enterprise Suite 3 (ES3) にアップグレードする方法について説明します。自動オプションでは、製品のインストール、設定およびアップグレードが自動的に行われます。迅速な評価や開発を行うため、また小規模な実稼働用デプロイメントに対しては、このインストール方法をお勧めします。

LiveCycle ES3 のシステムを迅速に構築し、小規模な実稼働環境、デモンストレーション、評価、開発またはトレーニングを目的として実行するには、このアップグレード方法を実行してください。LiveCycle 環境を機能させる、デフォルトのアドビおよびサードパーティの製品セットが自動的にインストールされて設定されます。

このドキュメントで説明するタスクを実行する前に、『[LiveCycleへのアップグレードの準備](#)』を読んでおいてください。このドキュメントには自動アップグレードに必要な手順が含まれますが、『[LiveCycleへのアップグレードの準備](#)』はアップグレードの計画に役立ちます。

注意：(LiveCycle 7.x および LiveCycle 8.0.x のみ) 最初に LiveCycle ES Update 1 または LiveCycle ES2 にアップグレードしてから、LiveCycle ES3 にアップグレードする必要があります。

1.2 このドキュメントの対象読者

このドキュメントは、LiveCycle ES Update1 または LiveCycle ES2 自動デプロイメントからアップグレードするユーザーを対象としています。

1.3 このガイドで使用する表記

このドキュメントで使用する一般的なファイルパスの命名規則は、次のとおりです。

名前	デフォルト値	説明
[LiveCycle root]	C:\Adobe\Adobe LiveCycle ES3	すべての LiveCycle モジュールで使用するインストールディレクトリ。このディレクトリには、Adobe® LiveCycle® Configuration Manager、SDK および Correspondence Management Solution のサブディレクトリが含まれます。
[JBoss root]	C:\Adobe\Adobe LiveCycle ES3\jboss	LiveCycle を実行するアプリケーションサーバーのホームディレクトリ。
[Adobe_JAVA_HOME]	C:\Adobe\Adobe LiveCycle ES3\Java\jdk1.6.0_26	LiveCycle 自動オプションでインストールされる Java JDK のホームディレクトリ。

1.4 追加情報

次の表に、LiveCycle の詳細について参照できるリソースを示します。

情報	参照先
LiveCycle およびモジュールに関する一般的な情報	LiveCycle の概要
LiveCycle リリース情報および製品に加えられた最新の変更	LiveCycle リリースノート
LiveCycle に統合できる他のサービスや製品	LiveCycle デベロッパーセンター
LiveCycle のすべてのドキュメント	LiveCycle ドキュメント
Enterprise Readiness Tool ヘルプの使用	Using the Enterprise Readiness Tool
Adobe LiveCycle ES3 のアップグレードのチェックリストと計画	Adobe LiveCycle ES3 のアップグレードのチェックリストと計画
現在のバージョンに関するパッチアップデート、テクニカルノート、および追加情報	アドビエンタープライズサポート

第 2 章：LiveCycle ES3 への自動アップグレード

この章では、自動オプションを使用して LiveCycle ES Update 1 または LiveCycle ES2 の自動インストールから LiveCycle ES3 にアップグレードする方法について説明します。この自動インストールオプションは評価環境、開発者用の環境および小規模な実稼働環境の迅速なインストールに最適です。自動オプション以外を使用して LiveCycle ES Update 1 または LiveCycle ES2 をインストールした場合（JBoss への手動設定およびデプロイメント、WebSphere または WebLogic へのデプロイメント）は、使用しているアプリケーションサーバー版の『LiveCycle ES3 へのアップグレード』を参照してください。

Configuration Manager では、Windows のみで実行されている JBoss Application Server および MySQL データベースで、LiveCycle ES Update 1 または LiveCycle ES2 の自動デプロイメントを LiveCycle ES3 にアップグレードするために必要なタスクのほとんどが自動で実行されます。

注意：自動オプションを使用してアップグレードできるのは、自動で LiveCycle ES Update 1 または LiveCycle ES2 をインストールし、自動インストールの一部として含まれていた JBoss インスタンスにソリューションコンポーネントをデプロイしている場合です。

2.1 LiveCycle のアップグレード方法

LiveCycle にアップグレードするには、主に次のタスクを実行する必要があります。これらの多くは、自動オプションを使用してインストールおよびデプロイする場合は自動で行われます。

- 1 既存の LiveCycle データの手動バックアップ
- 2 LiveCycle の製品ファイル（新しいバージョンのアプリケーションサーバーとデータベースを含む）のインストール
- 3 LiveCycle EAR ファイルの設定およびデプロイメント
- 4 LiveCycle に含まれるサービスコンポーネントの更新（パッチの適用）

インストールプログラムおよび Configuration Manager が連動して、ほとんどのタスクが実行されます。このドキュメントの手順で説明するように、プロセス全体にわたって、入力の指示があります。

注意：Correspondence Management Solution は JBoss 4.2.1 ではサポートされていません。

自動アップグレードプロセスで実行されるタスクの詳細

もともと自動オプションを使用して LiveCycle Update 1 または LiveCycle ES2 をインストールしていた場合は、自動アップグレードプロセスを使用して LiveCycle へ移行できます。自動化されたインストールおよびアップグレードプロセスでは、次のタスクが実行されます。

- LiveCycle 製品ファイルをインストールします。
- 事前設定 JBoss 4.2.1 または JBoss 5.1 Application Server (Apache Tomcat サーブレットコンテナを埋め込み済み) をインストールします。
- 事前設定バージョンの MySQL 5.1.30 データベースサーバーをインストールします。
- Configuration Manager を起動します。
- (既存の LiveCycle インスタンスを実行している同じコンピューターでのアップグレード) 適切な JBoss for Adobe LiveCycle サービスを停止します。

- (既存の LiveCycle インスタンスを実行している同じコンピューターでのアップグレード) 以前の LiveCycle ES Update 1 または LiveCycle ES2 のインスタンスのデフォルトの場所から LiveCycle ES3 のデフォルトの場所に、グローバルドキュメントストレージ (GDS) の内容を移行します。

注意 : LiveCycle の以前のバージョンで GDS の場所を変更した場合は、LiveCycle ES3 で GDS の場所が同じであることを確認する必要があります。GDS の場所が同じでない場合は、以前の GDS の内容を LiveCycle ES3 の GDS に手動でコピーする必要があります。

- LiveCycle ES3 EAR ファイルを設定してアセンブリします。
- (既存の LiveCycle インスタンスを実行している同じコンピューターでのアップグレード) LiveCycle と共にインストールされた以前の MySQL インスタンスの MySQL データを、LiveCycle ES3 と共にインストールされた新しい MySQL インスタンスに移行します。

重要 : 以前の LiveCycle インスタンスおよび新しい LiveCycle ES3 のインストールが同じコンピューター上にない場合、LiveCycle ES3 インストーラーでインストールされた MySQL インスタンスに手動で MySQL データを読み込み、LiveCycle ES3 に使用する予定の新しいコンピューターに関連するディレクトリをコピーする必要があります。以前の LiveCycle MySQL データベースインスタンスを新しい LiveCycle ES3 MySQL データベースインスタンスに移行し、LiveCycle データをバックアップするための詳細な手順については、[この記事](#)を参照してください。

- JBoss for Adobe LiveCycle ES3 サービスを開始します。
- LiveCycle EAR ファイルを JBoss にデプロイします。
- MySQL データベースを初期化します。
- コンポーネントをデプロイする前に、重要なデータの移行を行います。
- 必要なコンポーネントをすべて JBoss にデプロイします。
- 以前のサービス設定パラメーター、エンドポイント、監視フォルダーなどを保持する既存のコンポーネントを更新 (パッチ適用) します。
- 設定などの重要なデータや構成データを LiveCycle に移行します。
- ECM Connector (Connector for EMC Documentum、Connector for IBM FileNet、Connector for IBM Content Manager、Connector for Microsoft SharePoint など)、PDF Generator、Reader Extensions などのモジュールを設定します。
- LiveCycle サンプルを JBoss にデプロイします。

第3章：システムの前提条件

システムの前提条件を読む前に、Enterprise Readiness Tool (ERT) を使用して LiveCycle ES3 にアップグレードするためのソフトウェアインフラストラクチャの前提条件を確認してください。ERT Toolについて詳しくは、『[Using the Enterprise Readiness Tool](#)』を参照してください。また、『[LiveCycle ES3 のアップグレードのチェックリストと計画](#)』も読んでおいてください。

3.1 必要システム構成

自動インストールを使用して、開発および評価用に1つのシステムにすべてのモジュールをインストールします。対象のコンピューターに4GB以上のRAMが搭載されていることを確認してください。必要システム構成について詳しくは、『[LiveCycleでサポートされているプラットフォームの組み合わせ](#)』を参照してください。

3.2 その他の前提条件

3.2.1 ハードウェア

どのインストールに関しても、最低限の設定として以下が推奨されます。

- インストール用のディスク容量：3 GB (ESD ダウンロードを使用し、DVD からインストールを行わない場合は、さらに 3 GB が必要です)。
- Correspondence Management の場合、さらに 500 MB の追加容量が必要です。
- インストール中のシステムの一時的容量：5.4 GB
- LiveCycle を実行するためのメモリ：4 GB
- プロセッサー：Intel® Pentium® 4 または同等の、1.6 GHz 以上のプロセッサー

3.2.2 オペレーティングシステム

この自動オプションは、(実稼働環境に必要な) 64ビットアーキテクチャで実行されている Windows Server 2008 R1 および Windows Server 2008 R2 Standard および Enterprise Edition でサポートされます。

Windows Server 2008 Enterprise Edition 環境の事前設定については、7ページの『[3.4.2 Windows インストールの設定](#)』を参照してください。

注意：LiveCycle の評価用および開発用に、Windows Vista および Windows 7 がサポートされます。インストーラーを実行するには、Windows 上で管理者権限が必要です。この権限がないアカウントを使用してインストーラーを実行すると、管理者権限を持つアカウントの資格情報が求められます。

3.2.3 部分的な自動オプションによるデータベースの事前設定

部分的な自動オプションによって、事前設定済みの JBoss Application Server を既存のデータベースと組み合わせて使用できます。次の種類のデータベースがサポートされます。

- MySQL 5.1.30
- Microsoft SQL Server 2005 SP2、2008 R2

- Oracle 10g R2 および 11g

既存のデータベースを使用する場合は、「[LiveCycle データベースの作成](#)」で指定されているように LiveCycle データベースを設定します。

3.2.4 アプリケーションサーバー

自動オプションでは、JBoss 5.1 または JBoss 4.2.1 (Apache Tomcat サーブレットコンテナを含む) をインストールして、設定および使用できます。アップグレードした環境が正常に機能していることを確認したら、サーバーから古い LiveCycle インスタンスを削除できます。

3.3 LiveCycle データファイルのバックアップ

アップグレードプロセスを開始する前に、Java SDK、インストールファイル、監視フォルダーの内容、一時ディレクトリなど、以前の LiveCycle のデプロイメントに関連するすべてのファイルとディレクトリをバックアップする必要があります。これらの要素を削除しないでください。関連するバックアップタスクは次のとおりです。

- ([LiveCycle ES Update 1 からのアップグレード](#)) アップグレードを実行する前にスケジューラーサービスを停止し、LiveCycle サーバーをシャットダウンしてコールドバックアップを実行します。
- ([LiveCycle ES2 からのアップグレード](#)) アップグレードを実行する前に LiveCycle サーバーをメンテナンスマードにします ([LiveCycle 管理ヘルプ](#) の「[メンテナンスマードでの LiveCycle の実行](#)」を参照)。LiveCycle サーバーをシャットダウンし、コールドバックアップを実行します。

次の LiveCycle データをバックアップに含める必要があります。

GDS ディレクトリ：このディレクトリは、ローカルドライブまたは共有ネットワークドライブ上のいずれかにあります。GDS ディレクトリのデフォルトの場所は、[JBoss root]/server/<profile_name>/svcnative/DocumentStorage です。GDS ディレクトリの検索およびバックアップの方法について詳しくは、[LiveCycle 管理ヘルプ](#) の「グローバルドキュメントストレージディレクトリ」を参照してください。

データベース：データベースのバックアップユーティリティを使用して、データをバックアップします。LiveCycle データベースのバックアップ方法については、[LiveCycle 管理ヘルプ](#) の「[LiveCycle データベース](#)」を参照してください。

LiveCycle EAR ファイル：EAR ファイルは、アップグレードに関する問題が発生した場合にシステムを復元するために必要です。

コンテンツ保存場所のルートディレクトリ：Adobe LiveCycle Content Services (非推奨) を現在のシステムにデプロイしている場合は、lccs_data ディレクトリをバックアップします。このディレクトリは、ローカルドライブまたは共有ネットワークドライブ上のいずれかにあります。

LiveCycle フォント：Configuration Manager (Administration Console で、設定/コアシステム/設定) で指定されている、Adobe フォントディレクトリをすべてバックアップします。その際、ディレクトリ全体をバックアップしてください。

ユーザーによるインストールフォント：LiveCycle ES Update 1 または LiveCycle ES2 環境に追加のフォントをインストールしている場合は、それらのフォントを個別にバックアップします。

監視フォルダー：監視フォルダーをバックアップします。

3.4 事前準備

3.4.1 一般的な考慮事項

インストールを開始する前に、インストールが円滑に実行されるように次の情報を通読してください。

- インストール時間を短縮するには、インストールファイルのローカルコピーを使用して LiveCycle をインストールするか、または DVD から直接インストールします。LiveCycle をネットワークからインストールすると、インストールが失敗する場合があります。
- 入手したインストールメディアが破損していないことを確認します。インストールメディアをコンピューターのハードディスクにコピーする場合は、必ず DVD の内容全体をハードディスクにコピーしてください。
- インストーラーファイルセットをダウンロードした場合は、MD5 チェックサムユーティリティを使用して完全性を検証してください。このユーティリティを使用して、MD5 のチェックサム値とアドビのダウンロード Web サイトに表示されている値を確認します。WinMD5 などのツールを使用できます。
- インストールエラーを避けるには、最大パス長の制限を超えるディレクトリパスに DVD インストールイメージをコピーしないでください。通常、ネットワークパスが長い場合に、このエラーが発生します。詳しくは、<http://msdn.microsoft.com/en-us/library/aa365247.aspx> を参照してください。
- アドビエンタープライズサポートから入手できる LiveCycle のパッチアップデートをダウンロードします。
- インストールを実行するときにオンアクセスウイルススキャンソフトウェアを無効にすると、Windows でのインストール時間が短縮されます。
- 自動インストールでは、次の Windows サービスが作成され、デフォルトで起動時に自動的に実行するよう設定されます。
 - JBoss for Adobe LiveCycle ES3
 - MySQL for Adobe LiveCycle ES3 (部分的な自動インストールオプションを選択した場合は該当しません)これらのサービスは、自動アップグレード用にアプリケーションサーバーとデータベースを管理します。これらのサービスは、Windows サービスコントロールマネージャーを使用して開始、停止および一時停止できます。Windows サービスコントロールマネージャーを開くには、コントロールパネル/管理ツール/サービスに移動します。このツールを使用すると、コンピューター起動時に開始するよう、または手動による開始を要求するよう、サービスを設定することもできます。
- 自動インストールによって、LiveCycle コンポーネントはデフォルトで C:\Adobe\Adobe LiveCycle ES3\ ディレクトリに配置されます。

重要: 別のディレクトリにインストールする場合は、ディレクトリ名に「test」(C:\test など) という名前を使用しないでください。この名前を使用すると、MySQL のインストールプロセスが失敗します。
- デフォルトでは、JBoss は [JBoss root] ディレクトリにインストールされ、ここから実行されます。

3.4.2 Windows インストールの設定

64 ビット Windows Server 2008 R1、Windows Server 2008 R2、Windows Vista または Windows 7 の各オペレーティングシステムでは、次のように管理者承認モードのセキュリティオプションを変更します。

- 1 (Windows 2008 R1 および Windows Vista) スタート/コントロールパネル/管理ツール/ローカルセキュリティポリシー/ローカルポリシー/セキュリティオプションに移動します。
(Windows 2008 R2 および Windows 7) スタート/管理ツール/ローカルセキュリティポリシー/ローカルポリシー/セキュリティオプションに移動します。

- 2 「ユーザー アカウント制御 : 管理者承認モードでの管理者に対する昇格時のプロンプトの動作」を「確認を要求しないで昇格する」に設定します。
- 3 コンピューターを再起動します。

3.4.2.1 Vista および Windows Server 2008 R1 上での Windows UAC の無効化

- 1 システム構成ユーティリティにアクセスするには、スタート / ファイル名を指定して実行を選択し、MSCONFIG と入力します。
- 2 「ツール」タブをクリックし、スクロールして「UAC の無効化」を選択します。
- 3 「起動」をクリックして新しいウィンドウでコマンドを実行します。
- 4 完了したら、コマンドウィンドウを閉じ、システム構成ウィンドウを閉じます。
- 5 コンピューターを再起動します。

UAC を再度有効にするには、上記の手順を繰り返し、「UAC の有効化」を選択してから「起動」をクリックします。

3.4.2.2 Windows 7 および Windows Server 2008 R2 上での Windows UAC の無効化

- 1 システム構成ユーティリティにアクセスするには、スタート / ファイル名を指定して実行を選択し、MSCONFIG と入力します。
- 2 「ツール」タブをクリックし、スクロールして「UAC 設定の変更」を選択します。
- 3 「起動」をクリックして新しいウィンドウでコマンドを実行します。
- 4 スライダーを「通知しない」のレベルに設定します。
- 5 完了したら、コマンドウィンドウを閉じ、システム構成ウィンドウを閉じます。
- 6 コンピューターを再起動します。

UAC を再度有効にするには、上記の手順を繰り返し、スライダーを目的のレベルに設定してからコンピューターを再起動します。

重要 : PDF Generator が正しく動作するように、Windows のユーザー アカウント制御 (UAC) を無効のままにしておく必要があります。UAC の「確認を要求しないで昇格する」オプションを有効にすることで、インストールおよび設定のプロセスを実行できます。ただし、PDF Generator を実行するには、UAC を無効にします。

3.4.3 Reader Extensions 証明書

Reader Extensions をインストールする場合は、有効な資格情報とパスワードがあることを確認してください。情報が確認できない場合は、アドビの営業担当者にお問い合わせください。LiveCycle の設定とデプロイを行うときに Reader Extensions 資格情報の読み込みをスキップして、後から管理コンソールの Trust Store コンポーネントを使用して資格情報をインストールすることもできます。

3.4.4 PDF Generator の事前設定

ネイティブアプリケーションファイルサポートによって、PDF Generator では、Microsoft Word などのネイティブ形式から Adobe PDF 形式にファイルを変換できます。PDF Generator をインストールする前に、次のタスクを実行してください。

注意 : Microsoft Office 2007 および 2010 のドキュメント (DOCX、XLSX および PPTX ファイル) にインデックスを作成するには、Adobe LiveCycle Content Services (非推奨) 用のサーバーに PDF Generator をインストールする必要があります。

3.4.4.1 ネイティブファイル変換のためのソフトウェアのインストール

PDF Generator をインストールする前に、PDF 変換サポートが必要な、ネイティブファイルタイプをサポートするソフトウェアをインストールします。さらに、アプリケーションサーバーの実行に使用したのと同じユーザー アカウントを使用して、ソフトウェアのライセンスを手動でアクティベートします。

LiveCycle による変換で使用するネイティブアプリケーションごとにライセンス契約を参照し、ライセンス要件を満たしていることを確認してください。

PDF Generator の機能を拡張すると、次のアプリケーションを使用して PDF に変換できるファイルの種類を追加できます。

- Microsoft Office 2007、2010 (DOC、XLS、PPT、RTF、TXT、Microsoft Office open XML 形式)
- Microsoft Office Visio 2007、2010 (VSD)
- Microsoft Publisher 2007、2010 (PUB)
- Microsoft Project 2007、2010 (MPP)
- AutoCAD 2005、2006、2007、2008 (DWG、DXF、DWF)
- Corel WordPerfect 12、X4 (WPD)
- Adobe® Photoshop® CS2
- Adobe® FrameMaker® 7.2、8.0 (FM)
- Adobe® PageMaker® 7.0 (PMD、PM6、P65、PM)
- OpenOffice 3.3、(ODT、ODP、ODS、ODG、ODF、SXW、SXI、SXC、SXD、SXM)

注意：LiveCycle では、上記のすべてのソフトウェアについて、32 ビット版のみがサポートされています。

注意：OpenOffice 3.3 で作成されたドキュメントを変換するには、バージョン 3.3 をサーバーにインストールします。

Linux プラットフォームでは、OpenOffice は /root ユーザーの下でインストールされている必要があります。OpenOffice が特定のユーザー用にインストールされている場合は、PDFG が OpenOffice ドキュメントを変換できない可能性があります。

次のネイティブファイルの形式を変換するために、ネイティブソフトウェアアプリケーションをインストールする必要はありません。

- Web ファイル (HTML)
- Print ファイル (PS、PRN、EPS)
- 画像ファイル (JPEG、GIF、BMP、TIFF、PNG)

3.4.4.2 Adobe Acrobat for PDF Generator のインストール

LiveCycle インストーラーを実行する前に Adobe® Acrobat® X Pro をインストールします。PDF Generator の設定の問題を回避するために、Acrobat をインストールした後必ず 1 回は Acrobat を起動してください。Acrobat の起動時に表示されるすべてのモーダルダイアログボックスを閉じます。

LiveCycle インストーラーにより、Acrobat_PATH (大文字 / 小文字が区別されます) 環境変数が自動的に設定されます。この環境変数を手動で設定する方法については、32 ページの「[5.17.1 環境変数の設定](#)」を参照してください。環境変数を設定したら、アプリケーションサーバーを再起動します。

LiveCycle Encryption サービスで AES 256 暗号化を使用して PDF ドキュメントを暗号化するには、Java Cryptography Extension (JCE) Unlimited Strength Jurisdiction Policy ファイルを入手し、インストールする必要があります。自動インストールでインストールされた Oracle JDK の場合は、Java SE Downloads から JCE ファイルをダウンロードします。ポリシーファイルをダウンロードしたら、[Adobe_JAVA_HOME]/jre/lib/security フォルダーにある既存の local_policy.jar ファイルおよび US_export_policy.jar ファイルを、ダウンロードした JAR ファイルに置き換えます。

3.4.4.3 PDF Generator のマルチスレッドファイル変換およびマルチユーザーサポートの有効化

デフォルトでは、PDF Generator は、一度に 1 つの OpenOffice、Microsoft Word または PowerPoint ドキュメントのみを変換できます。マルチスレッド変換を有効にした場合、OpenOffice または PDFMaker のインスタンスを複数起動することにより、PDF Generator で同時に複数のドキュメントを変換できます。

注意: Microsoft Excel (200 および 2010 バージョン) はサポートされていません。マルチスレッドファイル変換を有効にするには、Microsoft Word 2007 または 2010 および PowerPoint 2007 または 2010 にアップグレードしてください。

注意: Microsoft Excel ファイルと Microsoft Visio ファイルは同時には変換されません。変換中、EXCEL.exe と VISIO.exe はタスクマネージャーで監視されます。Visio ファイルは、Excel ファイルの処理が完了した後に処理されます。

OpenOffice または PDFMaker の各インスタンスは、それぞれ別のユーザーアカウントを使用して起動されます。追加する各ユーザーアカウントは、LiveCycle サーバーコンピューター上の管理者権限を持つ有効なユーザーである必要があります。64 ビット Windows では、Windows UAC を無効にします。詳しくは、7 ページの「[3.4.2 Windows インストールの設定](#)」を参照してください。

OpenOffice、Microsoft Word または Microsoft PowerPoint のユーザーを追加する場合は、すべてのユーザーに関して、最初に表示されるアクティベート用のダイアログを閉じます。LiveCycle サーバーの設定が完了したら、管理コンソールで LiveCycle ユーザーアカウントを追加します。35 ページの「[5.17.7 マルチスレッドファイル変換のユーザーアカウント](#)」を参照してください。

Windows 環境でネイティブファイルおよび OpenOffice ファイルのマルチユーザーサポートを有効にするには、次の権限を持つユーザーを 3 人以上追加します。

プラットフォーム	ユーザー権限
Windows Server 2008	管理者権限を持ち、UAC を無効にしたユーザー
Windows Server 2003	管理者権限を持つユーザー

PDF Generator ネイティブ変換用のユーザーを追加する場合は、ユーザーに「サービスとしてログオン」権限を付与する必要があります。詳しくは、10 ページの「[3.4.4.4 「サービスとしてログオン」権限の付与](#)」を参照してください。

3.4.4.4 「サービスとしてログオン」権限の付与

Windows オペレーティングシステムに PDF Generator をインストールする場合は、LiveCycle をインストールするユーザーに対して「サービスとしてログオン」権限を付与します。

- 1 スタート/コントロールパネル/管理ツール/ローカルセキュリティポリシー/ローカルポリシー/ユーザー権利の割り当てを選択します。
- 2 「サービスとしてログオン」をダブルクリックして、「ユーザーまたはグループを追加」をクリックします。
- 3 Microsoft 管理者のユーザー名を入力して「OK」をクリックします。

第4章：LiveCycle ES3へのアップグレード、およびLiveCycle ES3の設定とデプロイ

4.1 LiveCycle のインストール

LiveCycle のデフォルトのインストール先ディレクトリは C:\Adobe\Adobe LiveCycle ES3 です。LiveCycle をインストールした後、Configuration Manager を実行して、LiveCycle ES3へのアップグレードを実行します。

4.1.1 LiveCycle のインストール

1 次のいずれかを実行します。

- ダウンロードサイトから、ファイルシステムに JBoss_DVD.zip ファイル (LiveCycle Electronic Software Distribution または ESD ファイル) をダウンロードし、すべての内容を展開します。JBoss_DVD.zip ファイルのディレクトリ階層は変更しないでください。
 - ZIP ファイルを抽出したら、次のいずれかの方法を使用してインストーラーを起動します。
 - (32 ビットシステムの場合) \\$server\\$Disk1\\$InstData\\$Windows\\$VM フォルダーの **install.exe** ファイルをダブルクリックします。
 - (64 ビットシステムの場合) \\$server\\$Disk1\\$InstData\\$Windows_64\\$VM フォルダーの **install.exe** ファイルをダブルクリックします。
- JBoss DVD から \server フォルダーに移動します。次のいずれかの方法でインストーラーを起動します。
 - (32 ビットシステムの場合) \\$server\\$Disk1\\$InstData\\$Windows\\$VM フォルダーの **install.exe** ファイルをダブルクリックします。
 - (64 ビットシステムの場合) \\$server\\$Disk1\\$InstData\\$Windows_64\\$VM フォルダーの **install.exe** ファイルをダブルクリックします。

注意：32 ビットバージョンは、開発および評価専用のバージョンです。

2 プロンプトが表示されたら、インストールで使用する言語を選択して「OK」をクリックします。

3 はじめに画面で「次へ」をクリックします。

4 アップグレードの準備画面で、以前のバージョンの LiveCycle がターゲットマシンにインストールされている場合にのみ表示されます。次のいずれかの操作を実行します。

- 「既存のインストールを Adobe LiveCycle ES3 にアップグレードする準備」を選択して、LiveCycle ES3 にアップグレードします。表示されたパスがアップグレードする LiveCycle のインストール場所を指していない場合は、「参照」をクリックして、アップグレードする LiveCycle インスタンスのパスを指定します。
- 「Adobe LiveCycle ES3 をインストール」を選択して、新しいインスタンスの LiveCycle をインストールします。

5 インストールフォルダーを選択画面で、表示されたデフォルトのディレクトリをそのまま使用するか、「選択」をクリックして LiveCycle のインストール先ディレクトリを選択してから、「次へ」をクリックします。このディレクトリを [LiveCycle root] と呼びます。デフォルトのインストールパスは C:\Adobe\Adobe LiveCycle ES3 です。

「デフォルトのフォルダーに戻す」ボタンを使用すると、ユーザーが追加したパスがデフォルトのインストールパスに置き換えられます。

注意：インストールディレクトリパスの長さは 40 文字を超えないようにしてください。また、国際文字や特殊文字を使用しないでください。

- 6 部分的な自動インストールオプション画面で、事前設定済みの MySQL データベースサーバーを含めるか、LiveCycle と共に使用する独自の外部データベースサーバーを選択することができます。

注意：この画面は、Livecycle ES Update 1 または LiveCycle ES2 の部分的な自動インストールによるアップグレードを実行している場合にのみ表示されます。

- 7 インストールタイプを選択画面で、インストールタイプを選択し、「次へ」をクリックします。

- 通常の自動インストールの場合、インストールタイプとして「標準」の下の「自動」を選択します。自動オプションでは、LiveCycle、JBoss Application Server (JBoss 5.1 または JBoss 4.2.1)、MySQL 5.1.30 データベースおよび JDK 1.6.0_26 がインストールされます。
- 事前設定した MySQL データベース以外のデータベースを使用する場合は、「カスタム」の下にある「部分的な自動オプション」を選択します。LiveCycle、JBoss Application Server および JDK 1.6.0_26 はデフォルトでインストールされます。
- 自動インストールではなくカスタムインストールを行う場合は、「手動」を選択します。このオプションは、JBoss Application Server および MySQL データベースが既にシステムにインストールされており、それに LiveCycle インストーラーで作成されるのと同じ Windows サービス名がつけられている場合にデフォルトで選択されます。

注意：この画面は、アップグレードの準備画面で「Adobe LiveCycle ES3 をインストール」を選択するか、以前のバージョンの LiveCycle がインストールされていないコンピューターに LiveCycle をインストールする場合にのみ表示されます。

注意：手動インストールの場合、操作を続行する前に、『LiveCycle ES3 へのアップグレード (JBoss 版)』、『LiveCycle ES3 へのアップグレードの準備』の各ガイドを参照してください。

- 8 JBoss バージョンの選択画面で、LiveCycle と共に使用する JBoss のいずれかのバージョンを選択します。

- JBoss 5.1 (推奨)** : JBoss 5.1 にアップグレードするには、このオプションを選択します。
- JBoss 4.2.1** : JBoss 5.1 用のカスタムアプリケーションのリファクタリングや作成し直しを避けるには、このオプションを選択します。ただし、以後の JBoss 4.2.1 のアップグレードはサポートされなくなります。

- 9 (インストーラーと共に提供される MySQL のみ) MySQL データベースの選択画面で、MySQL ルート管理者のパスワードを設定し、必要に応じて、MySQL のポート番号を入力します。この画面は、「MySQL の自動オプションを含める」オプションを選択した場合に、自動インストールまたは部分的な自動インストールを実行している場合にのみ表示されます。

注意：部分的な自動インストールオプション画面で、「データベースを使用」を選択した場合は、この画面は表示されません。

注意：MySQL ではユーザー名またはパスワードに特殊文字とスペースを使用できません。このパスワードは、今後の参考用に記録しておいてください。

- ポート番号が未使用であることを確認するには、「テスト」をクリックします。ポートが使用可能な場合は、緑のチェックマークが表示されます。ポートが使用中の場合は、赤の X が表示されます。
- ポートが使用中の場合は、新しいポート番号を入力して処理を繰り返し、使用可能なポートを見つけてください。「リセット」をクリックすると、ポートのボックスにデフォルトのポート番号である **3306** が入力されます。

注意：以前の LiveCycle がインストールされていた同じサーバーマシンでアップグレードする場合、既存の LiveCycle インスタンスが MySQL に使用しているポートとは異なるポートを指定します。

- 10 JBoss Application Server 使用許諾契約書を読み、同意する場合は「同意します」を選択し、「次へ」をクリックします。

- 11 (インストーラーと共に提供される MySQL を使用する場合のみ) MySQL 使用許諾契約書を読み、同意する場合は「同意します」を選択し、「次へ」をクリックします。この画面は、「部分的な自動オプション」を使用するときに、「自動」または「MySQL の自動オプションを含める」が選択されている場合にのみ表示されます。

- 12 Adobe LiveCycle ES3 Server 使用許諾契約書を読み、同意する場合は「**同意します**」を選択し、「**次へ**」をクリックします。
 - 13 プリインストールの概要を確認して、「**インストール**」をクリックします。インストールプログラムによりインストールの進行状況が表示されます。このプロセスは、完了するまでに数分かかる場合があります。
 - 14 リリースノートを確認して「**次へ**」をクリックします。
 - 15 インストール完了画面で、次のいずれかのオプションを選択します。
 - Connectors for ECM をアップグレードする場合は、「Configuration Manager を起動」の選択を解除して「完了」をクリックし、「13 ページの「[4.2 アップグレードのための Connectors for ECM の準備](#)」に移動してください。'.
 - サービスピックの更新が必要ない場合は、「**Configuration Manager を起動**」が選択されていることを確認し、「完了」をクリックします。
 - サービスピックの更新が必要な場合は、「**Configuration Manager を起動**」オプションの選択を解除し、「完了」をクリックしてインストーラーを終了します。
- 注意：**「**Configuration Manager を起動**」の選択を解除し、インストーラーを終了すると、[LiveCycle root]\configurationManager\bin にある ConfigurationManager.bat ファイルを使用して、Configuration Manager を後で実行できます。

4.2 アップグレードのための Connectors for ECM の準備

Connector for EMC Documentum、Connector for IBM FileNet または Connector for IBM Content Manager を、LiveCycle ES Update 1 または LiveCycle ES2 からアップグレードする場合、LiveCycle のインストール後、Configuration Manager を起動してアップグレードプロセスを完了する前に、アプリケーションサーバーのシステムを設定する必要があります。

注意：新しいコンピューターでアップグレードを実行しない場合は、手順 2 に進みます。

- 1 (新しいコンピューターへのアウトオブプレースアップグレードのみ) 新しいアプリケーションサーバーをホストする新しいコンピューターに ECM リポジトリのクライアントをインストールします。
- 2 アップグレードを開始する前に、新しいアプリケーションサーバーで Connectors for ECM に関連するすべての設定 (Administration Console の設定は除く) を実行します。このガイドの「デプロイメント完了後の作業」の各コネクタの設定の項を参照してください。
- 3 既存の LiveCycle サーバーの [JBoss root]/bin ディレクトリに移動し、ターゲットサーバーの対応するディレクトリに adobe-component-ext.properties ファイルをコピーします。
- 4 アプリケーションサーバーを再起動します。

Configuration Manager の実行を続行して、LiveCycle ES3 にアップグレードできるようになりました。

重要：Connector for EMC Documentum または Connector for IBM FileNet の場合、デフォルトのリポジトリを LiveCycle ネイティブリポジトリプロバイダーに設定する必要があります。このように設定しないと、アップグレードのデプロイメントが失敗します。これらのコネクタのいずれかに対して、ECM リポジトリプロバイダーをデフォルトのリポジトリとして設定した場合、Administration Console を開き、サービス / LiveCycle ES Update1 または LiveCycle ES2 [connector type] / 設定に移動します。「LiveCycle ES Update1 リポジトリプロバイダー」または「LiveCycle ES2 リポジトリプロバイダー」オプションを選択して、「保存」をクリックします。

4.3 サービスパックのインストール

Configuration Manager を使用した設定を完了する前に、LiveCycle 用の最新のサービスパックを適用します。これらのアップデートはアドビエンタープライズサポートで入手できます。

4.4 LiveCycle ES3 の設定

ここまで手順で LiveCycle ES3 がインストールされ、アップグレード設定を開始する準備が整いました。Configuration Manager ウィザードで、アップグレードに必要なタスクが実行されます。

4.4.1 LiveCycle の設定

注意：Correspondence Management Solution をインストールする予定の場合、Configuration Manager を実行する前に、Correspondence Management Solution インストーラーを実行する必要があります。詳しくは、[Installing Correspondence Management Solution](#) を参照してください。

注意：Configuration Manager の実行中に **F1** キーを押すと、現在表示されている画面に関するヘルプ情報が表示されます。「進行状況ログを表示」をクリックすると、いつでも設定の進行状況を確認できます。

- 1 LiveCycle のインストールから続けて作業をしている場合は、手順 3 に進みます。それ以外の場合は、[LiveCycle root]\configurationManager\bin フォルダーに移動して ConfigurationManager.bat を実行します。
- 2 プロンプトが表示されたら、使用する言語を選択して、「OK」をクリックします。
- 3 既存の設定データを使用するように求められた場合は、「OK」をクリックします。
- 4 Adobe LiveCycle ES3 へようこそ画面で、「次へ」をクリックします。
- 5 アップグレードタスクの選択画面で、既存のバージョンの LiveCycle について適切なオプションを選択し、「次へ」をクリックします。
- 6 (Adobe LiveCycle ES2 の事前設定された JBoss を LiveCycle ES3 で再利用する場合のみ) Crypto JAR のコピー画面で、JBoss_DVD/third_party/jboss-4.2.1_jars/crypto から [LiveCycle ES2 or LiveCycle ES2.5 JBoss 4.2.1 Home]/server/<server_profile>/lib に JCEFIPS.jar, jsafeFIPS.jar および certjFIPS.jar をコピーします。

注意：この手順は、LiveCycle ES2 または LiveCycle ES2.5 のアドビが事前設定した JBoss と JBoss 4.2.1 を利用して LiveCycle ES3 にアップグレードする場合にのみ適用されます。

- 7 Correspondence Management Solution の選択画面では、デフォルトで「Correspondence Management Solution 10.0.2」オプションが選択されています。このオプションが選択されている場合、Correspondence Management Solution を設定する画面が表示されます。

「次へ」をクリックして、続行します。

注意：この画面は、Correspondence Management Solution がインストールされている場合にのみ表示されます。

4.4.2 モジュールの選択

- ❖ モジュール画面で、アップグレードする Adobe LiveCycle モジュールが選択されていることを確認します。デフォルトでは、選択したすべてのモジュールは評価版ライセンスが供与されます。「次へ」をクリックします。

重要：以前の LiveCycle インスタンスで設定されているすべてのモジュールが選択されていることを確認します。別のモジュールをデプロイすることもできます。

4.4.3 タスクの選択

- ❖ タスク選択画面で、使用可能なタスクがすべて選択されていることを確認して、「次へ」をクリックします。

注意：「アプリケーションサーバーを設定」と「アプリケーションサーバーの設定を検証」の各タスクは、JBoss 自動オプションでは選択できません。アプリケーションサーバーが既に LiveCycle 用に設定されているので、JBoss 自動オプションでこれらのタスクはサポートされません。

4.4.4 要件の確認

- ❖ アップグレード前のステップ画面またはアップグレード前のステップ（続き）画面で要件を確認し、ご使用の環境に関連するすべてのタスクを実行して、「次へ」をクリックします。

4.4.5 JBoss の停止

- ❖ LiveCycle を停止画面で、ボタンをクリックして LiveCycle ES Update 1 または LiveCycle ES2 JBoss サービスを停止し、「次へ」をクリックします。

4.4.6 グローバルドキュメントストレージディレクトリの移行

- ❖ グローバルドキュメントストレージ (GDS) ディレクトリと他の LiveCycle ES コンテンツを移行します画面で、「内容を移行」をクリックして、既存の LiveCycle の内容を新しい LiveCycle ES3 の場所にコピーします。完了したら、「次へ」をクリックします。

注意：LiveCycle ES Update 1 または LiveCycle ES2 で GDS の場所を変更した場合、GDS の内容を手動で移行します。

4.4.7 カスタムデータソースの移行

- ❖ LiveCycle の以前のインスタンスをインストールした後にカスタムデータソースを作成していた場合は、カスタムデータソースの移行画面で、「データソースの読み込み」オプションを選択し、「開始」をクリックして、カスタムデータソースを読み込みます。完了したら、「次へ」をクリックします。

カスタムデータソースがない場合は、このオプションを選択せずに、「次へ」をクリックします。

4.4.8 LiveCycle EAR、フォントおよび GDS の設定

1 LiveCycle ES3 を設定 (1/5) 画面で、「設定」をクリックします。EAR ファイルの設定が完了したら、「次へ」をクリックします。設定に含まれているモジュールの数によっては、このプロセスが完了するまでに数分かかる場合があります。

2 LiveCycle ES3 を設定 (2/5) 画面で、LiveCycle でフォントへのアクセスに使用するディレクトリを設定し、「次へ」をクリックします。

 この画面上の値を変更するには、「設定を編集」をクリックします。このボタンは、Configuration Manager を最初に実行したときには使用できませんが、2 回目およびそれ以降の実行では使用できるようになります。

- (オプション) 「Adobe サーバーフォントディレクトリ」のデフォルトの場所を変更するには、パスを入力するか、ディレクトリを参照します。デフォルトのパスは、[LiveCycle root]/fonts です。
- 「カスタマーフォントディレクトリ」のデフォルトの場所を変更するには、「参照」をクリックするか、カスタマー フォントの新しい場所を指定します。

注意：アドビ システムズ社以外が提供しているフォントを使用するユーザーの権利は、それらのフォントを所有する会社が提供する使用許諾契約書に拘束されるもので、アドビソフトウェアを使用するための使用許諾契約書は適用されません。アドビ システムズ社以外が提供しているフォントをアドビソフトウェアで使用する前に、適用されるアドビ システムズ社以外の使用許諾契約書すべてに準拠していることを確認してください。特に、サーバー環境でフォントを使用する際は注意が必要です。

- (オプション) 「システムフォントディレクトリ」のデフォルトの場所を変更するには、パスを入力するか、ディレクトリを参照します。
- (オプション) FIPS を有効にするには、「**FIPS を有効にする**」を選択します。このオプションは、連邦情報処理規格 (FIPS) を適用する場合にのみ選択してください。

- 3 LiveCycle ES3 を設定 (3/5) 画面で、「一時ディレクトリの場所」をデフォルト値のままにするか、パスを入力するか、「参照」をクリックしてパスを指定します。「次へ」をクリックして、続行します。
- 4 LiveCycle を設定 (4/5) 画面で、「グローバルドキュメントストレージディレクトリバス」をデフォルト値のままにするか、「参照」をクリックして完全修飾パスを指定します。LiveCycle ES Update 1 または LiveCycle ES2 でデフォルトの GDS ディレクトリを使用していない場合、アップグレードを正常に完了するには、LiveCycle ES3 のディレクトリを指定し、以前の GDS ディレクトリの内容をこの新しい場所にコピーする必要があります。

注意：GDS の内容を 15 ページの「[4.4.6 グローバルドキュメントストレージディレクトリの移行](#)」の手順で LiveCycle ES3 のインストールに移行した場合、「グローバルドキュメントストレージディレクトリのバス」の事前設定された値は変更しないでください。

- 5 永続的なドキュメントストレージを設定 (5/5) 画面で、「**GDS を使用**」または「**データベースを使用**」を選択し、「**設定**」をクリックします。
 - **GDS を使用**：すべての永続的なドキュメントストレージにファイルシステムベースの GDS を使用します。このオプションでは、最高のパフォーマンスを実現し、ストレージの場所として GDS だけを使用します。
 - **データベースを使用**：永続的なドキュメントや長期間有効な成果物の保存に、LiveCycle データベースを使用します。ただし、ファイルシステムベースの GDS も必要です。データベースを使用することにより、バックアップと復元の手順が簡単になります。

「次へ」をクリックします。

4.4.9 Content Services の設定

- 1 Content Services の設定画面で、コンテンツを格納する場所を指定します。デフォルトのパスは、[LiveCycle root]/lccs_data です。

注意：この場所は、LiveCycle の以前のインストールのコンテンツ保存場所のルートディレクトリである必要があります。新しい場所を指定する場合は、以降の操作を行う前に、以前の LiveCycle インストールで設定されたコンテンツ保存場所のルートディレクトリからこの新しい場所に内容をコピーする必要があります。

ファイルサーバーを設定する場合は「**ファイルサーバーを設定 (CIFS および FTP)**」を、受信用電子メールサーバーやディスク使用などに関する設定を指定する場合は「**詳細設定**」を選択します。「次へ」をクリックします。

- 2 Content Services ファイルサーバー設定画面で、CIFS および FTP サーバーに必要なパラメーターを設定します。この画面は、Content Services 設定画面で「**ファイルサーバーを設定**」オプションを選択した場合にのみ表示されます。
 - **FTP サーバーポート**：ポート番号を入力するには、「**FTP サーバーを有効にする**」オプションが選択されていることを確認してください。FTP サーバーで通信に使用するポート番号を指定します。デフォルトのポート番号は 8021 です。
 - **CIFS サーバー名**：CIFS サーバー名を入力する際、「**CIFS を有効にする**」オプションが選択されていることを確認してください。Content Services リポジトリは、「**CIFS サーバー名**」ボックスに示されているサーバー名によってアクセスできます。例えば、cifs-servername と指定します。

- **CIFS サーバー実装を選択** : Java (ソケットベース) または Windows ネイティブ (DLL ベース) を選択します。
CIFS 実装のタイプが Java (Socket Based) の場合は、次の詳細情報を入力します。
 - **代替の IP アドレス** : CIFS サーバーの IP アドレス。
 - **プライマリ WINS サーバーの IP アドレス** : IP アドレスを動的にコンピューター名にマップする Windows Internet Name Service (WINS) サーバー。ローカルドメインの解決に使用されます。プライマリ WINS サーバーの IP アドレスを指定します。IP アドレスの値は ipconfig/all コマンドで確認できます。
 - **セカンダリ WINS サーバーの IP アドレス** : セカンダリ WINS サーバーの IP アドレス。IP アドレスの値は ipconfig/all コマンドで確認できます。
 - **ブロードキャスト IP アドレス** : ローカルドメインの解決に使用するブロードキャスト IP アドレス。
- CIFS 実装のタイプが Windows ネイティブ (DLL ベース) の場合：
 - **CIFS dll をコピーするためのシステムパス** : Configuration Manager が CIFS dll ファイルをコピーするための場所を指定します。

「次へ」をクリックします。

- 3 Content Services の詳細設定画面で、必要なオプションを選択します。この画面では、ディスクの使用容量を制限し、受信用電子メールサーバーの設定を指定できます。この画面は、Content Services の設定画面で「**詳細設定**」を選択した場合にのみ表示されます。

- **Content Services イベントを LiveCycle に伝播する** : 作成、削除、更新、チェックインおよびチェックアウトなどの Content Services サービスイベントを LiveCycle プロセスに伝播する場合に選択します。
- **Content Services で監査を有効化** : 選択すると、Content Services とアプリケーションまたはユーザーとのやり取りを記録できます。
- **ディスクの使用容量を有効にする** : Content Services のユーザーのディスクの使用容量をメガバイト単位で指定します。ユーザーが指定された容量を超える量のデータを追加しようとした場合、エラーメッセージが表示されます。
- **受信用の電子メールサーバーの設定** : メッセージが転送される内部電子メールサーバーを設定します。関連する設定：
 - **メールサーバードメイン** : 受信用電子メールサーバーのドメイン。
 - **メールサーバーポート** : 電子メールサーバーが受信接続をリスンするポート。デフォルトのポート番号は 25 です。
 - **許可される電子メール送信者** : 許可される電子メール送信者のドメイン。
 - **ブロックされる電子メール送信者** : ブロックされる電子メール送信者のドメイン。
 - **不明なユーザー**

「次へ」をクリックします。

- 4 Content Services モジュール設定画面で、Content Services でパッケージ化する AMP を選択します。Content Services でカスタムの AMP をパッケージングできます。「**Content Services で独自の AMP をパッケージングしますか？**」「**設定**」をクリックして Content Services モジュールを設定します。完了したら、「次へ」をクリックします。

重要: 以前のバージョンの LiveCycle でカスタム AMP のパッケージングを選択した場合は、それらの AMP を再度指定して、LiveCycle EAR で再パッケージングする必要があります。

4.4.10 PDF Generator 用の Acrobat の設定

- 1 (PDF Generator のみ) Acrobat を LiveCycle PDF Generator に合わせて設定画面で、「**設定**」をクリックして設定スクript を実行します。完了したら、「次へ」をクリックします。
- 2 LiveCycle の概要を設定画面で、「次へ」をクリックします。

4.4.11 LiveCycle データベースの設定

重要：以下の手順を実行する前に、MySQL の古いバージョンと現在のバージョンが実行されていることを確認してください。

重要：アップグレードの準備画面で、「**Adobe LiveCycle ES3 をインストール**」オプションを選択した場合、またはこれまでに LiveCycle ES Update1 または LiveCycle ES2 をインストールしたことのないコンピューターに LiveCycle ES3 をインストールする場合は、古い LiveCycle データベースを LiveCycle ES3 データベースに読み込む必要があります。

- 1 LiveCycle データベース画面で、LiveCycle で使用するデータベースに関する情報を指定し、「接続を検証」をクリックしてこの接続をテストします。「次へ」をクリックします。
 - 2 以前の LiveCycle データベース画面で、アップグレードする LiveCycle データベースに関する情報を指定し、「接続を検証」をクリックしてこの接続をテストします。「次へ」をクリックします。
- 注意：**この画面は、アップグレードの準備画面で、「既存のインストールを Adobe LiveCycle ES3 にアップグレードする準備」オプションを選択した場合にのみ表示されます。
- 3 MySQL リレーショナルデータベースをアップグレード画面で、「MySQL をアップグレード」をクリックして古い LiveCycle データを新しい MySQL データベースに移行します。

注意：この画面は、アップグレードの準備画面で、「既存のインストールを Adobe LiveCycle ES3 にアップグレードする準備」オプションを選択した場合にのみ表示されます。

4.4.12 自動オプションの JBoss SSL の設定

- ❖ 自動オプションの JBoss SSL を設定画面で、SSL 証明書の設定に関する情報を入力し、「**JBoss SSL を設定**」をクリックします。設定が完了したら、「次へ」をクリックします。
「設定をスキップ」を選択してこの手順をスキップし、後で LiveCycle Configuration Manager を使用して設定することもできます。
 - **証明書エイリアス**：証明書の参照に使用する一意の代替名（例：LiveCycleCert）。
 - **キーストアファイル名**：鍵および証明書の保存に割り当てられたキーストア名（例：lces）。

4.4.13 検証サンプルのインストール

- ❖ (Forms、Output および Assembler のみ) LiveCycle ES3 インストール検証サンプル (IVS) EAR ファイル画面では、サービス用の 3 つのサンプルアプリケーションをインストールできます。これらのサンプルファイルをインストールするには、「**IVS EAR をデプロイメントセットに含めます**」を選択し、「次へ」をクリックします。
adobe-output-ivs-jboss.ear および adobe-forms-ivs-jboss.ear は、モジュール画面で該当するモジュールを選択している場合にのみ表示されます。

注意：IVS EAR ファイルは実稼働環境にデプロイしないでください。

4.4.14 LiveCycle EAR のデプロイ

- ❖ LiveCycle ES3 EAR ファイルをデプロイ画面で、JBoss にデプロイする EAR ファイルを選択し、「**デプロイ**」をクリックします。完了したら、「次へ」をクリックします。
- 注意：**LiveCycle への EAR ファイルのデプロイメント中、EAR が適切なテーブルを見つけることができない旨のエラーが表示されることがあります。これらのエラーは無視してかまいません。

4.4.15 LiveCycle データベースの初期化

- ❖ LiveCycle ES3 データベースの初期化画面で、ホストとポートの情報を確認して、「初期化」をクリックします。データベースの初期化タスクによって、データベースにテーブルが作成され、デフォルトのデータがテーブルに追加されて、データベースに基本的なロールが作成されます。初期化が正常に完了したら、「次へ」をクリックします。
 この手順はスキップしないでください。データベースを初期化しても従来のデータは破損しません。

4.4.16 LiveCycle サーバー情報

- ❖ LiveCycle サーバー情報画面で、以前のバージョンの LiveCycle の管理者ユーザー ID とパスワードを入力し、「サーバー接続を検証」をクリックします。検証が完了したら、「次へ」をクリックします。

この画面に表示されるサーバー情報はデプロイメント時のデフォルト値です。サーバー接続の検証は、デプロイメントや検証でエラーが発生した場合に、トラブルシューティングの対象を絞り込むのに役立ちます。接続テストが正常に終了しても以降の段階でデプロイメントや検証のエラーが発生する場合は、接続の問題をトラブルシューティングの対象から除外できます。

4.4.17 JNDI 情報

- ❖ LiveCycle ES3 JNDI 情報画面で、JNDI サーバーのホスト名とポート番号を指定し、「接続を検証」をクリックします。検証が完了したら、「次へ」をクリックします。

4.4.18 コンポーネントのデプロイメント前の重要なタスクの実行

- ❖ コンポーネントのデプロイメント前に重要なタスクを実行画面で、「開始」をクリックして、コンポーネントのデプロイメント前に実行する必要があるタスクを実行します。完了したら、「次へ」をクリックします。

4.4.19 セッション ID の移行エラー

- ❖ LiveCycle の古いインスタンスからセッション ID を移行中に発生したエラーを確認し、修正して、「次へ」をクリックします。これらのエラーの修正は重要です。修正しなかった場合、アップグレード後にワークフローの呼び出しが失敗する可能性があります。

4.4.20 Central Migration Bridge Service デプロイメントの設定

- ❖ Central Pro または Web Output Pak を使用して LiveCycle を設定するライセンスがある場合、Central Migration Bridge Service デプロイメント設定画面で、「Central Migration Bridge Service をデプロイメントに含める」を選択し、「次へ」をクリックします。

4.4.21 LiveCycle コンポーネントのデプロイメント

- 1 LiveCycle ES3 コンポーネントのデプロイメント画面で、「デプロイ」をクリックします。ここでデプロイされるコンポーネントは、サービスのデプロイ、統合および実行を目的として LiveCycle サービスコンテナにプラグインされている Java アーカイブファイルです。デプロイメントが正常に完了したら、「次へ」をクリックします。
- 2 LiveCycle ES3 コンポーネントのデプロイメントの検証画面で、「検証」をクリックします。Configuration Manager によって、LiveCycle サーバーでデプロイおよび実行される Java アーカイブファイルが検証されます。検証が正常に完了したら、「次へ」をクリックします。

4.4.22 ECM フォームテンプレートの移行

注意：LiveCycle ES または LiveCycle ES Update 1 からアップグレードされた LiveCycle ES2 から LiveCycle ES3 へのアップグレードで、以前のアップグレードの実行中に以下の手順を実行しなかった場合は、この時点で実行する必要があります。以前のアップグレードで ECM フォームテンプレートを移行した場合、これらの手順をスキップすることもできます。

- 1 ECM フォームテンプレートを移行画面で、次のオプションのいずれかを選択します。
 - ・「**フォームテンプレートの読み込みをスキップ**」オプションを選択して既存のフォームテンプレートの読み込みをスキップし、「次へ」をクリックします。
 - ・「**フォームテンプレートの読み込みをスキップ**」オプションの選択を解除し、「開始」をクリックして既存のフォームテンプレートをすべて読み込み、「次へ」をクリックします。
- 2 (「**フォームテンプレートの読み込みをスキップ**」オプションの選択を解除した場合のみ) ECM フォームテンプレートを移行（続き）画面で、移行する以前の LiveCycle フォームテンプレートを選択または選択解除し、既存のカスタムフォームテンプレートが存在するディレクトリのパスを追加または削除します。完了したら、「次へ」をクリックします。

4.4.23 LiveCycle コンポーネントの設定

- ❖ LiveCycle ES3 コンポーネントを設定画面で、設定する LiveCycle モジュールを選択し、「次へ」をクリックします。次に表示される画面は、この画面で選択した内容によって変わります。

注意：Connectors for ECM モジュールをアップグレードする場合は、この画面でこれらを選択しないでください。LiveCycle でそのモジュールを初めてライセンスする場合にのみ、モジュールを選択し、必要に応じて次の各手順を実行します。

4.4.23.1 Connector for EMC Documentum の設定

- ❖ EMC Documentum のクライアントを指定画面で、次のいずれかのタスクを実行します。
 - ・ 後で EMC Documentum を手動設定するには、「**Connector for EMC Documentum コンテンツサーバーを設定**」オプションの選択を解除し、「次へ」をクリックします。
 - ・ オプションを選択したままにし、適切なバージョンとディレクトリパスを入力して「確認」をクリックします。完了したら、「次へ」をクリックし、次の画面でタスクを完了します。
 - ・ EMC Documentum Content Server 設定を指定画面で、必要な値を入力し、「次へ」をクリックします。
 - ・ Connector for EMC Documentum を設定画面で、「**Documentum Connector を設定**」をクリックします。完了したら、「次へ」をクリックします。

4.4.23.2 Connector for IBM Content Manager の設定

- ❖ IBM Content Manager のクライアントを指定画面で、次のいずれかのタスクを実行します。
 - ・ 後で IBM Content Manager を手動設定するには、「**Connector for IBM Content Manager を設定**」オプションの選択を解除し、「次へ」をクリックします。
 - ・ オプションを選択したままにし、適切なディレクトリパスを入力して「確認」をクリックします。完了したら「次へ」をクリックし、次の画面でタスクを完了します。
 - ・ IBM Content Manager サーバーの設定を指定画面で、必要な値を入力し、「次へ」をクリックします。
 - ・ Connector for IBM Content Manager を設定画面で「**IBM Content Manager Connector を設定**」をクリックします。完了したら、「次へ」をクリックします。

4.4.23.3 Connector for IBM FileNet の設定

❖ IBM FileNet のクライアントを指定画面で、次のいずれかのタスクを実行します。

- ・ 後で IBM FileNet を手動設定するには、「Connector for IBM FileNet Content Manager を設定」オプションの選択を解除し、「次へ」をクリックします。
- ・ オプションが選択されている状態で適切なバージョンとディレクトリパスを入力し、「検証」をクリックします。完了したら、「次へ」をクリックし、次の画面の操作を完了します。
 - IBM FileNet Content Server の設定を指定画面で、必要な値を入力し、「次へ」をクリックします。
 - Connector for IBM FileNet Process Engine を設定画面で、適切なバージョン（有効な場合）とディレクトリパスを入力し、「検証」をクリックします。完了したら、「次へ」をクリックします。
 - IBM FileNet Process Engine サーバーの設定を指定画面で、必要な値を入力し、「次へ」をクリックします。
 - Connector for IBM FileNet を設定画面で、「FileNet Connector を設定」をクリックします。完了したら、「次へ」をクリックします。

4.4.23.4 Connector for Microsoft SharePoint の設定

❖ Adobe LiveCycle ES3 Connector for Microsoft SharePoint を設定画面で、次のいずれかのタスクを実行します。

- ・ 後で Microsoft Sharepoint を手動設定するには、「Adobe LiveCycle ES3 Connector for Microsoft SharePoint を設定」オプションの選択を解除し、「次へ」をクリックします。
- ・ 「Adobe LiveCycle ES3 Connector for Microsoft SharePoint を設定」オプションを選択したままにします。必要な値を入力し、「SharePoint Connector を設定」をクリックします。完了したら、「次へ」をクリックします。

4.4.23.5 ECM Connector の設定の確認

❖ 設定を確認画面で、次のいずれかのタスクを実行します。

- ・ 初めてコネクタを設定する場合、または前の画面で設定のいずれかを変更した場合、「アプリケーションサーバーを再起動」オプションを選択したままにし、「設定を検証」をクリックします。検証に成功したら、「次へ」をクリックします。
- ・ 後でコネクタを設定する場合は、「アプリケーションサーバーを再起動します」オプションの選択を解除し、「設定を検証」をクリックします。検証に成功したら、「次へ」をクリックします。

4.4.23.6 コネクタの手動設定

注意：この画面は、LiveCycle コンポーネントを設定画面で ECM Connector の設定を選択したが、コネクタの画面で ECM Connector の設定をスキップしたときにのみ表示されます。

LiveCycle Connector の設定

- 1 adobe-component-ext.properties という名前のファイルを作成し、そのファイルをアプリケーションサーバーの作業ディレクトリに配置します。
- 2 ECM Java ライブラリを ECM コンポーネントに関連付ける属性を追加します。属性の形式は次のとおりです。
com.adobe.livecycle.Connectorfor[ECM].ext=[Comma delimited list of Jar Files, Resource files and/or Directories]
- 3 アプリケーションサーバーを起動します。
- 4 Configuration Manager の実行が終了し、LiveCycle がデプロイされ実行されている場合は、Administration Console で、EMC Documentum Content Server、IBM Content Manager Datastore、IBM FileNet Content Engine の IP / ポートおよびコネクタ用のユーザーの秘密鍵証明書の場所を指定します。

4.4.23.7 PDF Generator の設定

- 1 PDF のネイティブ変換に必要な管理者のユーザー資格情報画面で、サーバーマシンの管理者権限を持つユーザーのユーザー名とパスワードを入力します。「ユーザーを追加」をクリックします。

Windows Server 2008 の場合は管理ユーザーを 1 人以上追加し、「次へ」をクリックします。

注意：Windows Server 2008 で、追加するユーザーのユーザーアカウント制御 (UAC) を無効にする必要があります。UAC を無効にするには、コントロールパネル／ユーザーアカウント／ユーザーアカウント制御の有効化または無効化をクリックし、「ユーザーアカウント制御 (UAC) を使ってコンピューターの保護に役立たせる」の選択を解除します。「OK」をクリックします。システムを再起動すると、変更が有効になります。

重要：追加するユーザーの UAC を無効にしておきます。詳しくは、7 ページの「[3.4.2 Windows インストールの設定](#)」を参照してください。

- 2 LiveCycle PDF Generator System Readiness Test 画面で、「開始」をクリックして、システムが PDF Generator に対して正しく設定されているかどうかを検証します。System Readiness Tool レポートを確認し、「次へ」をクリックします。

4.4.23.8 Reader Extensions 証明書の設定

- 1 デフォルトの Reader Extensions 証明書画面で、デフォルトの Reader Extensions の秘密鍵証明書に対するエイリアスが正しいことを確認して、「次へ」をクリックします。

注意：この画面が表示されるのは、LiveCycle ES Update 1 から LiveCycle ES3 にアップグレードする場合のみです。LiveCycle ES Update 1 の以前のインストールで設定された証明書がない場合は、代わりに次の画面が表示されます。

- 2 Reader Extensions の秘密鍵証明書の設定画面で、モジュールサービスをアクティブにする Reader Extensions 秘密鍵証明書に関する付けられている詳細を指定します。

注意：「LiveCycle ES3 管理コンソールを使用して後から設定」を選択することで、この時点ではこの手順をスキップすることもできます。デプロイメントを完了した後で、Administration Console を使用して Reader Extensions 秘密鍵証明書を設定できます (Administration Console にログインしたら、ホーム／設定／Trust Store の管理／ローカル秘密鍵証明書をクリックします)。

「設定」をクリックし、「次へ」をクリックします。

- 3 Correspondence Management Solution のデプロイメント画面で、管理者ユーザー ID とパスワードを指定し、「設定」をクリックして、変更した Web アプリケーションをパッケージ化し LiveCycle EAR にコピーします。

設定が完了したら、「次へ」をクリックします。

4.4.24 サンプルの読み込み

- ❖ LiveCycle ES3 サンプルを読み込み画面で、次のいずれかの操作を実行します。

- LiveCycle サンプルを読み込むには、「読み込み」をクリックして、「次へ」をクリックします。
- この手順をスキップするには、「LiveCycle サンプルの読み込みをスキップします」を選択して「次へ」をクリックします。後でサンプルを読み込むには、Configuration Manager を再起動してサンプルの読み込みを選択します。

重要：次のいずれかに該当する場合は、LiveCycle サンプルを読み込まないでください。

- 実稼働システムに LiveCycle をデプロイする場合。サンプルを読み込むことでデフォルトパスワードを持つユーザーが作成され、実稼働環境にセキュリティ上の問題が生じる可能性があります。
- Connector for EMC Documentum または Connector for IBM FileNet のサービスをデプロイしている場合、Administration Console を使用してリポジトリプロバイダーにする ECM の設定、有効化およびアクティブ化を行った後に、Documentum リポジトリまたは FileNet オブジェクトストアにサンプルを読み込むことができます。

4.4.25 サーバーの再起動

- ❖ サーバーを再起動する必要があります画面の指定に従って、JBoss Application Server を再起動します。一部の設定はサーバーを再起動した後にのみ適用されるので、再起動が必要です。「次へ」をクリックします。

4.5 次の手順

Configuration Manager を使用して LiveCycle を設定およびデプロイした場合は、デプロイメント完了後のタスクを実行できます。(24 ページの「[デプロイメント完了後の作業](#)」を参照)。

第5章：デプロイメント完了後の作業

LiveCycle モジュールおよびサービスのインストール、設定およびアプリケーションサーバーへのデプロイが完了した後は、デプロイメント完了後のタスクを実行して LiveCycle モジュールおよびサービスの使用を開始します。

アップグレードの準備の一環として、(LiveCycle ES Update 1 の) スケジューラーサービスを停止するか、サーバーを (LiveCycle ES2 の) メンテナンスマードに変更してから、アップグレードプロセスを開始します。次に、スケジューラーサービスを開始するか、アップグレードされた LiveCycle サーバーのメンテナンスマードを無効にしてから、他のデプロイ後のタスクを実行します。

5.1 LiveCycle がメンテナンスマードを実行中かどうかの確認

Web ブラウザーに次のように入力します。

```
http://[hostname]:[port]/dsc/servlet/DSCStartupServlet?maintenanceMode=isPaused&user=[administrator
username]&password=[password]
```

ブラウザーウィンドウにステータスが表示されます。「true」のステータスはサーバーがメンテナンスマードで動作中であることを示し、「false」はサーバーがメンテナンスマードではないことを示します。

注意：アップグレード前に LiveCycle ES2 システムをメンテナンスマードに変更していた場合にのみ、「true」を返します。

5.2 メンテナンスマードのオフ

注意：アップグレード前に LiveCycle ES2 システムをメンテナンスマードに変更していた場合にのみ適用されます。

Web ブラウザーに次のように入力します。

```
http://[hostname]:[port]/dsc/servlet/DSCStartupServlet?maintenanceMode=resume&user=[administrator
username]&password=[password]
```

ブラウザーウィンドウに「実行中」のメッセージが表示されます。

メンテナンスマードについて詳しくは、[LiveCycle 管理ヘルプ](#)の「メンテナンスマードでの LiveCycle の実行」を参照してください。

5.3 スケジューラーサービスの再開

注意：アップグレード前に LiveCycle ES Update 1 システムの SchedulerService を停止した場合にのみ適用されます。

- 1 アップグレードが完了したら、Workbench にログインし、**Window** / **Show View** / **Components** をクリックします。
- 2 **SchedulerService** までスクロールし、右クリックして「**Start Component**」を選択します。
- 3 Workbench からログアウトします。

5.4 デフォルトのパスワードの変更

LiveCycle では、インストール時に 1 つ以上のデフォルトのユーザーが作成されます。これらのユーザーのパスワードは製品資料に記載され、公開されています。セキュリティ要件に応じて、このデフォルトのパスワードを変更する必要があります。

LiveCycle 管理者のユーザーpassword は、デフォルトで「password」に設定されています。Administration Console / 設定 / User Management でパスワードを変更してください。Administration Console へのログイン手順について詳しくは、28 ページの「[5.10 Administration Console へのアクセス](#)」を参照してください。

5.5 JBoss サービスの再起動

LiveCycle のインストールが完了したら、初期化状態にするために、JBoss サービスを再起動します。インストール後は、JBoss サービスが大量にメモリを使用する初期化状態になります。

5.6 JBoss のステータスページの無効化

情報開示に関する脆弱性の問題があるので、使用しているアプリケーションサーバーのバージョン用の次の手順に従って JBoss のステータスページへのアクセスを削除します。

- 1 (JBoss 5.1 のみ) [JBoss root]/server/lc_turnkey/deploy/ROOT.war/WEB-INF に移動し、web.xml ファイルをエディターで開きます。
- (JBoss 4.2.1 のみ) [JBoss root]/server/lc_turnkey/deploy/jbossweb.deployer/ROOT.war/WEB-INF に移動し、web.xml ファイルをエディターで開きます。
- 2 以下のように servlet タグと servlet-mapping タグをコメントアウトします。

```
<!-- <servlet>
    <servlet-name>Status Servlet</servlet-name>
    <servlet-class>org.jboss.web.tomcat.service.StatusServlet
    </servlet-class>
</servlet>
<servlet-mapping>
    <servlet-name>Status Servlet</servlet-name>
    <url-pattern>/status</url-pattern>
</servlet-mapping> -->
```

- 3 ファイルを保存して閉じます。

5.7 正しい日付、時刻およびタイムゾーンの設定

LiveCycle 環境に接続するすべてのサーバーで正しい日付、時刻およびタイムゾーンを設定することで、時間に依存するモジュール (Adobe® LiveCycle® Digital Signatures 10 や Reader Extensions など) が正常に機能するようになります。例えば、未来の時間に作成された署名は、有効になりません。

同期を必要とするサーバーは、データベースサーバー、LDAP サーバー、HTTP サーバー および J2EE サーバーです。

5.8 JBoss 用 SSL の手動による有効化

自動インストール時、Secure Socket Layer (SSL) がデフォルトで無効の状態で JBoss Application Server がセットアップされます。ドキュメントを保護するために、Adobe® LiveCycle® Rights Management 10 と Adobe Acrobat を使用する場合、JBoss 用 SSL を有効にします。SSL を有効にするには、VeriSign などの信頼できる認証局 (CA) から発行された署名入り証明書が必要です。ただし、自己署名証明書を生成および使用して、SSL を有効にすることもできます。

自動インストール時に JBoss 用 SSL を有効にする場合、次のように広範なタスクを実行する必要があります。

- 1 Java SDK に付属するキーツールユーティリティを使用してキーストアを作成します。
- 2 証明書を生成するか、CA から発行された証明書を使用します。
- 3 キーストアと証明書のファイルを JBoss ルート設定フォルダー (**[JBoss root]/server/lc_turnkey/conf**) にコピーします。
- 4 証明書を **[Adobe_JAVA_HOME]\lib\security\cacerts** に読み込みます。
- 5 JBoss server.xml ファイルを編集し、SSL 構成の設定をコメント解除して証明書の参照属性を指定します。
- 6 変更を適用するには、JBoss サーバーを再起動します。

5.8.1 JBoss 用 SSL の有効化

Configuration Manager を使用して JBoss に対して SSL を設定できます。このオプションをスキップした場合、以下の説明を参照して SSL を手動で設定してください。

X.500 識別名は、キーストアと証明書を生成するときの識別子として使用されます。証明書の生成に使用するキーツールコマンドは、-dname オプションについて次のサブパーツをサポートしています。

CN : 証明書を作成するマシンの完全ホスト名。例えば、「machine.adobe.com」。

OU : 部や課など、小規模な組織単位の名前。例えば、「Purchase」。

O : 組織の名前。例えば、「Adobe Systems」。

L : 地方または市の名前。例えば、「San Jose」。

S : 州や都道府県の名前。例えば、「California」。

C : 2 文字の国コード。例えば、「US」。

5.8.1.1 自動インストール時の JBoss 用 SSL の有効化

- 1 **[Adobe_JAVA_HOME]/bin** に移動し、次のコマンドを入力してキーストアを作成します。

```
keytool -genkey -dname "CN=Host Name, OU=Group Name, O=Company Name, L=City Name, S=State, C=Country Code" -alias "LC Cert" -keyalg rsa -keypass key_password -keystore keystorename.keystore
```

[Adobe_JAVA_HOME] は JDK のインストールディレクトリ名に置換し、太字のテキストは実際の環境に対応する値に置換します。「Host Name」は、アプリケーションサーバーの完全修飾ドメイン名です。

- 2 パスワードの入力を求められたら、**keystore_password** を入力します。

注意：この手順の **keystore_password** には、手順 1 で入力したパスワード (**key_password**) と同じパスワードでも異なるパスワードでも入力できます。

- 3 **keystorename.keystore** ファイルを **[JBoss root]/server/lc_turnkey/conf** ディレクトリにコピーします。

```
copy keystorename.keystore [JBoss root]/server/lc_turnkey/conf
```

- 4 次のコマンドを入力して、証明書ファイルを書き出します。

```
keytool -export -alias "LC Cert" -file LC_cert.cer -keystore [JBoss root]/server/lc_turnkey/conf/keystorename.keystore
```

- 5 パスワードの入力を求められたら、**keystore_password** を入力します。
- 6 次のコマンドを入力して、LC_cert.cer ファイルを [JBoss root] の **conf** ディレクトリにコピーします。

```
copy LC_cert.cer [JBoss root]/server/lc_turnkey/conf
```
- 7 次のコマンドを入力して、証明書の内容を表示します。

```
keytool -printcert -v -file [JBoss root]/server/lc_turnkey/conf/LC_cert.cer
```
- 8 必要に応じて、[Adobe_JAVA_HOME]\lib\security の cacerts ファイルへの書き込みアクセス権を指定します。cacerts ファイルを右クリックして「プロパティ」を選択し、「読み取り専用」属性の選択を解除します。
- 9 次のコマンドを入力して、証明書ファイルを読み込みます。

```
keytool -import -alias "LC Cert" -file LC_cert.cer -keystore [Adobe_JAVA_HOME]\jre\lib\security\cacerts
```
- 10 パスワードに changeit と入力します。changeit は Java インストールでデフォルトのパスワードです。

11 「Trust this certificate? [no]:」と表示されたら、yes と入力します。「Certificate was added to keystore」という確認メッセージが表示されます。

12 テキストエディターで、ファイルを開きます。

(JBoss 5.1 のみ) [JBoss root]\server\lc_turnkey\deploy\jbossweb.sar\server.xml

(JBoss 4.2.1 のみ) [JBoss root]/server/lc_turnkey/deploy/jboss-web.deployer/server.xml

13 server.xml ファイルの次の行をコメント解除します。

```
<!-- SSL/TLS Connector configuration using the admin devl guide keystore <Connector port="8443"  
address="${jboss.bind.address}" maxThreads="100" strategy="ms" maxHttpHeaderSize="8192" emptySessionPath="true"  
scheme="https" secure="true" clientAuth="false" keystoreFile="${jboss.server.home.dir}/conf/keystoreFile.keystore"  
keystorePass="keystorePass" sslProtocol = "TLS" />  
-->
```

14 server.xml の **keystoreFile** 属性に、作成したキーストアファイルのパスを指定します。server.xml の **keystorePass** 属性に、**keystore_password** を指定します。

15 server.xml ファイルを保存します。

16 アプリケーションサーバーを再起動します。

- ・ Windows のコントロールパネルで、管理ツールをクリックし、サービスをクリックします。
- ・ 「JBoss for Adobe LiveCycle ES3」を選択します。
- ・ 操作／停止を選択します。
- ・ サービスのステータスが停止になるまで待機します。
- ・ 操作／開始を選択します。

5.9 Workbench へのアップグレード

LiveCycle サーバーのアップグレードが完了し、適切に動作していることを確認したら、LiveCycle アプリケーションの作成と変更を引き続き行うために、新しいバージョンの Workbench をインストールします。『Installing Your Development Environment』を参照してください。

5.10 Administration Console へのアクセス

管理コンソールは、各種設定ページにアクセスするための Web ベースのポータルです。これらの設定ページでは、LiveCycle の動作を制御する実行時プロパティを設定できます。Administration Console にログインすると、User Management、監視フォルダーおよび電子メールクライアントの設定、さらに他のサービスの管理設定オプションにアクセスできます。また、管理コンソールでは「アプリケーションおよびサービス」にアクセスすることもできます。これは、管理者がアーカイブの管理や、実稼働環境へのサービスのデプロイに使用します。

Administration Console にログインするためのデフォルトのユーザー名とパスワードは、それぞれ **administrator** および **password** です。初回ログイン時に、User Management にアクセスして、LiveCycle 管理者アカウントのパスワードを変更できます（30 ページの「[5.12 User Management へのアクセス](#)」を参照）。

LiveCycle ES Update 1 または LiveCycle ES2 システムで設定したものと同じ管理者アカウントとパスワードを使用します。

管理コンソールにアクセスするには、デプロイ済みの LiveCycle がアプリケーションサーバー上で実行されている必要があります。

管理者の Web ページの使用方法について詳しくは、**Administration Console** のヘルプ（Administration Console のホームページのヘルプメニューからアクセス）を参照してください。

1 Web ブラウザーを開き、次の URL を入力します。

`http://localhost:8080/adminui` (デフォルトのポートを使用したローカルのデプロイメント)

2 次のデフォルトのユーザー名とパスワードを使用してログインします。

ユーザー名 : **administrator**

パスワード : **password**

3 「ログイン」をクリックします。

4 サービスのページにアクセスするには「サービス」を、コアシステム設定、User Management および Trust Store の管理のページにアクセスするには「設定」をクリックします。

5.11 LiveCycle アプリケーションへのアクセス

LiveCycle のデプロイ後には、次のモジュールに関連付けられた Web アプリケーションにアクセスできます。

- Reader Extensions
- Adobe® LiveCycle® Workspace 10
- Rights Management
- Content Services

Reader Extensions、Workspace および Rights Management の使用について詳しくは、各アプリケーションのヘルプを参照してください。

デフォルトの管理者権限を使用して Web アプリケーションにアクセスし、他のユーザーがログインし、アプリケーションを使用できるように、新規のユーザーとロールを作成します。（Administration Console のヘルプまたは User Management ページからアクセスできる）User Management のヘルプにアクセスすることもできます。

5.11.1 Reader Extensions

- 1 Web ブラウザーを開き、次の URL を入力します。

<http://localhost:8080/ReaderExtensions> (デフォルトのポートを使用したローカルのデプロイメント)

- 2 次のデフォルトのユーザー名とパスワードを使用してログインします。

ユーザー名 : administrator

パスワード : password

注意: デフォルトのユーザー名とパスワードを使用してログインするには、管理者またはスーパーユーザーの権限が必要です。他のユーザーが Reader Extensions にアクセスできるようにするには、User Management でユーザー アカウントを作成し、そのユーザーに Reader Extensions Web アプリケーション ロールを付与する必要があります。

5.11.2 Workspace

- 1 Web ブラウザーを開き、次の URL を入力します。

<http://localhost:8080/workspace> (デフォルトのポートを使用したローカルのデプロイメント)

- 2 次のデフォルトのユーザー名とパスワードを使用してログインします。

ユーザー名 : administrator

パスワード : password

5.11.3 Rights Management

Rights Management にログインするには、Rights Management End User ロールが割り当てられている必要があります。

上級管理者を含む、新規および既存のどのユーザーにも、Rights Management End User ロールはデフォルトでは付与されていません。Rights Management End User ロールを持つユーザー アカウントを User Management で作成するか、または既存のユーザーに End User ロールを付与する必要があります。次に、作成したユーザーに関連付けられているログイン情報を使用して、Rights Management にログインします。

- 1 Web ブラウザーを開き、次の URL を入力します。

<http://localhost:8080/edc/Login.do> (デフォルトのポートを使用したローカルのデプロイメント)

- 2 次のデフォルトのユーザー名とパスワードを使用してログインします。

ユーザー名 : 管理者、または Rights Management End User ロールを持つ任意のユーザー

パスワード : 上記で入力したユーザー アカウントのパスワード

注意: 管理者以外のユーザー権限でログインできない場合、アプリケーション サーバーを再起動します。

ユーザーおよびロールの設定と Rights Management に対する SSL の設定について詳しくは、[LiveCycle 管理ヘルプ](#) を参照してください。

Rights Management のポリシーエントリにプリンシパルユーザーを追加しても、ポリシーセットにドメインが含まれていないので、デフォルトではプリンシパルユーザーは表示されません。表示されるユーザーとグループを追加するために、Rights Management 管理 Web アプリケーションでポリシー設定を変更して、ドメインを追加することができます。追加したドメイン内のすべてのユーザーが表示され、ユーザー ポリシーに追加できます ([LiveCycle 管理ヘルプ](#) を参照)。

5.11.4 Content Services

注意 : Contentspace Administrator または Contentspace のロールを、この Web アプリケーションにログインする新しいユーザーに適用します。ユーザーがログインできるようにするには、User Management でユーザーを作成し、適切なロールを付与します。

- 1 Web ブラウザーを開き、次の URL を入力します。
 - <http://localhost:8080/contentspace> (デフォルトのポートを使用したローカルのデプロイメント)
- 2 次のデフォルトのユーザー名とパスワードを使用してログインします。

ユーザー名 : administrator

パスワード : password

5.12 User Management へのアクセス

User Management を使用すると、管理者はすべてのユーザーおよびグループのデータベースを管理できます。データベースを 1 つまたは複数のサードパーティのユーザー・ディレクトリと同期して、これらのデータベースからユーザーおよびグループを含めることができます。User Management には、Adobe® LiveCycle® Process Management 10、Reader Extensions、Workspace、Rights Management、Forms などの LiveCycle モジュールの認証、権限付与およびユーザー管理の機能があります。

- 1 Web ブラウザーを開き、次の URL を入力します。
<http://localhost:8080/adminui> (デフォルトのポートを使用したローカルのデプロイメント)
- 2 次のデフォルトのユーザー名とパスワードを使用してログインします。

ユーザー名 : administrator
パスワード : password
- 3 設定／User Management をクリックします。

5.13 平文テキストパスワードの暗号化

データソースの設定に含まれる平文テキストパスワードを暗号化する方法については、<http://wiki.jboss.org> にアクセスし、EncryptingDataSourcePasswords を検索します。

5.14 MySQL データベースの管理

自動のインストールおよび設定では、MySQL のトランザクション対応のストレージエンジン (InnoDB) がサポートされています。これはつまり、すべての LiveCycle が同じストレージエンジンで動作し、一貫したバージョンサポートを行う必要があるということです (「MySQL InnoDB Storage Engine」を参照)。

5.15 LiveCycle の LDAP アクセス設定

LDAP (Lightweight Directory Access Protocol) を事前に設定していない場合は、次の手順をガイドラインとして、LDAP を使用した認証をサポートするように User Management を設定することができます。

注意：以前の LiveCycle 製品用に LDAP を選択している場合、この手順はスキップします。LDAP の設定はアップグレードプロセス中に移行されます。

- 1 Web ブラウザーを開き、<http://localhost:8080/adminui> に移動して、ログインします（28 ページの「[5.11 LiveCycle アプリケーションへのアクセス](#)」を参照）。
- 2 設定／User Management／ドメインの管理をクリックし、「新規エンタープライズドメイン」をクリックします。
- 3 「ID」ボックスに、ドメインの一意の ID を入力します。
- 4 「名前」ボックスに、ドメインの識別名を入力します。
- 5 「認証を追加」をクリックし、「認証プロバイダー」リストで「LDAP」を選択します。
- 6 「OK」をクリックし、表示されるページで「ディレクトリを追加」をクリックします。
- 7 「プロファイル名」ボックスに名前を入力し、「次へ」をクリックします。
- 8 必要に応じて、「サーバー」、「ポート」、「SSL」および「バインド」ボックスの値を指定します。
- 9 「ページに次の情報を入力」で、ディレクトリ設定オプション（「Sun ONE のデフォルト値」など）を選択して、「次へ」をクリックします。
- 10 必要に応じて「ユーザーの設定」を設定して、「次へ」をクリックします。
- 11 必要に応じて「グループの設定」を設定して、「テスト」または「完了」をクリックします。
- 12 (オプション) 設定をテストします。
 - ・「テスト」をクリックします。
 - ・「テストディレクトリ」ウィンドウの「検索」ボックスにオブジェクト名を入力し、「条件」ボックスでオブジェクトタイプ（「ログイン ID」など）を選択します。
 - ・「テスト」をクリックします。成功すると、オブジェクトの詳細が表示されます。その後「戻る」をクリックできます。
- 13 「完了」をクリックして、ディレクトリを追加ページを閉じ、もう一度「OK」をクリックします。

5.16 HTML デジタル署名機能の設定

Forms の HTML 電子署名機能を使用するには、次の手順を実行します。

- 1 [LiveCycle root]/deploy/adobe-forms-ds.ear ファイルをアプリケーションサーバーに手動でデプロイします。
- 2 Administration Console にログインし、サービス／Forms をクリックします。
- 3 「HTML 電子署名が有効です」を選択し、「保存」をクリックします。

5.17 PDF Generator の設定

PDF Generator を LiveCycle ソリューションの一部としてインストールしている場合は、次のタスクを実行します。

- 32 ページの「[5.17.1 環境変数の設定](#)」

- 32 ページの「[5.17.2 HTTP プロキシサーバーを使用するようにアプリケーションサーバーを設定](#)」
- 33 ページの「[5.17.3 Adobe PDF プリンターをデフォルトのプリンターとして設定](#)」
- 33 ページの「[5.17.4 Acrobat の設定](#)」
- 34 ページの「[5.17.5 Windows Server 2003 での東アジア文字のインストール](#)」
- 34 ページの「[5.17.6 PDF Generator 監視フォルダーのパフォーマンスパラメーター](#)」
- 35 ページの「[5.17.7 マルチスレッドファイル変換のユーザーアカウント](#)」
- 35 ページの「[5.17.8 PDF Generator へのフォントの追加](#)」
- 36 ページの「[5.17.9 HTML から PDF への変換の設定](#)」
- 37 ページの「[5.17.10 Microsoft Visio 2007 のデフォルトのマクロ設定を変更する](#)」
- 37 ページの「[5.17.11 PDF Generator ネットワークプリンタークライアントのインストール](#)」

5.17.1 環境変数の設定

PDF Generator をインストールして、ファイルを PDF に変換するよう設定している場合は、一部のファイル形式に関して、対応するアプリケーションを起動する際に使用する実行可能ファイルの絶対パスを含む環境変数を手動で設定する必要があります。次の表に、PDF Generator で環境変数を設定する必要のあるネイティブアプリケーションを示します。

アプリケーション	環境変数	例
Adobe Acrobat X	Acrobat_PATH	C:\Program Files\Adobe\Acrobat 10.0\Acrobat\Acrobat.exe
Adobe FrameMaker®	FrameMaker_PATH	C:\Program Files\Adobe\FrameMaker 7.1\FrameMaker.exe
メモ帳	Notepad_PATH	C:\WINDOWS\Notepad.exe
OpenOffice.org	OpenOffice_PATH	C:\Program Files\OpenOffice.org 3.3
Adobe PageMaker®	PageMaker_PATH	C:\Program Files\Adobe\PageMaker 7.0\PageMaker.exe
WordPerfect	WordPerfect_PATH	C:\Program Files\WordPerfect Office 12\Programs\wpwin12.exe

注意：OpenOffice_PATH 環境変数は、実行可能ファイルのパスではなくインストールフォルダーを設定します。

Word、PowerPoint、Excel、Visio、Project などの Microsoft Office アプリケーションまたは AutoCAD のパスを設定する必要はありません。これらのアプリケーションがサーバーにインストールされている場合は、Generate PDF サービスが自動的にこれらのアプリケーションを起動します。

5.17.2 HTTP プロキシサーバーを使用するようにアプリケーションサーバーを設定

LiveCycle が実行されているコンピューターが、プロキシ設定を使用して外部 Web サイトにアクセスしている場合、アプリケーションサーバーは、次の値を Java 仮想マシン (JVM™) 引数として設定して起動する必要があります。

```
-Dhttp.proxyHost=[server host]  
-Dhttp.proxyPort=[server port]
```

次の手順に従って、HTTP プロキシホストを設定したアプリケーションサーバーを起動します。

5.17.2.1 JBoss への設定の追加

- 1 JBoss Application Server が停止していることを確認します。
- 2 コマンドラインから、[JBoss root]/bin/ ディレクトリにある run.conf.bat または run.bat スクリプトを編集します。
- 3 次のテキストをスクリプトファイルに追加します。

```
Set JAVA_OPTS=%JAVA_OPTS%
-Dhttp.proxyHost=[server host]
-Dhttp.proxyPort=[server port]
```

- 4 ファイルを保存して閉じます。

5.17.3 Adobe PDF プリンターをデフォルトのプリンターとして設定

Adobe PDF プリンターを、サーバーのデフォルトプリンターに設定します。Adobe PDF プリンターがデフォルトとして設定されていない場合、PDF Generator ではファイルを変換できません。

- 1 スタート/プリンターと FAX を選択します。
- 2 プリンターと FAX ウィンドウで、「Adobe PDF」を右クリックし、「通常使うプリンターに設定」を選択します。

5.17.4 Acrobat の設定

この手順は、Configuration Manager を実行して LiveCycle をアプリケーションサーバーにデプロイした後で実行できます。

- 1 Acrobat の以前のバージョン（9.0 以前）がインストールされている場合、Windows コントロールパネルの「プログラムの追加と削除」を使用して Acrobat をアンインストールします。
- 2 次のいずれかを実行します。
 - メディアを使用する場合は、Acrobat Pro の CD を挿入します。
 - ESD ダウンロードを使用している場合は、ESD の場所から Acrobat をダウンロードします。
- 3 AutoPlay.exe ファイルを実行して、Acrobat X Pro をインストールします。
- 4 LiveCycle インストールメディアの additional\scripts フォルダーに移動します。
- 5 次のバッチファイルを実行します。

```
Acrobat_for_PDFG_Configuration.bat [LiveCycle root]/pdflg_config
```

- 6 Acrobat を開き、ヘルプ/アップデートの有無をチェック/環境設定を選択します。
- 7 「自動的に新しいアップデートを確認する」を選択解除します。

5.17.4.1 Acrobat のインストールの検証

- 1 システム上の PDF ファイルに移動し、そのファイルをダブルクリックして Acrobat で開きます。PDF ファイルが正常に開いた場合は、Acrobat が正しくインストールされています。
- 2 PDF ファイルを正しく開くことができない場合は、Acrobat をアンインストールしてから再インストールします。

注意: Acrobat のインストール完了後に表示される Acrobat のすべてのダイアログボックスを閉じてから、Acrobat の自動アップデートを無効化してください。

環境変数 Acrobat_PATH を、Acrobat.exe を指すように設定してください（例えば、C:\Program Files\Adobe\Acrobat 10.0\Acrobat\Acrobat.exe）。

5.17.4.2 ネイティブアプリケーションサポートの設定

- 1 前の手順で説明したように、Acrobat をインストールして検証します。
- 2 Adobe PDF プリンターをデフォルトのプリンターとして設定します。

5.17.4.3 ファイル制限機能の設定の変更

Microsoft Office のセキュリティセンター設定を変更して、PDFG が古いバージョンの Microsoft Office ドキュメントを変更できるようにします。

- 1 任意の Office 2010 アプリケーションで、「ファイル」タブをクリックします。「ヘルプ」の下の「オプション」をクリックします。オプションダイアログボックスが表示されます。
- 2 「セキュリティ センター」をクリックし、「セキュリティ センターの設定」をクリックします。
- 3 セキュリティ センターダイアログで、「ファイル制限機能の設定」をクリックします。
- 4 「ファイルの種類」リストで、PDFG に変換させるファイルの種類に対して、「開く」チェックボックスをオフにします。

5.17.4.4 ネットワークプリンタークライアントのインストール

PDF Generator には、PDF Generator インターネットプリンターのインストールに使用するネットワークプリンタークライアントインストーラーが含まれます。インストールの完了後は、クライアントコンピューターの既存のプリンターのリストに PDF Generator プリンターが追加されます。その後、このプリンターを使用してドキュメントを送信し、PDF に変換することができます。Network Printer Client のインストールについて詳しくは、使用しているアプリケーションサーバー版の『LiveCycle のインストールおよびデプロイ』ドキュメントを参照してください。

5.17.5 Windows Server 2003 での東アジア文字のインストール

PDF Generator を使用して HTML ファイルを PDF に変換すると、日本語、韓国語、中国語などの一部の東アジア言語は、アラビア語、アルメニア語、グルジア語、ヘブライ語、インド系言語、タイ語、ベトナム語などの右から左方向に書く言語同様、PDF ファイルに表示されない可能性があります。

これらの言語を Windows Server 2003 で正常に表示するには、クライアントおよびサーバーに適切なフォントが必要です。

- 1 スタート/コントロールパネル/地域と言語のオプションを選択します。
- 2 「言語」タブをクリックし、「東アジア言語のファイルをインストールする」を選択します。
- 3 「詳細設定」タブをクリックし、「コードページ変換テーブル」のすべてのオプションを選択します。

変換された PDF ファイルで依然としてフォントが正しく表示されない場合は、C:\WINDOWS\Fonts ディレクトリに Arial Unicode MS (True Type) フォント (ARIALUNI.TTF) があることを確認します。

5.17.6 PDF Generator 監視フォルダーのパフォーマンスパラメーター

監視フォルダーを使用した PDF の変換を実行するための十分なディスク容量がないことを示す java.io.IOException エラーメッセージが発生しないように、Administration Console で PDF Generator の設定を変更できます。

- 1 Administration Console にログインして、サービス/アプリケーションおよびサービス/サービスの管理をクリックし、サービスのリストで「PDFGConfigService」をクリックします。
- 2 「PDFGConfigService を設定」ページで、次の値を設定します。

PDFG Cleanup Scan Seconds : 1800

Job Expiration Seconds : 6000

Server Conversion Timeout : 450

5.17.7 マルチスレッドファイル変換のユーザーアカウント

デフォルトでは、PDF Generator は、一度に 1 つの OpenOffice、Microsoft Word または PowerPoint ドキュメントのみを変換できます。マルチスレッド変換を有効にすると、OpenOffice または PDFMaker の複数のインスタンスを起動して PDF Generator で同時に複数のドキュメントを変換できます (PDFMaker は、Word 文書と PowerPoint ドキュメントの変換に使用されます)。

注意：マルチスレッドファイル変換は、Microsoft Word 2007 および Microsoft PowerPoint 2007 のみでサポートされています。Microsoft Excel 2003 および Microsoft Excel 2007 ではサポートされていません。

マルチスレッドファイル変換を有効にする必要がある場合、まず **10** ページの「[3.4.4.3 PDF Generator のマルチスレッドファイル変換およびマルチユーザーサポートの有効化](#)」で説明されているタスクを実行する必要があります。

- 1 Configuration Manager で、サービス／PDF Generator の評価／ユーザーアカウントをクリックします。
- 2 「追加」をクリックし、LiveCycle サーバー上の管理者権限を持つユーザーのユーザー名とパスワードを入力します。OpenOffice のユーザーを設定する場合は、最初に表示される OpenOffice のアカティベート用のダイアログを閉じます。
- 3 LiveCycle サーバーを再起動します。

5.17.8 PDF Generator へのフォントの追加

LiveCycle にはフォントの中央リポジトリがあり、すべての LiveCycle モジュールがアクセスできます。サーバー上の LiveCycle 以外のアプリケーションで、追加フォントを使用できるように設定します。これにより、PDF Generator では、そのアプリケーションを使用して作成された PDF ドキュメントで追加フォントを使用できるようになります。

5.17.8.1 LiveCycle 以外のアプリケーション

次のリストには、PDF Generator でサーバー側の PDF 生成に使用できる LiveCycle 以外のアプリケーションが含まれています。

Windows 専用アプリケーション

- Microsoft Office Word
- Microsoft Office Excel
- Microsoft Office PowerPoint
- Microsoft Office Project
- Microsoft Office Visio
- Microsoft Office Publisher
- AutoDesk AutoCAD
- Corel WordPerfect
- Adobe Photoshop CS
- Adobe FrameMaker
- Adobe PageMaker
- Adobe Acrobat Pro

マルチプラットフォームアプリケーション

- OpenOffice Writer
- OpenOffice Calc
- OpenOffice Draw
- OpenOffice Impress

注意: これらのアプリケーションの他にも、各ユーザーが追加したアプリケーションが含まれている場合があります。

上記のアプリケーションのうち OpenOffice スイート (Writer、Calc、Draw および Impress) は、他のアプリケーションが Windows にのみ対応しているのに対して、Windows、Solaris[™] および Linux[®] プラットフォームに対応しています。

5.17.8.2 Windows 専用アプリケーションへの新しいフォントの追加

上記のすべての Windows 専用アプリケーションでは、C:\Windows\Fonts (または同等の) フォルダーにあるすべてのフォントにアクセスできます。これらのアプリケーションには、C:\Windows\Fonts に加えて、それぞれ固有のフォントフォルダーが存在する場合があります。

このため、LiveCycle フォントディレクトリにカスタムフォントを追加する場合、C:\Windows\Fonts (または同等の) フォルダーにそのフォントをコピーして、Windows 専用のアプリケーションでもこれらのフォントを使用できるようにする必要があります。

カスタムフォントの使用に際しては、使用許諾契約に基づくライセンスを取得して、そのフォントにアクセスするアプリケーションでの使用が許可されている必要があります。

5.17.8.3 OpenOffice スイートへの新しいフォントの追加

OpenOffice スイートへのカスタムフォントの追加方法は、OpenOffice Fonts-FAQ ページ (<http://wiki.services.openoffice.org>) で説明されています。

また、OpenOffice スイートには、フォント関連の動作に関して次のようなリソースがあります。

- ・「**OpenOffice Fonts Troubleshooting Guide**」(<http://www.openoffice.org/FAQs/fontguide.html>)。このガイドの項目の一部は OpenOffice 1. にのみ適用されます。したがって、OpenOffice 3.1.x 以降に関しては情報が古くなっている可能性があります。
- ・「**Importing Fonts into OpenOffice 2.1**」(http://openoffice.blogs.com/openoffice/2007/02/font_import_wiz.html)。このブログは OpenOffice 2.1 を対象としていますが、内容は OpenOffice 3.1 以降にも適用されます。

5.17.8.4 その他のアプリケーションへの新しいフォントの追加

他のアプリケーションに PDF 作成のサポートを追加した場合、これらのアプリケーションのヘルプを参照して新しいフォントを追加します。Windows では、通常はカスタムフォントを C:\Windows\Fonts (または同等の) フォルダーに追加すれば十分です。

5.17.9 HTML から PDF への変換の設定

HTML から PDF への変換プロセスは、Acrobat X の設定を使用するように設計されています。この設定は、PDF Generator の設定よりも優先されます。

注意: この設定は、HTML から PDF への変換プロセスを有効にするために必要です。設定が行われていない場合、この変換タイプは失敗します。

1 33 ページの「[5.17.4 Acrobat の設定](#)」の説明に従って、Acrobat をインストールして検証します。

- 2 [LiveCycle root]¥plugins¥x86_win32 ディレクトリにある pdffgen.api ファイルを探し、[Acrobat root]¥Acrobat¥plug_ins ディレクトリにコピーします。

5.17.9.1 HTML から PDF への変換における Unicode フォントのサポート

重要: 入力用 zip ファイルにファイル名が 2 バイト文字の HTML ファイルが含まれている場合、HTML から PDF への変換は失敗します。この問題を回避するには、HTML ファイルに名前を付けるときに 2 バイト文字を使用しないようにします。

- 1 Unicode フォントを、使用しているシステムに応じて、次のいずれかのディレクトリにコピーします。
 - [Windows root]¥Windows¥fonts
 - [Windows root]¥WINNT¥fonts
- 2 [LiveCycle root]/adobe-generatepdf-dsc.jar ファイルにある cffont.properties ファイルで、フォント名マッピングを変更します。
 - このアーカイブを展開し、cffont.properties ファイルを探して、エディターで開きます。
 - Java フォント名のコンマ区切りリストで、フォントタイプごとに、Unicode システムフォントにマップを追加します。以下の例では、kochi mincho が Unicode システムフォントの名前です。

```
dialog=Arial, Helvetica, kochi mincho  
dialog.bold=Arial Bold, Helvetica-Bold, kochi mincho ...
```
 - プロパティファイルを保存して閉じ、adobe-generatepdf-dsc.jar ファイルを再パッケージ化して再デプロイします。

注意: 日本語のオペレーティングシステムでは、cffont.properties.ja ファイルでもフォントマッピングを指定します。これは、標準の cffont.properties ファイルよりも優先されます。

 リスト内のフォントは、左から右に検索され、最初に見つかったフォントが使用されます。HTML から PDF の変換ログでは、システム内で見つかったすべてのフォント名のリストが返されます。マップが必要なフォント名を特定するには、前述したいずれかのディレクトリにフォントを追加し、サーバーを再起動して変換を実行します。マッピングに使用するフォント名は、ログファイルから特定できます。

生成された PDF ファイルにフォントを埋め込むには、cffont.properties ファイル内の embedFonts プロパティを true に設定します（デフォルトは false）。

5.17.10 Microsoft Visio 2007 のデフォルトのマクロ設定を変更する

マクロを含む Microsoft Visio 2007 のファイルを変換しようすると、Microsoft Office Visio のセキュリティに関する通知ダイアログが表示され、変換がタイムアウトします。マクロが含まれているファイルを正常に変換するには、Visio のデフォルトのマクロ設定を変更する必要があります。

- Visio 2007 で、ツール／セキュリティセンター／マクロの設定をクリックし、次のいずれかのオプションを選択して、「OK」をクリックします。
 - 警告を表示せずにすべてのマクロを無効にする
 - すべてのマクロを有効にする

5.17.11 PDF Generator ネットワークプリンタークライアントのインストール

PDF Generator には、クライアントコンピューターに PDF Generator ネットワークプリンターをインストールするための実行ファイルが含まれています。インストールが完了すると、PDF Generator プリンターがクライアントコンピューターの既存のプリンターのリストに追加されます。その後、このプリンターを使用してドキュメントを送信し、PDF に変換することができます。

注意：Administration Console のネットワークプリンタークライアントのインストールウィザードでは、Windows オペレーティングシステムのみがサポートされています。ネットワークプリンタークライアントのインストールウィザードの起動には、32 ビット JVM を使用してください。64 ビット JVM を使用した場合は、エラーが発生します。

Windows で PDFG ネットワークプリンターのインストールが失敗する場合は、38 ページの「[5.17.11.2 Windows でネイティブのプリンターの追加ウィザードを使用して PDFG ネットワークプリンターを設定する](#)」の説明に従って設定してください。

5.17.11.1 PDF Generator ネットワークプリンタークライアントのインストール

注意：Windows Server 2008 で PDF Generator ネットワークプリンタークライアントをインストールする前に、Windows Server 2008 にインターネット印刷クライアント機能がインストールされていることを確認してください。機能のインストールについては、Windows Server 2008 のヘルプを参照してください。

- 1 PDF Generator をサーバーに正常にインストールしたことを見つめます。
- 2 次のいずれかを実行します。
 - Windows クライアントコンピューターから、Web ブラウザーに次の URL を入力します。[host] は PDF Generator をインストールしたサーバーの名前、[port] は使用しているアプリケーションサーバーポートです。
`http://[host]:[port]/pdfg-ipp/install`
 - Administration Console で、ホーム/サービス/PDF Generator の評価/PDFG ネットワークプリンターをクリックします。「PDFG ネットワークプリンターのインストール」セクションで、「ここをクリックしてください」をクリックして、PDFG ネットワークプリンターのインストールを起動します。
- 3 インターネットポートの構成画面で、「**指定されたユーザー アカウントを使う**」を選択して、PDFG 管理者またはユーザーのロールを持つ LiveCycle ユーザーの資格情報を指定します。このユーザーには電子メールアドレスも必要です。このアドレスは、変換済みのファイルを受信する際に使用できます。このセキュリティ設定をクライアントコンピューター上のすべてのユーザーに適用するには、「**すべてのユーザーに同じセキュリティ設定を使う**」を選択して、「OK」をクリックします。
注意：ユーザーのパスワードが変更された場合、ユーザーは使用しているコンピューターに PDFG ネットワークプリンターを再インストールする必要があります。パスワードを Administration Console から更新することはできません。
- 4 インストールが終了すると、LiveCycle PDF Generator が正常にインストールされたことを示すダイアログボックスが表示されます。
- 5 「OK」をクリックします。使用可能なプリンターのリストに **LiveCycle PDF Generator** という名前のプリンターが追加されます。

5.17.11.2 Windows でネイティブのプリンターの追加ウィザードを使用して PDFG ネットワークプリンターを設定する

- 1 スタート/プリンターと FAX をクリックし、「**プリンターの追加**」をダブルクリックします。
- 2 「次へ」をクリックし、「**ネットワークプリンター、または他のコンピューターに接続されているプリンター**」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 3 「**インターネット上または自宅/会社のネットワーク上のプリンターに接続する**」を選択し、次の PDFG プリンターの URL を入力します。[host] はサーバー名、[port] はサーバーを実行しているポート番号です。
`http://[host]:[port]/pdfg-ipp/printer`
- 4 インターネットポートの構成画面で、「**指定されたユーザー アカウントを使う**」を選択し、有効な User Management 資格情報を指定します。
- 5 プリンタードライバーの選択ボックスで、任意の標準的な PostScript ベースのプリンタードライバー (HP Color LaserJet PS など) を選択します。

6 適切なオプション（このプリンターをデフォルトに設定するなど）を選択してインストールを完了します。

注意：プリンターの追加の際に使用するユーザーの資格情報では、応答を受信するために、有効な電子メール ID を User Management で設定する必要があります。

- ❖ 電子メールサービスの sendmail サービスを設定します。サービスの設定オプションで有効な SMTP サーバーと認証情報を見つけてください。

5.17.11.3 プロキシサーバーのポート転送を使用するように PDFG ネットワークプリンタークライアントをインストールして設定する

- 1 CC プロキシサーバーで特定のポートについて LiveCycle サーバーへのポート転送を設定し、プロキシサーバーレベルで認証を無効にします（LiveCycle で独自の認証を使用するため）。転送を設定したポートでクライアントがこのプロキシサーバーに接続すると、すべての要求が LiveCycle サーバーに転送されます。
- 2 次の URL を使用して、PDFG ネットワークプリンターカlientをインストールします。
`http://[proxy server]:[forwarded port]/pdfg-ipp/install.`
- 3 PDFG ネットワークプリンターカlientの認証に必要な資格情報を指定します。
- 4 PDFG ネットワークプリンターカlientがクライアントマシンにインストールされます。これにより、ファイアウォールで保護されている LiveCycle サーバーを使用した PDF 変換が可能になります。

5.18 Connectors for ECM の設定

Connector for IBM FileNet を LiveCycle ソリューションの一部としてインストールした場合は、FileNet オブジェクトストアに接続するように、このサービスを設定する必要があります。

FileNet 4.0、4.5 または FileNet 5.0 を使用して Connector for IBM FileNet サービスを設定するには、次の手順を実行します。

5.18.1 FileNet 4.0、4.5 または 5.0 および CEWS トランスポートを使用してコネクタを設定する

- 1 (JBoss 4.2.1) アプリケーションサーバーの実行ファイル `[JBoss root]/bin/run.bat` をテキストエディターで開きます。
(JBoss 5.1) アプリケーションサーバーの実行ファイル `[JBoss root]/bin/run.conf.bat` をテキストエディターで開きます。
- 2 FileNet 設定ファイルの場所を、アプリケーションサーバーの `start` コマンドに Java オプションとして追加し、ファイルを保存します。

注意：JBoss がサービスとして実行されている場合、他の JVM 引数が定義されているレジストリに、Java オプションを追加します。

```
-Dwasp.location= <configuration files location>
```

例えば、デフォルトの FileNet Application Engine インストールを Windows オペレーティングシステムで使用する場合、次の Java オプションを追加します。

```
-Dwasp.location=C:/Progra~1/FileNet/AE/CE_API/wsi
```

- 3 デプロイメントで Process Engine Connector サービスを使用している場合は、`[JBoss root]/client/logkit.jar` を次のディレクトリにコピーします。
 - `[JBoss root]/server/lc_turnkey/lib`

4 [JBoss root]/bin フォルダーにある adobe-component-ext.properties ファイルを開きます（ファイルが存在しない場合は、ファイルを作成します）。

5 次の FileNet Application Engine JAR ファイルの場所を指定する、新しいシステムプロパティを追加します。

FileNet 4.x の場合、次の JAR ファイルを追加します。

- javaapi.jar
- soap.jar
- wasp.jar
- builtin_serialization.jar (FileNet 4.0 のみ)
- wsdl_api.jar
- jaxm.jar
- jaxrpc.jar
- saaj.jar
- jetty.jar
- runner.jar
- p8cjares.jar
- Jace.jar
- (オプション) pe.jar

FileNet 5.0 の場合、次の JAR ファイルを追加します。

- Jace.jar
- javaapi.jar
- log4j.jar
- mailapi.jar
- pe.jar
- stax-api.jar
- xlxpScanner.jar
- xlxpScannerUtils.jar
- xml.jar

注意：pe.jar ファイルは、デプロイメントで IBMFileNetProcessEngineConnector サービスを使用する場合にのみ追加します。新しいシステムプロパティには、次の構造を反映させる必要があります。

[component id].ext=[JAR files and/or folders]

注意：プロパティファイルの既存のコンテンツを上書きしないでください。コンテンツに新しいシステムプロパティを追加します。

例えば、デフォルトの FileNet Application Engine インストールを Windows オペレーティングシステムで使用する場合、次のシステムプロパティをファイルに追加します。その際、システムプロパティは新しい行に記述し、行中に改行を入れず、末尾で改行してください。

注意：次のテキストには、改行が含まれています。このテキストを、このドキュメント以外の場所にコピーする場合は、新しい場所に貼り付けるときに改行を削除してください。

注意：FileNet 4.x の場合、次のファイルを追加します。

```
com.adobe.livecycle.ConnectorforIBMFFileNet.ext=
C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/lib2/javaapi.jar,
C:/Program Files/FileNet/AE/Workplace/WEB-INF/lib/soap.jar,
C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/wsi/lib/wasp.jar,
C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/wsi/lib/builtin_serialization.jar,
C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/wsi/lib/wsdl_api.jar,
C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/wsi/lib/jaxm.jar,
C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/wsi/lib/jaxrpc.jar,
C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/wsi/lib/saaj.jar,
C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/wsi/lib/jetty.jar,
C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/wsi/lib/runner.jar,
C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/lib2/p8cjares.jar,
C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/lib/Jace.jar,
C:/Program Files/FileNet/AE/Workplace/WEB-INF/lib/pe.jar
```

注意：C:\Program Files\FileNet\AE\Workplace\WEB-INF\lib\pe.jar は、実際のデプロイメントで **IBMFFileNetProcessEngineConnector** サービスを使用している場合にのみ追加します。

注意：FileNet 4.5 の場合は、C:\Program Files\FileNet\AE\CE_API\wsi\lib\builtin_serialization.jar の行を削除します。

注意： FileNet 5.0 の場合、次の JAR ファイルを追加します。

```
C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/lib/Jace.jar,
C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/lib2/javaapi.jar,
C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/lib2/log4j.jar,
C:/Program Files/FileNet/AE/Router/lib/mailapi.jar,
C:/Program Files/FileNet/AE/Workplace/WEB-INF/lib/pe.jar,
C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/lib/stax-api.jar,
C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/lib/xlxpScanner.jar,
C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/lib/xlxpScannerUtils.jar,
C:/Program Files/FileNet/AE/Router/java/jre/lib/xml.jar
```

6 (FileNet Process Engine Connector のみ) 次の手順で、プロセスエンジンの接続プロパティを設定します。

- テキストエディターを使用してファイルを作成し、次のコンテンツを 1 行で入力します。末尾で改行してください。

```
RemoteServerUrl = cemp:http://[contentserver_IP]:[contentengine_port]/
wsı/FNCEWS40DIME/
```

- このファイルを WcmApiConfig.properties という名前で別のフォルダーに保存して、そのフォルダーの場所を adobe-component-ext.properties ファイルに追加します。

例えば、このファイルを c:\pe_config\WcmApiConfig.properties として保存して、パス c:\pe_config を adobe-component-ext.properties ファイルに追加します。

注意：ファイル名では大文字と小文字が区別されます。

7 次のフォルダーで login-config.xml ファイルを探し、次のアプリケーションポリシーを <policy> ノードの子として追加します。

- [JBoss root]/server/lc_turnkey/conf

```
<application-policy name = "FileNetP8WSI">
  <authentication>
    <login-module code = "com.filenet.api.util.WSILoginModule" flag =
      "required" />
  </authentication>
</application-policy>
```

8 (FileNet Process Engine Connector のみ) 実際のデプロイメントでプロセスエンジンを使用している場合は、次のノードを login-config ファイルに追加します。

```
<application-policy name = "FileNetP8">
  <authentication>
    <login-module code = "com.filenet.api.util.WSILLoginModule" flag =
      "required" />
  </authentication>
</application-policy>
```

9 アプリケーションサーバーが現在実行されていない場合は、サービスを起動します実行されている場合は、サーバーを停止し、再起動します。

10 JBoss がサービスとして実行されている場合は、JBoss for Adobe LiveCycle ES3 サービスを開始（または再開）します。

11 Web ブラウザーを開き、次の URL を入力します。

[http://\[host\]:\[port\]/adminui](http://[host]:[port]/adminui)

12 次のデフォルトのユーザー名とパスワードを使用してログインします。

ユーザー名 : administrator

パスワード : password

13 サービス／Connector for IBM FileNet をクリックします。

14 必要なすべての FileNet リポジトリ情報を入力し、「リポジトリリサービスプロバイダー」の下で「IBM FileNet リポジトリプロバイダー」を選択します。

オプションのプロセスエンジンサービスをデプロイメントで使用する場合、「プロセスエンジン設定」領域で「プロセスエンジンコネクタサービスを使用」を選択し、プロセスエンジンの各設定を指定します。詳しくは、ページの右上隅にある「ヘルプ」リンクをクリックします。

注意：この手順で指定する資格情報は、IBM FileNet リポジトリリサービスを後で起動するときに検証されます。資格情報が無効な場合はエラーが発生し、サービスは起動されません。

15 「保存」をクリックし、サービス／アプリケーションおよびサービス／サービスの管理に移動します。

16 IBMFileNetProcessEngineConnector（設定されている場合）の横のチェックボックスを選択して、「開始」をクリックします。

17 次の各サービスの横にあるチェックボックスを選択して「開始」をクリックします。

- IBMFileNetAuthProviderService
- IBMFileNetContentRepositoryConnector
- IBMFileNetRepositoryProvider
- IBMFileNetProcessEngineConnector（設定されている場合）

サービスのいずれかが正常に開始しない場合は、手順 15 で入力した設定を確認します。

18 次のいずれかの操作を行います。

- FileNet Authorization サービス (IBMFileNetAuthProviderService) を使用して Workbench の Resources ビューで FileNet オブジェクトストアからコンテンツを表示するには、この手順を続行します。FileNet Authorization サービスを使用すると、デフォルトの LiveCycle 認証が上書きされるので、FileNet の資格情報を使用して Workbench にログインするように設定する必要があります。
- LiveCycle リポジトリを使用するには、LiveCycle の上級管理者の資格情報（デフォルトは **Administrator** と **password**）を使用して Workbench にログインします。この場合、手順 15 で指定した資格情報は、デフォルトリポジトリにアクセスするためにデフォルトの LiveCycle 認証サービスを使用します。

19 次のタスクを実行して、リモートおよび EJB のエンドポイントを有効にします。

- Administration Console にログインして、**ホーム／サービス／アプリケーションおよびサービス／サービスの管理** を選択します。
- Connector for IBM FileNet** カテゴリをフィルタリングして、「**IBMFileNetContentRepositoryConnector:1.0**」 をクリックします。
- 無効になっているエンドポイントを選択して有効にします。

20 アプリケーションサーバーを再起動します。

21 Administration Console にログインし、**設定／User Management／ドメインの管理** をクリックします。

22 「**新規エンタープライズドメイン**」をクリックして、ドメイン ID と名前を入力します。ドメイン ID は、ドメインの一意の識別子です。名前は、ドメインの識別名です。

注意：LiveCycle データベースとして MySQL を使用している場合、ID には 1 バイト (ASCII) 文字のみを使用してください (LiveCycle の管理ヘルプの「エンタープライズドメインの追加」を参照)。

23 カスタム認証プロバイダーを追加します。

- 「**認証を追加**」をクリックします。
- 「**認証プロバイダー**」リストで「**カスタム**」を選択します。
- 「**IBMFilenetAuthProviderService**」を選択し、「**OK**」をクリックします。

24 LDAP 認証プロバイダーを追加します。

- 「**認証を追加**」をクリックします。
- 「**認証プロバイダー**」リストで「**LDAP**」を選択し、「**OK**」をクリックします。

25 LDAP ディレクトリを追加します。

- 「**ディレクトリを追加**」をクリックし、「**プロファイル名**」ボックスに一意の名前を入力して、「**次へ**」をクリックします。
- 「**サーバー**」、「**ポート**」、「**SSL**」、「**バインド**」および「**ページに次の情報を入力**」オプションの値を指定します。「**バインド**」オプションで「**ユーザー**」を選択する場合は、「**名前**」と「**パスワード**」フィールドにも値を指定する必要があります。
- (オプション) 必要に応じてベースドメイン名を取得するには、「**BaseDN を取得**」を選択します。完了したら、「**次へ**」をクリックします。
- ユーザー設定を指定し、「**次へ**」をクリックし、必要に応じてグループ設定を指定して「**次へ**」をクリックします。

設定について詳しくは、ページの右上隅にある「**ヘルプ**」リンクをクリックしてください。

26 「**OK**」をクリックして「**ディレクトリを追加**」ページを閉じ、もう一度「**OK**」をクリックします。

27 新しいエンタープライズドメインを選択し、「**今すぐ同期**」をクリックします。LDAP ネットワークのユーザーとグループ数および接続の速度によって、同期処理には数分かかる場合があります。

(オプション) 同期のステータスを確認するには、「**更新**」をクリックし、「**現在の同期の状態**」列にステータスを表示します。

28 **設定／User Management／ユーザーとグループ**をクリックします。

29 LDAP から同期されたユーザーを検索し、以下のタスクを実行します。

- 1つ以上のユーザーを選択し、「**ロールをアサイン**」をクリックします。
- 1つ以上の LiveCycle のロールを選択し、「**OK**」をクリックします。
- 「**OK**」をもう一度クリックして、ロールアサインを確認します。

ロールをアサインするすべてのユーザーについて、この手順を繰り返します。詳しくは、ページの右上隅にある「ヘルプ」リンクをクリックします。

30 Workbench を起動して、IBM FileNet リポジトリ用の次の資格情報を使用してログインします。

ユーザー名 : [username]@[repository_name]

パスワード : [password]

これで、FileNet オブジェクトストアが Workbench の Resources ビューに表示されます。**username@repository name** を使用してログインしない場合、Workbench では、手順 15 で指定したデフォルトリポジトリへのログインが試行されます。

31 (オプション) Connector for IBM FileNet の LiveCycle サンプルをインストールする場合、**Samples** という名前の FileNet オブジェクトストアを作成してその中にインストールします。

Connector for IBM FileNet サービスを設定したら、LiveCycle 管理ヘルプを参照することをお勧めします。FileNet リポジトリを使用した Workbench の機能の設定について、Document Services 管理ヘルプを参照することをお勧めします。

5.19 Connector for EMC Documentum の設定

注意 : LiveCycle が EMC Documentum をサポートしているのは、バージョン 6.0 および 6.5 のみです。ECM が適切にアップグレードされていることを確認してください。

Connector for EMC Documentum を LiveCycle ソリューションの一部としてインストールした場合は、次の手順を実行して、Documentum リポジトリに接続するように、このサービスを設定します。

Connector for EMC Documentum の設定

1 [JBoss root]/bin フォルダーにある adobe-component-ext.properties ファイルを開きます（ファイルが存在しない場合は、ファイルを作成します）。

2 次の Documentum Foundation Classes JAR ファイルを指定する新しいシステムプロパティを追加します。

- dfc.jar
- aspectjrt.jar
- log4j.jar
- jaxb-api.jar
- (Connector for EMC Documentum 6.5 のみ)
 - configservice-impl.jar
 - configservice-api.jar

新しいシステムプロパティは、次の形式にする必要があります。

[component id].ext=[JAR files and/or folders]

例えば、デフォルトの Content Server と Documentum Foundation Classes のインストールを使用して、次のいずれかのシステムプロパティをファイルに追加します。その際、システムプロパティは新しい行に記述し、行中に改行を入れず、末尾で改行してください。

- Connector for EMC Documentum 6.5 のみ :

```
com.adobe.livecycle.ConnectorforEMCDocumentum.ext=
C:/Program Files/Documentum/Shared/dfc.jar,
C:/ProgramFiles/Documentum/Shared/aspectjrt.jar,
C:/Program Files/Documentum/Shared/log4j.jar,
C:/Program Files/Documentum/Shared/jaxb-api.jar,
C:/Program Files/Documentum/Shared/configservice-impl.jar,
C:/Program Files/Documentum/Shared/configservice-api.jar
```

注意：上記のテキストには、改行が含まれています。このテキストをコピー&ペーストする場合、改行を削除してください。

- 3** Web ブラウザーを開き、次の URL を入力します。

`http://[host]:[port]/adminui`

- 4** 次のデフォルトのユーザー名とパスワードを使用してログインします。

ユーザー名 : administrator

パスワード : password

- 5** サービス／Connector for EMC Documentum／環境設定に移動して、以下のタスクを実行します。

- 必要な Documentum リポジトリ情報のすべてを入力します。
- Documentum をリポジトリプロバイダーとして使用するには、「リポジトリサービスプロバイダー」で「EMC Documentum リポジトリプロバイダー」を選択し、「保存」をクリックします。詳しくは、[Adobe LiveCycle ES3 管理ヘルプ](#) のページの右上にあるヘルプリンクをクリックしてください。

- 6** (オプション) サービス／Connector for EMC Documentum／リポジトリ証明書の設定に移動して、「追加」をクリックし、Docbase 情報を指定して、「保存」をクリックします (詳しくは、右上隅の「ヘルプ」をクリックしてください)。

- 7** アプリケーションサーバーが現在実行されていない場合は、サーバーを起動します。実行されている場合は、サーバーを停止し、再起動します。

- 8** Web ブラウザーを開き、次の URL を入力します。

`http://[host]:[port]/adminui`

- 9** 次のデフォルトのユーザー名とパスワードを使用してログインします。

ユーザー名 : administrator

パスワード : password

- 10** サービス／アプリケーションおよびサービス／サービスの管理に移動して、以下のサービスを選択します。

- EMCDocumentumAuthProviderService
- EMCDocumentumContentRepositoryConnector
- EMCDocumentumRepositoryProvider

- 11** 「開始」をクリックします。サービスのいずれかが正常に起動されない場合は、前の手順で実行した設定を確認します。

- 12** 次のいずれかの操作を行います。

- Documentum Authorization サービス (EMCDocumentumAuthProviderService) を使用して、Workbench の Resources ビューで Documentum リポジトリのコンテンツを表示するには、この手順を続行します。
Documentum Authorization サービスを使用すると、デフォルトの LiveCycle 認証が上書きされるので、Documentum の資格情報を使用して Workbench にログインするように設定する必要があります。
- LiveCycle リポジトリを使用するには、LiveCycle の上級管理者の資格情報 (デフォルトは **administrator** と **password**) を使用して Workbench にログインします。

これで、この手順に必要なステップを完了しました。この場合、手順 19 で指定した資格情報を使用してデフォルトリポジトリにアクセスし、デフォルトの LiveCycle 認証サービスを使用します。

13 次のタスクを実行して、リモートおよび EJB のエンドポイントを有効にします。

- Administration Console にログインして、**ホーム／サービス／アプリケーションおよびサービス／サービスの管理** を選択します。
- 「Connector for EMC Documentum」カテゴリをフィルタリングして、「EMC DocumentumContentRepositoryConnector:1.0」をクリックします。
- 無効になっているエンドポイントを選択して有効にします。

14 アプリケーションサーバーを再起動します。

15 Administration Console にログインし、**設定／User Management／ドメインの管理** をクリックします。

16 「新規エンタープライズドメイン」をクリックして、ドメイン ID と名前を入力します。ドメイン ID は、ドメインの一意の識別子です。名前は、ドメインの識別名です。

注意：ID には 1 バイト (ASCII) 文字のみを使用してください (LiveCycle の管理ヘルプの「エンタープライズドメインの追加」を参照)。

17 カスタム認証プロバイダーを追加します。

- 「認証を追加」をクリックします。
- 認証プロバイダーリストで「カスタム」を選択します。
- 「EMCDocumentumAuthProvider」を選択し、「OK」をクリックします。

18 LDAP 認証プロバイダーを追加します。

- 「認証を追加」をクリックします。
- 認証プロバイダーリストで「LDAP」を選択し、「OK」をクリックします。

19 LDAP ディレクトリを追加します。

- 「ディレクトリを追加」をクリックします。
- 「プロファイル名」ボックスに一意の名前を入力し、「次へ」をクリックします。
- 「サーバー」、「ポート」、「SSL」、「バインド」および「ページに次の情報を入力」オプションの値を指定します。「バインド」オプションで「ユーザー」を選択する場合は、「名前」と「パスワード」フィールドにも値を指定する必要があります。
- (オプション) 必要に応じてベースドメイン名を取得するには、「BaseDN を取得」を選択します。
- 「次へ」をクリックし、ユーザー設定を指定して「次へ」をクリックし、必要に応じてグループ設定を指定して「次へ」をクリックします。

設定について詳しくは、ページの右上隅にある「**User Management ヘルプ**」をクリックしてください。

20 「OK」をクリックして「ディレクトリを追加」ページを閉じ、もう一度「OK」をクリックします。

21 新しいエンタープライズドメインを選択し、「今すぐ同期」をクリックします。LDAP ネットワークのユーザーとグループ数および接続の速度によって、同期処理には数分かかる場合があります。

(オプション) 同期のステータスを確認するには、「更新」をクリックし、「現在の同期の状態」列にステータスを表示します。

22 設定／User Management／ユーザーとグループをクリックします。

23 LDAP から同期されたユーザーを検索し、以下のタスクを実行します。

- 1つ以上のユーザーを選択し、「ロールをアサイン」をクリックします。

- 1つ以上の LiveCycle のロールを選択し、「OK」をクリックします。
 - 「OK」をもう一度クリックして、ロールアサインを確認します。
- ロールをアサインするすべてのユーザーについて、この手順を繰り返します。詳しくは、ページの右上隅にある「User Management ヘルプ」をクリックしてください。

24 Workbench を起動し、Documentum リポジトリ用の次の資格情報を使用してログインします。

Username : [username]@[repository_name]

Password : [password]

ログイン後は、Documentum リポジトリは、Workbench 内の Resources ビューに表示されます。

username@repository_name を使用してログインしない場合、Workbench では、デフォルトリポジトリへのログインが試行されます。

25 (オプション) Connector for EMC Documentum の LiveCycle サンプルをインストールするには、Samples という名前の Documentum リポジトリを作成して、その中にインストールします。

Connector for EMC Documentum サービスの設定後の、Documentum リポジトリでの Workbench の設定については、LiveCycle 管理ヘルプを参照してください。

5.20 Connector for IBM Content Manager の設定

注意：LiveCycle が IBM Content Manager をサポートしているのは、バージョン 8.4 のみです。ECM が適切にアップグレードされていることを確認してください。

Connector for IBM Content Manager サービスを LiveCycle ソリューションの一部としてインストールした場合は、次の手順を実行して、IBM Content Manager データストアに接続するようサービスを設定します。

Connector for IBM Content Manager の設定

- [JBoss root]/bin フォルダーにある adobe-component-ext.properties ファイルを探します。ファイルが存在しない場合は作成します。
- 次の IBM II4C JAR ファイルの場所を指定する、新しいシステムプロパティを追加します。
 - cmb81.jar
 - cmbcm81.jar
 - cmbicm81.jar
 - cmblog4j81.jar
 - cmbsdk81.jar
 - cmbutil81.jar
 - cmbutilicm81.jar
 - cmbview81.jar
 - cmbwas81.jar
 - cmbwcm81.jar
 - cmgmt

注意 : cmgmt は JAR ファイルではありません。Windows では、このフォルダーはデフォルトで C:\Program Files\IBM\db2cmv8\ にあります。

- common.jar
- db2jcc.jar
- db2jcc_license_cisuz.jar
- db2jcc_license_cu.jar
- ecore.jar
- ibmjgssprovider.jar
- ibmssseprovider2.jar
- ibmpkcs.jar
- icrmm81.jar
- jcache.jar
- log4j-1.2.8.jar
- xerces.jar
- xml.jar
- xsd.jar

新しいシステムプロパティは次のようになります。

[component id].ext=[JAR files and/or folders]

例えば、デフォルトの DB2 Universal Database Client および II4C インストールを使用する場合、次のシステムプロパティをファイルに追加します。その際、システムプロパティは新しい行に記述し、行中に改行を入れず、末尾で改行してください。

```
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/cmgmt,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/java/jre/lib/ibmssseprovider2.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/java/jre/lib/ibmjgssprovider.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/java/jre/lib/ibmpkcs.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/java/jre/lib/xml.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmbview81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmb81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmbcm81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/xsd.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/common.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib.ecore.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmbicm81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmbwcm81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/jcache.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmbutil81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmbutilicm81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/icrmm81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/db2jcc.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/db2jcc_license_cu.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/db2jcc_license_cisuz.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/xerces.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmblog4j81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/log4j-1.2.8.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmbsdk81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmbwas81.jar
```

- 3 アプリケーションサーバーが現在実行されていない場合は、サーバーを起動します。実行されている場合は、サーバーを停止し、再起動します。

これで、IBMCMConnectorService プロパティシートから IBM Content Manager データストアに、「Use User credentials」をログインモードとして使用して接続できます。

これで、この手順に必要なステップを完了しました。

(オプション) IBMCMConnectorService プロパティシートから IBM Content Manager データストアに、「Use Credentials From Process Context」をログインモードとして使用して接続するには、次の手順を実行します。

「Use Credentials from process context」ログインモードを使用した接続

1 Web ブラウザーを開き、次の URL を入力します。

http://[host]:[port]/adminui

2 上級管理者の資格情報を使用してログインします。インストール中に設定されたデフォルト値は、次のとおりです。

ユーザー名 : administrator

パスワード : password

3 サービス／Connector for IBM Content Manager／環境設定をクリックします。

4 必要なリポジトリ情報のすべてを入力して「保存」をクリックします。IBM Content Manager リポジトリ情報について詳しくは、ページの右上隅にある「ヘルプ」リンクをクリックします。

5 次のいずれかのタスクを実行します。

- IBM Content Manager Authorization サービス (IBMCMPServiceProvider) を使用して IBM Content Manager データストアのコンテンツを Workbench の Processes ビューで使用するには、この手順を続行します。IBM Content Manager Authorization サービスを使用すると、デフォルトの LiveCycle 認証が上書きされるので、IBM Content Manager の資格情報を使用して Workbench にログインするように設定する必要があります。
- Workbench の Processes ビューで IBM Content Manager データストアのコンテンツを使用するために手順 4 で指定したシステム資格情報を使用するには、LiveCycle の上級管理者の資格情報（デフォルトは **administrator** と **password**）を使用して、Workbench にログインします。これで、この手順に必要なステップを完了しました。この場合、手順 4 で指定したシステム資格情報は、デフォルトリポジトリにアクセスするためのデフォルトの LiveCycle 認証サービスを使用します。

6 Administration Console にログインし、設定／User Management／ドメインの管理をクリックします。

7 「新規エンタープライズドメイン」をクリックして、ドメイン ID と名前を入力します。ドメイン ID は、ドメインの一意の識別子です。名前は、ドメインの識別名です。

注意 : ID には 1 バイト (ASCII) 文字のみを使用してください ([LiveCycle 管理ヘルプ](#) の「エンタープライズドメインの追加」を参照)。

8 カスタム認証プロバイダーを追加します。

- 「認証を追加」をクリックします。
- 認証プロバイダーリストで「カスタム」を選択し、「**IBMCMAuthProviderService**」を選択して、「OK」をクリックします。

9 LDAP 認証プロバイダーを追加します。

- 「認証を追加」をクリックします。
- 認証プロバイダーリストで「LDAP」を選択し、「OK」をクリックします。

10 LDAP ディレクトリを追加します。

- 「ディレクトリを追加」をクリックします。
- 「プロファイル名」ボックスに一意の名前を入力し、「次へ」をクリックします。

- 「サーバー」、「ポート」、「SSL」、「バインド」および「ページに次の情報を入力」オプションの値を指定します。「バインド」オプションで「ユーザー」を選択する場合は、「名前」と「パスワード」フィールドにも値を指定する必要があります。(オプション) 必要に応じてベースドメイン名を取得するには、「BaseDN を取得」を選択します。完了したら、「次へ」をクリックします。

- ユーザー設定を指定し、「次へ」をクリックし、必要に応じてグループ設定を指定して「次へ」をクリックします。

上記の設定について詳しくは、ページの右上隅にある「ヘルプ」リンクをクリックしてください。

11 「OK」をクリックして「ディレクトリを追加」ページを閉じ、もう一度「OK」をクリックします。

12 新しいエンタープライズドメインを選択し、「今すぐ同期」をクリックします。LDAP ネットワークのユーザーとグループ数および接続の速度によって、同期処理には数分かかる場合があります。

13 同期のステータスを確認するには、「更新」をクリックし、「現在の同期の状態」列にステータスを表示します。

14 設定／User Management／ユーザーとグループをクリックします。

15 LDAP から同期されたユーザーを検索し、以下のタスクを実行します。

- 1つ以上のユーザーを選択し、「ロールをアサイン」をクリックします。
- 1つ以上の LiveCycle のロールを選択し、「OK」をクリックします。
- 「OK」をもう一度クリックして、ロールアサインを確認します。

ロールをアサインするすべてのユーザーについて、この手順を繰り返します。詳しくは、ページの右上隅にある「ヘルプ」リンクをクリックします。

16 Workbench を起動し、IBM Content Manager データストア用の次の資格情報を使用してログインします。

Username : [username]@[repository_name]

Password : [password]

これで、IBMCMConnectorService オーケストレーション可能コンポーネントのログインモードが「Use Credentials from process context」と選択されている場合に、Workbench の Processes ビューで IBM Content Manager データストアを使用できます。

5.21 SharePoint クライアントアクセスの設定

Microsoft SharePoint クライアントを設定して、LiveCycle からコンテンツサービスにアクセスできます。そのためには、Configuration Manager を使用して、SharePoint Alfresco Module Package を追加します。SharePoint AMP ファイル (adobe-vti-module.amp) は、[LiveCycle root]\sdk\misc\ContentServices フォルダーにあります。

SharePoint AMP を追加した後で、次の手順を実行します。

5.21.1 share.war ファイルの取得と編集

Alfresco CMS では、share.war ファイルを使用して、Content Services に接続します。SharePoint クライアントが Content Services にアクセスできるようにするには、share.war ファイルを変更する必要があります。

- Alfresco インストールから share.war を取得します。詳しくは、Alfresco のドキュメントを参照してください。
- ファイルシステム内のディレクトリに share.war ファイルをコピーします。
- WinRAR などのファイルアーカイブユーティリティを使用して、share.war ファイルを開きます。
- ファイルアーカイブユーティリティのウィンドウから、ファイル WEB-INF/classes/alfresco/webscript-framework-config.xml を抽出し、テキストエディターで開きます。

- 5 行 <endpoint-url>http://localhost:8080/**alfresco**/s</endpoint-url> を探して、これを <endpoint-url>http://localhost:8080/**contentspace**/s</endpoint-url> に変更します。
- 6 ファイルを保存して閉じます。

5.21.2 share.war ファイルのデプロイ

- 1 WinRar などのアーカイブユーティリティを使用し、[JBoss root]/server/lc_turnkey/deploy/ ディレクトリで、アーカイブファイル adobe-contentservices.ear を開きます。
- 2 アーカイブユーティリティのウィンドウで開いた adobe-contentservices.ear アーカイブに、更新済みの share.war ファイルを追加します。
- 3 ファイルアーカイブユーティリティのウィンドウからローカルファイルシステムのフォルダーに、ファイル application.xml を抽出して、テキストエディターで開きます。このファイルは、adobe-contentservices.ear\META-INF ディレクトリにあります。
- 4 <application> タグの下に、次の行を追加します。

```
<module id="Share">
  <web>
    <web-uri>share.war</web-uri>
    <context-root>/share</context-root>
  </web>
</module>
```

- 1 更新した application.xml ファイルを、adobe-contentservices.ear アーカイブにコピーして戻します。
- 2 アーカイブを保存して閉じます。
- 3 更新した EAR ファイルを [JBoss root]/server/lc_turnkey/deploy/ ディレクトリにコピーして、デプロイします。

5.22 IPv6 モードでの CIFS の有効化

IPv6 の実装で Content Services の CIFS を有効にする場合は、LiveCycle をホストするマシンに補足の IPv6 アドレスを明示的に追加する必要があります。この IPv6 アドレスは、クライアントと同じサブネットに存在する静的 IP アドレスであることが必要です。Configuration Manager を使用して LiveCycle を設定した後で、次のタスクを実行する必要があります。通常は、EAR ファイルの設定の後で Configuration Manager を一時停止してから、EAR ファイルを編集します。EAR ファイルを編集した後で Configuration Manager に戻り、更新した EAR ファイルを、選択した他の EAR ファイルと共にデプロイできます。

注意: ユーザーが CIFS を介してリポジトリにアクセスしていた場合、ユーザーは Content Services の権限が失効した後もリポジトリにアクセスできます。

5.22.1 contentservices.war ファイルの編集

- 1 [LiveCycle root]\configurationManager\export ディレクトリに移動します。
- 2 WinRar などのファイルアーカイブユーティリティを使用して、contentservices.war ファイルを開きます。
- 3 ファイルアーカイブユーティリティのウィンドウから、ファイル contentservices.war\WEB-INF\classes\alfresco\file-services-custom.xml を抽出して、テキストエディターで開きます。
- 4 次の行を探し、`ipv6="enabled"` を追加して、この行を変更します。
`<tcpipSMB platforms="linux,solaris,macosx,windows,AIX"/>`
これを次のように変更します。

```
<tcipSMB platforms="linux,solaris,macosx,windows,AIX" ipv6="enabled"/>
```

- 5 ファイルを保存して閉じます。
 - 6 ファイルアーカイブユーティリティのウィンドウから、ファイル contentservices.war\WEB-INF\classes\alfresco\extension\file-servers.properties を抽出して、テキストエディターで開きます。
 - 7 行 cifs.ipv6=disabled を探して、cifs.ipv6=enabled に置き換えます。
 - 8 ファイルを保存して閉じます。
 - 9 更新した file-servers-custom.xml ファイルを、contentservices.war\WEB-INF\classes\alfresco\ にあるアーカイブにコピーします。
 - 10 更新した file-servers.properties ファイルを、contentservices.war\WEB-INF\classes\alfresco\extension\ にあるアーカイブにコピーします。
 - 11 contentservices.war ファイルを保存します。
- EAR ファイルを更新した後で、Configuration Manager を使用して、更新した EAR ファイルをデプロイする必要があります。

5.23 アップグレード後の LiveCycle ES Update 1 または LiveCycle ES2 のアンインストール

環境を LiveCycle にアップグレードし、新しいシステムが正常に動作していることを確認した後は、LiveCycle ES Update 1 または LiveCycle ES2 製品ファイルを削除できます。

5.23.1 次の手順で製品ファイルを削除します。

- 1 スタート/コントロールパネル/プログラムの追加と削除を選択し、「[LiveCycle ES Update 1 または LiveCycle ES2]」をクリックして、「削除」をクリックします。
- 2 JBoss および MySQL のコンポーネントを削除するために、JBoss と MySQL を選択します。
- 3 画面上の指示に従って操作し、「完了」をクリックします。
- 4 コンピューターを再起動します。

5.24 システムイメージバックアップの実行

実稼働環境に LiveCycle をインストールおよびデプロイした後、このシステムを稼働する前に、LiveCycle を設定およびデプロイしたサーバーのシステムイメージバックアップを実行することをお勧めします。このバックアップには、LiveCycle のデータベース、GDS ディレクトリおよびアプリケーションサーバーを含める必要があります。これは、ハードドライブまたはコンピューター全体が動作しなくなった場合に、コンピューターの内容の復元に使用できる完全なシステムバックアップです。LiveCycle 管理ヘルプの「LiveCycle のバックアップと回復」を参照してください。

5.25 LiveCycle のアンインストール

LiveCycle のアンインストールプログラムを使用すると、自動インストールの場合に JBoss、MySQL または LiveCycle のコンポーネントを選択して削除できます。MySQL を削除する前に、残す必要があるデータをバックアップします。

- 1 スタート／コントロールパネル／プログラムの追加と削除を選択し、「Adobe LiveCycle ES3」をクリックして、「アンインストールと変更」をクリックします。
- 2 Adobe LiveCycle ES3 をアンインストール画面で、「次へ」をクリックします。
- 3 自動オプション製品を削除しますか画面で、「JBoss」と「MySQL」を選択して、LiveCycle コンポーネントと一緒にこれらのコンポーネントを削除します。「次へ」をクリックします。
- 4 Enterprise Suite サービスの停止で、「アンインストール」をクリックします。
- 5 画面上の指示に従って操作し、「完了」をクリックします。
- 6 指示に従い、コンピューターを再起動します。

注意：LiveCycle のアンインストール後も JBoss または MySQL を使用し続ける場合は、Microsoft Windows のプログラムの追加と削除ユーティリティを使用して、後でこれらのアプリケーションを削除できます。JDK がサーバーにインストールされていない場合、JBoss や MySQL の削除に失敗する可能性があります。

第6章：高度な設定作業

6.1 連邦情報処理規格（FIPS）の有効化

LiveCycleにはFIPSモードがあり、RSA BSAFE Crypto-C 2.1暗号化モジュールを使用して、データ保護を連邦情報処理規格（FIPS）140-2承認アルゴリズムに限定しています。

LiveCycleの設定中に Configuration Managerを使用してこのオプションを有効化しなかった場合、または有効化した設定を無効化する場合は、管理コンソールからこの設定を変更できます。

FIPSモードを変更した場合は、サーバーを再起動する必要があります。

FIPSモードはAcrobat 7.0より前のバージョンをサポートしていません。FIPSモードが有効で、パスワードによる暗号化およびパスワード削除のプロセスにAcrobat 5の設定が含まれる場合、このプロセスは失敗します。

通常、FIPSが有効化されると、Assemblerサービスでは、どのドキュメントにもパスワードの暗号化が適用されません。この処理が試行されると、FIPSModeExceptionが発生し、FIPSモードではパスワードを暗号化できないことが示されます。また、ベースドキュメントがパスワードで暗号化されている場合、PDFsFromBookmarksエレメントはFIPSモードではサポートされません。

- 1** Administration Consoleにログインします。
- 2** 設定／コアシステム設定／設定をクリックします。
- 3** 「FIPSを有効にする」を選択してFIPSモードを有効化するか、選択を解除してFIPSモードを無効化します。
- 4** 「OK」をクリックして、アプリケーションサーバーを再起動します。

注意：LiveCycleソフトウェアでは、コードを検証してFIPSの互換性を確認しません。FIPS操作モードは、FIPSで承認されたライブラリ（RSA）の暗号化サービスで、FIPSで承認されたアルゴリズムが使用されるようにするために提供されています。

6.2 AES-256 暗号化の有効化

PDFファイルにAES 256暗号化を使用するには、Java Cryptography Extension (JCE) Unlimited Strength Jurisdiction Policyファイルを入手し、インストールします。それらのファイルで、
[Adobe_JAVA_HOME]/lib/securityフォルダーのlocal_policy.jarファイルとUS_export_policy.jarファイルを置き換えます。例えば、Sun JDK 1.6を使用している場合、ダウンロードファイルを**[LiveCycle root]/Java/jdk1.6.0_26/lib/security**フォルダーにコピーします。

「Java SE Downloads」からこれらのファイルをダウンロードすることができます。

第7章：付録 - コマンドラインインターフェイスのインストール

7.1 概要

LiveCycleには、インストールプログラム用にコマンドラインインターフェイス(CLI)が用意されています。CLIは、LiveCycleの上級ユーザーが使用したり、インストールプログラムのグラフィカルユーザーインターフェイス(GUI)がサポートされていないサーバー環境で使用したりすることを前提としています。CLIはコンソールモードで実行します。1つのインターラクティブセッションで、すべてのインストール操作を行うことができます。

CLIインストールオプションを使用してモジュールをインストールする前に、該当する準備ガイド(新規のシングルサーバーインストール、クラスター設定アップまたはアップグレード)に従って、LiveCycleの実行に必要な環境の準備が整っていることを確認します。LiveCycleのドキュメント一式は

http://www.adobe.com/go/learn_lc_documentation_10_jp から入手できます。

インストール手順の概要については、事前準備を参照してください。

インストールプロセスを開始したら、画面の指示に従ってインストールオプションを選択します。各プロンプトに応答しながらインストールを進めてください。

注意：前の手順で選択した内容を変更する場合は、`back`と入力します。`quit`と入力すれば、いつでもインストールをキャンセルできます。

7.2 LiveCycle のインストール

1 コマンドプロンプトを開き、実行可能なインストーラーが含まれるインストールメディアまたはハードディスクのフォルダーに移動します。

- (Windows) `server\Disk1\InstData\Windows_64\VM`
- (Linux) `server/Disk1/InstData/Linux/NoVM`
- (Solaris) `server/Disk1/InstData/Solaris/NoVM`

2 コマンドプロンプトを開いて、次のコマンドを実行します。

- (Windows) `install.exe -i console`
- (Windows以外) `./install.bin -i console`

注意：`-i console`オプションを指定せずにコマンドを入力すると、GUIベースのインストーラーが起動します。

3 次の表の説明に従って、プロンプトに応答します。

プロンプト	説明
Choose Locale	インストールで使用するロケールを値 1 ~ 2 を入力して選択します。デフォルト値を選択するには、 Enter キーを押します。 English、または日本語を選択できます。デフォルトの言語は日本語です。
Upgrade Installation	インストールオプションを選択して、 Enter キーを押します。Perform Update または Skip Update を選択できます。 インストーラーによって LiveCycle の以前のインストールが検出された場合、既存のインストールのアップグレードを選択できます。アップグレードインストールでは、現在のインストールで役立つよう既存のインストールの情報が使用されます。
Choose Install Folder	Destination 画面で、 Enter キーを押してデフォルトディレクトリを使用するか、新しいインストールディレクトリの場所を入力します。 デフォルトのインストールフォルダーは次のとおりです。 (Windows) : C:\Adobe\Adobe LiveCycle ES3 (Windows 以外) : opt/adobe/adobe_lifecycle_es3 ディレクトリ名にアクセント記号付きの文字を使用しないでください。アクセント記号付きの文字を使用すると、CLI によってアクセントが無視され、アクセント記号付きの文字が変更されてからディレクトリが作成されます。
LiveCycle Server License Agreement	Enter キーを押して、使用許諾契約のページに目を通します。 契約に同意する場合は、Y を入力し、 Enter キーを押します。
Pre-Installation Summary	選択したインストール内容を確認し、その内容でインストールを続行する場合は Enter キーを押します。 前の手順に戻って設定を変更するには、back と入力します。
Ready To Install	インストーラーによってインストールディレクトリが表示されます。 Enter キーを押すと、インストールプロセスが開始します。
Installing	インストール中、進行状況バーによりインストールの進行状況が示されます。
Configuration Manager	Enter キーを押すと、LiveCycle のインストールが完了します。 Configuration Manager を GUI モードで実行するには、次のスクリプトを呼び出します。 (Windows) : C:\Adobe\Adobe LiveCycle ES3\configurationManager\bin\ConfigurationManager.bat (Windows 以外) : opt/adobe/adobe_lifecycle_es3/configurationManager/bin/ConfigurationManager.sh
Installation Complete	インストールの完了画面にインストールのステータスと場所が表示されます。 Enter キーを押すと、インストーラーが終了します。

7.3 エラーログ

エラーが発生した場合は、次のインストールのログディレクトリで install.log を確認できます。

- (Windows) [LiveCycle root]\log

7.4 コンソールモードでの LiveCycle のアンインストール

注意：コマンドラインオプションを使用して LiveCycle をインストールした場合は、コマンドラインからアンインストラーを実行するだけで LiveCycle ES3 をアンインストールできます。サイレントアンインストールを実行する場合は、「-i console」フラグを省略します。

1 コマンドプロンプトを開き、アンインストールスクリプトが含まれるディレクトリに移動します。

注意：UNIX システムの場合は、ディレクトリ名にスペースが含まれているので、アンインストールスクリプトが含まれるディレクトリには手動で移動する必要があります。

- (Windows) cd C:\Adobe\Adobe LiveCycle ES3\Uninstall_Adobe LiveCycle ES3
- (UNIX 系のシステム) cd opt/adobe/adobe livecycle es3/Uninstall_Adobe_livecycle ES3

2 プロンプトで次のコマンドを入力し、Enter キーを押します。

- (Windows) Uninstall Adobe LiveCycle ES3-i console
- (Linux、Solaris) ./Uninstall Adobe Livecycle ES3 -i console

3 画面の指示に従って操作します。

プロンプト	説明
LiveCycle ES3 のアンインストール	Enter キーを押すと、アンインストールが続行します。quit と入力すると、アンインストールプログラムが終了します。
Uninstalling...	アンインストールが開始したら、残りのアンインストールプロセスが完了し、カーソルがプロンプトに戻ります。
Uninstall Complete	一部の項目については削除されない可能性があります。また、LiveCycle のインストール後に作成されたフォルダーは削除されません。これらのファイルやフォルダーは手動で削除する必要があります。

第8章：付録 - Configuration Manager コマンドラインインターフェイス

LiveCycleには、Configuration Managerのコマンドラインインターフェイス(CLI)が用意されています。CLIは、LiveCycleの上級ユーザーが使用したり、Configuration Managerのグラフィカルユーザーインターフェイス(GUI)がサポートされていないサーバー環境で使用したりすることを前提としています。

8.1 操作の順序

Configuration Manager CLIは、GUIバージョンのConfiguration Managerの操作と同じ順序で実行する必要があります。CLIの操作は以下の順序で実行してください。

- 1** JBoss Application Serverを停止します(自動アップグレードのみ)。
- 2** GDSディレクトリの内容を移行します(自動アップグレードのみ)。
- 3** カスタムデータソースを移行します(自動アップグレードのみ)。
- 4** LiveCycleを設定します。
- 5** LiveCycleのコア設定を更新します。
- 6** Content Servicesを設定します。
- 7** 既存の自動インストールデータベースを移行します(自動アップグレードのみ)。
- 8** アプリケーションサーバーを設定します。
- 9** LiveCycleを初期化します。
- 10** LiveCycleを検証します。
- 11** コンポーネントのデプロイメント前に重要なタスクを実行します。
- 12** LiveCycleモジュールをデプロイします。
- 13** LiveCycleモジュールデプロイメントを検証します。
- 14** LiveCycleに移行するためのLiveCycle ES Update 1またはLiveCycle ES2のフォームテンプレートを取得します。
- 15** LiveCycleに必要なデータを移行します。
- 16** デプロイメント後の設定を行います。
- 17** PDF Generatorのシステム準備設定を確認します。
- 18** PDF Generatorに管理者ユーザーを追加します。
- 19** Connector for IBM Content Managerを設定します。
- 20** Connector for IBM FileNetを設定します。
- 21** Connector for EMC Documentumを設定します。
- 22** Connector for SharePointを設定します。
- 23** Correspondance Mangementを設定します。

重要: Configuration Manager CLIの操作を完了したら、アプリケーションサーバーを再起動する必要があります。

8.2 コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル

Configuration Manager CLI には、LiveCycle 環境用に定義したプロパティを含む 2 つプロパティファイルが必要です。プロパティファイルのテンプレートである `cli_propertyFile_template.txt` および `cli_propertyFile_upgrade_template.txt` は、`[LiveCycle root]/configurationManager/bin` フォルダーにあります。

- `cli_propertyFile_template.txt` ファイル (LiveCycle のインストールシナリオと設定シナリオに適用されるプロパティ全般を格納)
- `cli_propertyFile_upgrade_template.txt` ファイル (アップグレードタスク専用のプロパティを格納) どちらも以前のバージョンの LiveCycle からのアップグレードで必要です。

これらのファイルのコピーを作成して値を編集する必要があります。このファイルは、使用する Configuration Manager の操作に基づいてカスタマイズできます。次の節で、必要なプロパティとその値について説明します。

プロパティファイルは、インストールの状態に応じて作成する必要があります。次のいずれかの方法を使用します。

- プロパティファイルを作成し、インストールシナリオおよび構成シナリオに応じて値を設定します。
- プロパティファイル `cli_propertyFile_template.txt` をコピーしてそのファイルを `cli_propertyFileupgrade_template.txt` テンプレートとして使用し、使用する Configuration Manager 操作に基づいて値を編集します。
- Configuration Manager の GUI を使用し、GUI バージョンによって作成されたプロパティファイルを CLI バージョンのプロパティファイルとして使用します。`[LiveCycle root]/configurationManager/bin/ConfigurationManager.bat` ファイルを実行すると、`userValuesForCLI.properties` ファイルが `[LiveCycle root]/configurationManager/config` ディレクトリに作成されます。このファイルを Configuration Manager CLI の入力として使用できます。

注意：CLI プロパティファイルでは、Windows パスのディレクトリ区切り文字 (¥) にエスケープ文字 (\) を使用する必要があります。例えば、指定する Fonts フォルダーが C:\Windows\Fonts である場合、Configuration Manager CLI スクリプトでは C:\\Windows\\Fonts と入力する必要があります。

8.3 LiveCycle のアップグレードコマンド

8.3.1 (自動および部分的な自動モードのみ) LiveCycle ES Update 1 または LiveCycle ES2 JBoss 用のシャットダウンコマンド

注意：このコマンドを実行するのは、既存の LiveCycle ES3 自動インストールと LiveCycle 自動インストールが同じマシン上に共存し、自動モードで LiveCycle ES3 をインストールするときにアップグレードインストールを実行することを選択した場合のみです。

`upgrade-shutdownPreviousJBoss` コマンドは、以前の LiveCycle の自動または部分的な自動インストールでインストールされた JBoss サービスをシャットダウンし、サービス実行モードを「手動」に設定します。

このコマンドに必要なプロパティはありません。

8.3.2 (自動および部分的な自動モードのみ) LiveCycle GDS の移行コマンド

注意：このコマンドを実行するのは、既存の LiveCycle ES3 自動インストールと LiveCycle 自動インストールが同じマシン上に共存し、自動モードで LiveCycle ES3 をインストールするときにアップグレードインストールを実行することを選択した場合のみです。

`upgrade-migrateGDS` コマンドは、グローバルドキュメントストレージ (GDS) ディレクトリの内容を既存の LiveCycle GDS のデフォルトの場所からアップグレードする LiveCycle GDS のデフォルトの場所に移行します。

このコマンドは、自動または部分的な自動インストールが指定され、かつデフォルト GDS が使用されている場合にのみ機能します。カスタム GDS が使用されている場合は、内容を手動で移行する必要があります。このコマンドは、Connectors for ECM プロパティファイルも LiveCycle JBoss bin ディレクトリから新しい JBoss の場所に移行します。

このコマンドに必要な入力プロパティはありません。

8.3.3 (自動および部分的な自動モードのみ) LiveCycle データソースの移行コマンド

注意: このコマンドを実行するのは、既存の LiveCycle ES3 自動インストールと LiveCycle 自動インストールが同じマシン上に共存し、自動モードで LiveCycle ES3 をインストールするときにアップグレードインストールを実行することを選択した場合のみです。

upgrade-migrateDataSources コマンドは、JBoss /server/<profile name>/deploy ディレクトリの adobe-ds.xml または <database>-ds.xml データソースファイルに追加されたカスタムデータソース定義を移行します。カスタムデータソースが定義されていない場合は、このコマンドをスキップします。

upgrade-migrateDataSources コマンドでは以下のプロパティを使用できます。

プロパティ	説明	必須	空の値
adobeDSDataSourcesToMigrate	LiveCycle の adobe-ds.xml ファイルから移行する必要があるカスタムデータソースの JNDI_NAME のコンマ区切りリスト。	×	○
mysqlDSDataSourcesToMigrate	LiveCycle <database>-ds.xml ファイルから移行する必要があるカスタムデータソースの JNDI_NAME のコンマ区切りリスト。	×	○

注意: mysqlDSDataSourcesToMigrate プロパティは、MySQL データベースだけではなく、インストール済みの LiveCycle データベースを参照します。

8.3.4 LiveCycle のコア設定の更新コマンド

upgrade-configureCoreSettings コマンドは、LiveCycle の様々なコア設定を更新します。例えば、元の LiveCycle システムで、グローバルドキュメントストレージ (GDS) ディレクトリを C:\LC\GDS に設定しており、新しい LiveCycle ES3 で、E:\DS\GDS に設定する場合、この CLI コマンドを実行しない限り、新しい場所はデータベース内で更新されません。同様の方法で更新できる他のコア設定には、Adobe サーバーフォントディレクトリ、カスタマーフォントディレクトリ、システムフォントディレクトリ、FIPS の有効化、LiveCycle 一時ディレクトリ、LiveCycle グローバルドキュメントストレージ ディレクトリがあります。upgrade-configureCoreSettings コマンドでは以下のプロパティを使用できます。

プロパティ	説明	必須	空の値
prevLCVersion	アップグレードの実行元の LiveCycle のバージョンです。有効な値は、821 または 9x です。	○	×
excludedSolutionComponents	アップグレード（またはインストール）されないモジュールのコンマ区切りリスト。これは、インストール（ライセンス）されているソリューションコンポーネントを Configuration Manager GUI で選択解除することと同等です。	×	○

8.3.5 (自動オプションのみ) 既存の自動データベースの移行コマンド

`upgrade-migrateTurnkeyDatabase` コマンドは、以前の LiveCycle ES3 の MySQL 自動インストールの「adobe」スキーマから、LiveCycle ES3 の MySQL 自動インストールの「adobe」スキーマに、データを移行するために使用します。このコマンドを実行する前に、両方の MySQL サービスが実行中で、アクセス可能であることを確認してください。また、両方の MySQL サービスが別々のポートで実行されていることも必要です。`upgrade-migrateTurnkeyDatabase` コマンドでは以下のプロパティを使用できます。

注意: このコマンドを実行するのは、既存の LiveCycle ES3 自動インストールと LiveCycle ES3 自動インストールが同じマシン上に共存し、自動で LiveCycle ES3 をインストールするときにアップグレードインストールを実行することを選択した場合のみです。

プロパティ	説明	必須	空の値
<code>lcDatabaseHostName</code>	LiveCycle 自動データベースのホスト名。	○	×
<code>lcDatabaseName</code>	LiveCycle 自動データベースのデータベース名。デフォルトは <code>adobe</code> です。	○	×
<code>lcDatabaseUserName</code>	LiveCycle 自動データベースにアクセスするためのユーザー名。	○	×
<code>lcDatabaseUserPassword</code>	LiveCycle 自動データベースにアクセスするためのパスワード。ファイルでパスワードを指定しなかった場合、コマンドラインでパスワードを指定するよう求められます。	×	○
<code>lcDatabaseDriverFile</code>	LiveCycle 自動データベースのドライバーファイルへのパス。	○	×
<code>lcDatabasePortNumber</code>	LiveCycle 自動データベースで使用するポート。	○	×
<code>lcDatabaseType</code>	LiveCycle 自動データベースに設定されているデータベースの種類。デフォルトは <code>mysql</code> です。	○	×
<code>lcPrevDatabaseHostName</code>	以前の LiveCycle 自動インストールデータベースのホスト名。	○	×
<code>lcPrevDatabaseName</code>	以前の LiveCycle 自動インストールデータベースのデータベース名。デフォルトは <code>adobe</code> です。	○	×
<code>lcPrevDatabaseUserName</code>	以前の LiveCycle 自動インストールデータベースにアクセスするためのユーザー名。	○	×
<code>lcPrevDatabaseUserPassword</code>	以前の LiveCycle 自動インストールデータベースにアクセスするためのパスワード。ファイルでパスワードを指定しなかった場合、コマンドラインでパスワードを指定するよう求められます。	×	○

プロパティ	説明	必須	空の値
lcPrevDatabaseDriverFile	以前の LiveCycle 自動インストールデータベースのドライバーファイルへのパス。	<input type="radio"/>	×
lcPrevDatabasePortNumber	以前の LiveCycle 自動インストールデータベースが使用するポート。	<input type="radio"/>	×
lcPrevDatabaseType	以前の LiveCycle 自動インストールデータベースに設定されたデータベースの種類。デフォルトは mysql です。	<input type="radio"/>	×

8.3.6 コンポーネントのデプロイメント前の重要なタスクの実行コマンド

upgrade-configurePreDeploy コマンドは、以前の LiveCycle インストールのコンポーネントをアップグレードするためのプラグインを実行し、それらのコンポーネントが実際に LiveCycle サーバーにデプロイされる前に、LiveCycle との互換性を確保するために使用します。upgrade-configurePreDeploy コマンドでは以下のプロパティを使用できます。

プロパティ	説明	必須	空の値
prevLCVersion	アップグレード元の LiveCycle のバージョン。有効な値は、821 または 9x です。	<input type="radio"/>	×
excludedSolutionComponents	インストールされないコンポーネントのコンマ区切りリスト。これは、インストール（ライセンス）されているソリューションコンポーネントを Configuration Manager GUI で選択解除することと同等です。	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="radio"/>

8.3.7 移行する ECM フォームテンプレートの取得コマンド

upgrade-getFormTemplatesToMigrate コマンドを使用すると、ECM リポジトリから LiveCycle ネイティブリポジトリに移行できるフォームテンプレートのリストを取得できます。

フォームテンプレートの格納に ECM リポジトリを使用することは推奨されなくなるため、この移行は必須です。

リストが取得されたら、upgrade-configurePostDeploy コマンドを使用して、実際にリストからテンプレートを移行します。このコマンドをスキップして、upgrade-configurePostDeploy コマンドで、skipFormTemplatesImport プロパティを true に設定すると、フォームテンプレートの移行をスキップできます。

upgrade-getFormTemplatesToMigrate コマンドでは以下のプロパティを使用できます。

プロパティ	説明	必須	空の値
prevLCVersion	アップグレード元の LiveCycle のバージョン。有効な値は、821 または 9x です。	<input type="radio"/>	×
excludedSolutionComponents	インストールされない LiveCycle コンポーネントのコンマ区切りリスト。これは、インストール（ライセンス）されているソリューションコンポーネントを GUI で選択解除することと同等です。	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="radio"/>

LiveCycle ホストおよび認証の情報

プロパティ	説明	必須	空の値
LCHost	LiveCycle サーバーのホスト名。	<input type="radio"/>	×
LCPort	LiveCycle アプリケーションサーバーが構成されているポート番号。	<input type="radio"/>	×
lcJndiPort	LiveCycle アプリケーションサーバーに対応する JNDI ポート。	<input type="radio"/>	×
LCAdminUserID	LiveCycle 管理者ユーザーのユーザー名。	<input type="radio"/>	×
LCAdminPassword	管理者ユーザーのパスワード。ファイルでパスワードを指定しなかった場合、コマンドラインでパスワードを指定するよう求められます。	<input checked="" type="radio"/>	<input type="radio"/>

LiveCycle データベース情報

プロパティ	説明	必須	空の値
lcDatabaseType	LiveCycle 用に設定されているデータベースの種類。mysql、db2、oracle または sqlserver の値を指定できます。	<input type="radio"/>	×
lcDatabaseHostName	LiveCycle データベースのホスト名。	<input type="radio"/>	×
lcDatabasePortNumber	LiveCycle データベースのポート番号。	<input type="radio"/>	×
lcDatabaseDriverFile	データベースのドライバーファイルへのパス。	<input type="radio"/>	×
lcDatabaseUserName	データベースにアクセスするためのユーザー名。	<input type="radio"/>	×
lcDatabaseName	データベース名。	<input type="radio"/>	×
lcDatabaseUserPassword	データベースにアクセスするためのパスワード。ファイルでパスワードを指定しなかった場合、コマンドラインでパスワードを指定するよう求められます。	<input checked="" type="radio"/>	<input type="radio"/>

ECM フォームテンプレートの移行プロパティ

プロパティ	説明	必須	空の値
documentumFormTemplatesFile	ECM Documentum から移行できるフォームテンプレートのリストが書き込まれるファイル。後でこのファイルを upgrade-configurePostDeploy コマンドに対する入力として使用できます。	×	<input type="radio"/>
filenetFormTemplatesFile	IBM FileNet から移行できるフォームテンプレートのリストが書き込まれるファイル。後でこのファイルを upgrade-configurePostDeploy コマンドに対する入力として使用できます。	×	<input type="radio"/>

8.3.8 デプロイメント完了後の設定コマンド

upgrade-configurePostDeploy コマンドは、システムの実際のアップグレードを行います。LiveCycle EAR ファイルおよびモジュールがデプロイされた後で実行されます。

upgrade-configurePostDeploy コマンドでは以下のプロパティを使用できます。

プロパティ	説明	必須	空の値
prevLCVersion	アップグレード元の LiveCycle のバージョン。有効な値は、821 または 9x です。	○	×
excludedSolutionComponents	インストールしない LiveCycle コンポーネントのコンマ区切りリスト。これは、インストール（ライセンス）されているソリューションコンポーネントを GUI で選択解除することと同等です。	×	○
jboss.clientjar.location	jbossall-client.jar ファイルの場所 (JBoss のみ)。	○	○

LiveCycle ホストおよび認証の情報

プロパティ	説明	必須	空の値
LCHost	LiveCycle サーバーのホスト名。	○	×
LCPort	LiveCycle アプリケーションサーバーが構成されているポート番号。	○	×
lcJndiPort	LiveCycle アプリケーションサーバーに対応する JNDI ポート。	○	×
localServer.appServerRootDir	アプリケーションサーバーのクライアント JAR ファイルにアクセスするために使用されます (WebLogic および WebSphere の場合のみ、ローカルアプリケーションサーバーのルートディレクトリが必要です)。	○	○
LCAdminUserID	LiveCycle 管理者ユーザーのユーザー名。	○	×
LCAdminPassword	管理者ユーザーのパスワード。ファイルでパスワードを指定しなかった場合、コマンドラインでパスワードを指定するよう求められます。	×	○

LiveCycle データベース情報

プロパティ	説明	必須	空の値
lcDatabaseType	LiveCycle 用に設定されているデータベースの種類。mysql、db2、oracle または sqlserver の値を指定できます。	○	×
lcDatabaseHostName	LiveCycle データベースのホスト名。	○	×
lcDatabasePortNumber	LiveCycle データベースのポート番号。	○	×
lcDatabaseDriverFile	LiveCycle データベースのドライバーファイルのパス。	○	×
lcDatabaseUserName	LiveCycle データベースにアクセスするためのユーザー名。	○	×
lcDatabaseName	LiveCycle データベースの名前。デフォルトは adobe です。	○	×
lcDatabaseUserPassword	データベースにアクセスするためのパスワード。ファイルでパスワードを指定しなかった場合、コマンドラインでパスワードを指定するよう求められます。	×	○

ECM フォームテンプレートの移行プロパティ

プロパティ	説明	必須	空の値
skipFormTemplatesImport	ECM リポジトリから LiveCycle ネイティブリポジトリにフォームテンプレートを読み込むか、この手順をスキップするかを指定します。false に設定した場合、移行するテンプレート名のリストを含むテンプレートファイル（次の 2 つのプロパティを参照）を指定する必要があります。	x	○
documentumFormTemplatesFile	EMC Documentum リポジトリから LiveCycle ネイティブリポジトリに移行するフォームテンプレートのリストを含むファイル。このファイルは、upgrade-getFormTemplatesToMigrate コマンドを使用して生成します。	x	○
filenetFormTemplatesFile	IBM FileNet リポジトリから LiveCycle ネイティブリポジトリに移行するフォームテンプレートのリストを含むファイル。このファイルは、upgrade-getFormTemplatesToMigrate コマンドを使用して生成します。	x	○

8.4 一般的な設定プロパティ

8.4.1 共通のプロパティ

共通のプロパティは以下のとおりです。

LiveCycle Server 固有のプロパティ : LiveCycle の初期化および LiveCycle コンポーネントのデプロイ操作に必要です。

以下の操作に必要なプロパティは次の表のとおりです。

- LiveCycle を初期化します。
- LiveCycle コンポーネントをデプロイします。

プロパティ	値	説明
LiveCycle サーバー固有のプロパティ		
LCHost	文字列	LiveCycle をデプロイするサーバーのホスト名。

プロパティ	値	説明
LCPort	整数値	LiveCycle のデプロイ先の Web ポート番号。
excludedSolutionComponents	文字列。次の値がサポートされています。 ALC-LFS-Forms、 ALC-LFS-ConnectorEMCDocumentum、 ALC-LFS-ConnectorIBMFileNet、 ALC-LFS-ConnectorIBMContentManager、 ALC-LFS-DigitalSignatures、 ALC-LFS-DataCapture、 ALC-LFS-Output、 ALC-LFS-PDFGenerator、 ALC-LFS-ProcessManagement、 ALC-LFS-ReaderExtensions、 ALC-LFS-RightsManagement	(オプション) 構成しない LiveCycle モジュールを指定します。構成対象から除外するモジュールが複数ある場合はコンマで区切ります。
excludedSolution	ALC-SA-CorrespondenceManagement	このプロパティを指定して、Correspondence Management Solution を追加または除外できます。

8.4.2 LiveCycle の構成プロパティ

以下のプロパティは LiveCycle の構成操作にのみ適用されます。

プロパティ	値	説明
AdobeFontsDir	文字列	Adobe サーバーフォントディレクトリの場所。 このパスは、デプロイ先のサーバーからアクセスできるようにする必要があります。
customerFontsDir	文字列	カスタマーフォントディレクトリの場所。 このパスは、デプロイ先のサーバーからアクセスできるようにする必要があります。
systemFontsDir	文字列	システムフォントディレクトリの場所。 このパスは、デプロイ先のサーバーからアクセスできるようにする必要があります。
LCTempDir	文字列	一時ディレクトリの場所。 このパスは、デプロイ先のサーバーからアクセスできるようにする必要があります。
LCGlobalDocStorageDir	文字列	グローバルドキュメントストレージのルートディレクトリ。 長期間有効なドキュメントを保存したり、それらをすべてのクラスター/ノードで共有したりするために使用する、NFS 共有ディレクトリのパスを指定します。 このプロパティは、LiveCycle コンポーネントをクラスター環境にデプロイする場合にのみ指定します。 このパスは、デプロイ先のサーバーからアクセスできるようにする必要があります。

プロパティ	値	説明
EnableDocumentDBStorage	true または false デフォルト : false	永続ドキュメントについて、データベースへのドキュメントの保存を有効または無効にします。 データベースへのドキュメントの保存を有効にしても、GDS のファイルシステムディレクトリは必要です。
Content Services 注意 : 以下のプロパティは <code>cli_propertyFile_content_services_template.txt</code> ファイル内で規定されています。		
contentServices.rootDir	文字列	[Content Services のみ] Content Services で使用されるルートディレクトリを指定します。クラスター環境で LiveCycle を実行している場合、クラスター内のすべてのノードによって、すべてのノードにわたって同じパスでこのディレクトリが共有されている必要があります。
contentServices.indexesDir	文字列	[Content Services のみ] Content Services で使用されるインデックスディレクトリを指定します。このディレクトリは各クラスターで一意であり、すべてのクラスターノードで同じ名前と場所にする必要があります。例えば、 <code>contentServices.indexesDir=C:\Adobe\Adobe LiveCycle ES3\lccs_indexes</code> になります。
contentServices.topology	文字列。 SERVER または CLUSTER を指定します。 デフォルト : SERVER	[Content Services のみ] シングルノードの場合は SERVER、クラスター構成の場合は CLUSTER。
contentServices.cifs.enable	true または false デフォルト : false	[Content Services のみ] CIFS を有効または無効にします。
contentServices.cifs.servername	文字列	[Content Services のみ] CIFS サーバーのサーバー名。
contentServices.cifs.implementation	文字列。次のいずれかを指定します。 <ul style="list-style-type: none">• NetBIOS• PureJava	[Content Services のみ] Content Services が CIFS サーバーに接続する方法を指定します。
contentServices.cifs.dllpath	文字列。 NetBIOS DLL のコピー元のパスを指定します。	[Content Services のみ] NetBios DLL のコピー元のパス。 「 <code>contentServices.cifs.implementation=NetBIOS</code> 」の場合は必須。このパスは環境内に存在している必要があります。
contentServices.cifs.alternateIP	数値	[Content Services のみ] CIFS サーバーの代替 IP アドレス。静的 IP である必要があります。 「 <code>contentServices.cifs.implementation=PureJava</code> 」の場合、これは必須フィールドです。
contentServices.cifs.WinsOrBrdcast	文字列。次のいずれかを指定します。 <ul style="list-style-type: none">• winsServer• broadcast	[Content Services のみ] DNS 検索方法。 「 <code>winsServer</code> 」または「 <code>broadcast</code> 」になります。 「 <code>contentServices.cifs.implementation=PureJava</code> 」の場合、これは必須フィールドです。
contentServices.cifs.winsPrmIP	数値	[Content Services のみ] プライマリ WINS サーバーの IP アドレス。ipconfig /all コマンドから取得できます。 「 <code>contentServices.cifs.implementation=PureJava</code> 」および 「 <code>contentServices.cifs.WinsOrBrdcast=winsServer</code> 」の場合、これは必須フィールドです。

プロパティ	値	説明
contentServices.cifs.winsSeclP	数値	[Content Services のみ] セカンダリ WINS サーバーの IP アドレス。ipconfig /all コマンドから取得できます。 「contentServices.cifs.implementation=PureJava」および 「contentServices.cifs.WinsOrBrdcast=winsServer」の場合、これは必須フィールドです。
contentServices.cifs.brdCastIP	数値	[Content Services のみ] ブロードキャスト IP アドレス。 「contentServices.cifs.implementation=PureJava」および 「contentServices.cifs.WinsOrBrdcast=broadcast」の場合、これは必須フィールドです。
contentServices.dbType	文字列	[Content Services のみ] Content Services のデータベースの種類。
contentServices.configureamps.selectedLCAMPs	文字列のコンマ区切りリスト	[Content Services のみ] インストールする必要がある Content Services AMP のファイル名。 例えば、genericservice-action.amp、lc-assemble-clipboard-items.amp など。
contentServices.configureamps.externalAMPsDir	文字列	[Content Services のみ] インストールする必要があるカスタム AMP を含むディレクトリ。 注意: このディレクトリ内に存在するすべての AMP がインストールされます。
contentServices.ftp.port	NumericDefault : 8021	Content Services の FTP ポートの値。
contentServices.ftp.enable	True または False	True の場合、内部電子メールサーバーの設定が有効になり、 False の場合は、無効になります。
contentServices.email.serverDomain	文字列	内部電子メールサーバーのドメイン。電子メール設定を有効にする場合、これは必須フィールドです。
contentServices.email.serverPort	NumericDefault: 25	電子メールサーバーのポート。電子メール設定を有効にする場合、これは必須フィールドです。
contentServices.internalEmailSettings.enabled	True または False	True の場合、内部電子メールサーバーの設定が有効になり、 False の場合は、無効になります。
contentServices.propagateEventsToLC.enabled	True または False	True の場合、イベントが LiveCycle に伝達され、 False の場合は、イベントの伝達は無効になります。
contentServices.usageQuota	数値	ディスク使用容量の制限を有効にする場合、これは必須フィールドです。
contentServices.email.serverAllowedSenders	文字列	これらは着信した電子メールを受け付ける、その電子メールの送信者です。
contentServices.email.serverBlockedSenders	文字列	これらは着信した電子メールをブロックする、その電子メールの送信者です。
contentServices.email.unknownUsers	文字列	送信者のアドレスが認識されない場合に認証するためのユーザー名。
contentServices.audit.enable	True または False	選択すると、アプリケーションまたはユーザーと Content Services リポジトリとのやり取りを記録できます。
(WebSphere のみ) contentServices.myfacesDir	文字列	myfaces jar のコピー先ディレクトリ。共有ライブラリとして使用します。

8.4.3 アプリケーションサーバーの設定および検証のプロパティ

8.4.4 LiveCycle の初期化プロパティ

LiveCycle の初期化プロパティは LiveCycle の初期化操作にのみ適用されます。

プロパティ	値	説明
詳しくは、65 ページの「 8.4.1 共通のプロパティ 」を参照してください		

8.4.5 LiveCycle コンポーネントのデプロイプロパティ

以下の操作に適用されるプロパティは次の表のとおりです。

- LiveCycle コンポーネントのデプロイ
- LiveCycle コンポーネントのデプロイメントの検証
- LiveCycle サーバーの検証

プロパティ	値	説明
LiveCycle サーバー情報セクションを構成する必要があります。詳しくは、「 共通のプロパティ 」を参照してください		
LCAdminUserID	文字列	LiveCycle 管理者ユーザーに割り当てるユーザー ID。このユーザー ID は、Administration Console へのログオンに使用されます。
LCAdminPassword	文字列	LiveCycle 管理者ユーザーに割り当てるパスワード。このパスワードは、Administration Console へのログオンに使用されます。

8.4.6 PDF Generator 用の管理者ユーザーの追加

以下のプロパティは、PDF Generator 用の管理者ユーザーを追加する場合にのみ適用されます。これらのプロパティは、cli_propertyFile_pcfg_template.txt にあります。

プロパティ	値	説明
LCHost	文字列	LiveCycle サーバーがインストールされるホスト名。
LCPort	整数値	LiveCycle アプリケーションサーバーが構成されているポート番号。
LCAdminUserID	文字列	LiveCycle 管理者ユーザーに割り当てるユーザー ID。このユーザー ID は、Administration Console へのログオンに使用されます。
LCAdminPassword	文字列	LiveCycle 管理者ユーザーに割り当てるパスワード。このパスワードは、Administration Console へのログオンに使用されます。
LCServerMachineAdminUser	文字列	LiveCycle をホストする運用システムの管理者ユーザーのユーザー ID。
LCServerMachineAdminUserPasswd	文字列	LiveCycle をホストする運用システムの管理者ユーザーのパスワード。

8.4.7 Connector for IBM Content Manager の設定

注意：以下のプロパティは cli_propertyFile_ecm_ibmcm_template.txt ファイル内で指定されています。

プロパティ	値	説明
LCHost	文字列	LiveCycle サーバーがインストールされるホスト名。
LCPort	整数値	LiveCycle アプリケーションサーバーが構成されているポート番号。
LCAdminUserID	文字列	LiveCycle 管理者ユーザーに割り当てるユーザー ID。このユーザー ID は、Administration Console へのログオンに使用されます。
LCAdminPassword	文字列	LiveCycle 管理者ユーザーに割り当てるパスワード。このパスワードは、Administration Console へのログオンに使用されます。
jndiPortNumber	文字列	LiveCycle アプリケーションサーバーに対応する JNDI ポート。
jboss.clientjar.location	文字列	jbossall-client.jar ファイルの場所 (JBoss のみ)。
CDVTopology.appserverrootdir	文字列	リモートサーバー上に設定するアプリケーションサーバーインスタンスのルートディレクトリ (LiveCycle をデプロイするディレクトリ)。
ConfigureIBCMC	true または false	Connector for IBM Content Manager を設定するには、true を指定します。
IBMCClientPathDirectory	文字列	IBM Content Manager クライアントのインストールディレクトリの場所。
DataStoreName	文字列	接続する IBM Content Manager サーバーのデータストアの名前。
IBMCUsername	文字列	IBM Content Manager 管理者ユーザーに割り当てるユーザー名。このユーザー ID は、IBM Content Manager へのログインに使用されます。
IBMCPassword	文字列	IBM Content Manager 管理者ユーザーに割り当てるパスワード。このパスワードは、IBM Content Manager へのログインに使用されます。
ConnectionString	文字列	IBM Content Manager に接続するための接続文字列内に使用される追加の引数 (オプション)。

8.4.8 Connector for IBM FileNet を設定

注意：以下のプロパティは cli_propertyFile_ecm_filenet_template.txt ファイル内で指定されています。

プロパティ	値	説明
LCHost	文字列	LiveCycle サーバーがインストールされるホスト名。
LCPort	整数値	LiveCycle アプリケーションサーバーが構成されているポート番号。
LCAdminUserID	文字列	LiveCycle 管理者ユーザーに割り当てるユーザー ID。このユーザー ID は、Administration Console へのログオンに使用されます。

プロパティ	値	説明
LCAdminPassword	文字列	LiveCycle 管理者ユーザーに割り当てるパスワード。このパスワードは、Administration Console へのログオンに使用されます。
jndiPortNumber	文字列	LiveCycle アプリケーションサーバーに対応する JNDI ポート。
jboss.clientjar.location	文字列	jbossall-client.jar ファイルの場所 (JBoss のみ)。
CDVTopology.appserverrootdir	文字列	リモートサーバー上に設定するアプリケーションサーバーインスタンスのルートディレクトリ (LiveCycle をデプロイするディレクトリ)。
ConfigureFilenetCE	true または false	Connector for IBM Filenet を設定するには、true を指定します。
FilenetConfigureCEVersion	文字列	設定する FileNet クライアントのバージョン。FilenetClientVersion4.0 または FilenetClientVersion4.5 を指定します。
FilenetCEClientPathDirectory	文字列	IBM Filenet Content Manager クライアントのインストールディレクトリの場所。
ContentEngineName	文字列	IBM Filenet Content Engine がインストールされているマシンのホスト名または IP アドレス。
ContentEnginePort	文字列	IBM Filenet Content Engine が使用するポート番号。
CredentialProtectionSchema	CLEAR または SYMMETRIC	保護のレベルを指定します。
EncryptionFileLocation	文字列	暗号化ファイルの場所。これは、CredentialProtectionSchema 属性に対して SYMMETRIC オプションを選択した場合にのみ必要です。 パス区切り文字には、スラッシュ (/) または二重の円記号 (\ \) を使用します。
DefaultObjectStore	文字列	Connector for IBM Filenet Content Server のオブジェクトストアの名前。
FilenetContentEngineUsername	文字列	IBM Filenet Content Server に接続するためのユーザー ID。 読み取りアクセス権限を持つユーザー ID では、デフォルトのオブジェクトストアへの接続が許可されます。
FilenetContentEnginePassword	文字列	IBM FileNet ユーザーに割り当てるパスワード。このパスワードは、デフォルトのオブジェクトストアに接続する際に使用されます。
ConfigureFilenetPE	true または false	Connector for IBM FileNet を設定するには、true を指定します。
FilenetPEClientPathDirectory	文字列	IBM FileNet クライアントのインストールディレクトリの場所。
FilenetProcessEngineHostname	文字列	プロセスルーターのホスト名または IP アドレス。
FilenetProcessEnginePortNumber	整数値	IBM FileNet Content Server のポート番号。

プロパティ	値	説明
FilenetPERouterURLConnectionPoint	文字列	プロセスルーターの名前。
FilenetProcessEngineUsername	文字列	IBM FileNet Content Server に接続するためのユーザー ID。
FilenetProcessEnginePassword	文字列	IBM FileNet Content Server に接続するためのパスワード。

8.4.9 Connector for EMC Documentum の設定

注意：以下のプロパティは `cli_propertyFile_ecm_documentum_template.txt` ファイル内で指定されています。

プロパティ	値	説明
LCHost	文字列	LiveCycle サーバーがインストールされるホスト名。
LCPort	整数値	LiveCycle アプリケーションサーバーが構成されているポート番号。
LCAdminUserID	文字列	LiveCycle 管理者ユーザーに割り当てるユーザー ID。このユーザー ID は、Administration Console へのログオンに使用されます。
LCAdminPassword	文字列	LiveCycle 管理者ユーザーに割り当てるパスワード。このパスワードは、Administration Console へのログオンに使用されます。
jndiPortNumber	文字列	LiveCycle アプリケーションサーバーに対応する JNDI ポート。
jboss.clientjar.location	文字列	<code>jbossall-client.jar</code> ファイルの場所 (JBoss のみ)。
CDVTopology.appserverrootdir	文字列	リモートサーバー上に設定するアプリケーションサーバーインスタンスのルートディレクトリ (LiveCycle をデプロイするディレクトリ)。
ConfigureDocumentum	true または false	Connector for EMC Documentum を設定するには、true を指定します。
DocumentumClientVersion	文字列	設定する EMC Documentum クライアントのバージョン。DocumentumClientVersion6.0 または DocumentumClientVersion6.0 を指定します。
DocumentumClientPathDirectory	文字列	EMC Documentum クライアントのインストールディレクトリの場所。
ConnectionBrokerHostName	文字列	EMC Documentum Content Server のホスト名または IP アドレス。
ConnectionBrokerPortNumber	文字列	EMC Documentum Content Server のポート番号。
DocumentumUsername	文字列	EMC Documentum Content Server に接続するためのユーザー ID。
DocumentumPassword	文字列	EMC Documentum Content Server に接続するためのパスワード。
DocumentumDefaultRepositoryName	文字列	MC Documentum Content Server のデフォルトリポジトリの名前。

8.4.10 Connector for Microsoft SharePoint の設定

注意：以下のプロパティは cli_propertyFile_ecm_sharepoint_template.txt ファイル内で指定されています。

プロパティ	値	説明
LCHost	文字列	LiveCycle サーバーがインストールされるホスト名。
LCPort	整数値	LiveCycle アプリケーションサーバーが構成されているポート番号。
LCAdminUserID	文字列	LiveCycle 管理者ユーザーに割り当てるユーザー ID。このユーザー ID は、Administration Console へのログオンに使用されます。
LCAdminPassword	文字列	LiveCycle 管理者ユーザーに割り当てるパスワード。このパスワードは、Administration Console へのログオンに使用されます。
jndiPortNumber	文字列	LiveCycle アプリケーションサーバーに対応する JNDI ポート。
jboss.clientjar.location	文字列	jbossall-client.jar ファイルの場所 (JBoss のみ)。
CDVTopology.appserverrootdir	文字列	リモートサーバー上に設定するアプリケーションサーバーインスタンスのルートディレクトリ (LiveCycle をデプロイするディレクトリ)。
ConfigureSharePoint	true または false	Connector for Microsoft SharePoint を設定するには、true を指定します。
SharePointServerAddress	文字列	SharePoint Server のホスト名または IP アドレス。
SharePointUsername	文字列	SharePoint Server に接続するためのユーザー ID。
SharePointPassword	文字列	SharePoint Server に接続するためのパスワード。
SharePointDomain	文字列	SharePoint Server のドメイン名。
SharePointVersion	文字列	LiveCycle 用にインストールされた Microsoft SharePoint Server のバージョン。
ConnectionString	文字列	SharePoint Server に接続するための接続文字列内に使用される追加の引数 (オプション)。

8.4.11 コマンドラインインターフェイスの使用

プロパティファイルを設定したら、[LiveCycle root]/configurationManager/bin フォルダーに移動する必要があります。

Configuration Manager CLI のコマンドの詳細な説明を表示するには、ConfigurationManagerCLI help<command name> と入力します。

LiveCycle の構成 CLI の使用

LiveCycle の構成操作では、次の構文を使用する必要があります。

configureLiveCycle -f <propertyFile>

説明：

- -f <propertyFile> : プロパティファイルには、必要な引数が含まれています。プロパティファイルの作成について詳しくは、「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」を参照してください。

LiveCycle での CRX バンドルの抽出

CRX リポジトリの設定では、次の構文を使用する必要があります。

```
extractCRXInstallationContent [- crx_password<password>] -f <propertyFile>
```

説明：

- -f <propertyFile> : プロパティファイルには、必要な引数が含まれています。プロパティファイルの作成について詳しくは、「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」を参照してください。

Correspondence Management の設定

CRX リポジトリの設定では、次の構文を使用する必要があります。

```
configureCRXRepository -f <propertyFile>
```

説明：

- -f <propertyFile> : プロパティファイルには、必要な引数が含まれています。プロパティファイルの作成について詳しくは、「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」を参照してください。

8.4.11.1 Content Services (非推奨) の設定 CLI の使用

Content Services の設定操作では、次の構文を使用する必要があります。

```
configureContentServices -f <propertyFile>
```

説明：

- -f <propertyFile> : 必要な引数を含むプロパティファイル。プロパティファイルの作成について詳しくは、「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」を参照してください。

注意：Content Services は非推奨の機能であり、選択したコンポーネントのリストには表示されません。選択したコンポーネントのリストに Content Services を表示するには、cli_propertyFile_template.txt ファイルの excludedSolutionComponents=ALC-LFS-ContentServices プロパティを削除するかコメントアウトします。

8.4.11.2 LiveCycle の初期化 CLI の使用

LiveCycle の初期化操作では、次の構文を使用する必要があります。

```
initializeLiveCycle -f <propertyFile>
```

説明：

- -f <propertyFile> : プロパティファイルには、必要な引数が含まれています。プロパティファイルの作成について詳しくは、「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」を参照してください。

8.4.11.3 LiveCycle コンポーネントのデプロイ CLI の使用

LiveCycle コンポーネントのデプロイ操作では、次の構文を使用する必要があります。

```
deployLiveCycleComponents -f <propertyFile> -LCAdminPassword <password>
```

説明：

- -f <propertyFile> : プロパティファイルには、必要な引数が含まれています。プロパティファイルの作成について詳しくは、「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」を参照してください。
- -LCAdminPassword <password> : コマンドライン上で管理者パスワードを設定できます。この引数を指定すると、プロパティファイルの targetServer.adminPassword プロパティが上書きされます。

8.4.11.4 データベース接続の検証 CLI の使用

データベース接続の検証操作（オプション）では、次の構文を使用する必要があります。

```
validateDBConnectivity -f <propertyFile> -datasource_dbPassword <password>
```

説明：

- -f <propertyFile> : プロパティファイルには、必要な引数が含まれています。プロパティファイルの作成について詳しくは、「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」を参照してください。
- -datasource_dbPassword <password> : コマンドラインでデータベースユーザーpasswordを設定できます。この引数を指定すると、プロパティファイルの datasource.dbPassword プロパティが上書きされます。

8.4.11.5 LiveCycle サーバーの検証 CLI の使用

LiveCycle サーバーの検証操作（オプション）では、次の構文を使用する必要があります。

```
validateLiveCycleServer -f <propertyFile> -LCAdminPassword <password>
```

説明：

- -f <propertyFile> : プロパティファイルには、必要な引数が含まれています。プロパティファイルの作成について詳しくは、「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」を参照してください。
- -LCAdminPassword <password> : コマンドライン上で管理者passwordを設定できます。この引数を指定すると、プロパティファイルの targetServer.adminPassword プロパティが上書きされます。

8.4.11.6 LiveCycle コンポーネントのデプロイメントの検証 CLI の使用

LiveCycle コンポーネントのデプロイメントの検証操作（オプション）では、次の構文を使用する必要があります。

```
validateLiveCycleComponentDeployment -f <propertyFile> -LCAdminPassword <password>
```

説明：

- -f <propertyFile> : プロパティファイルには、必要な引数が含まれています。プロパティファイルの作成について詳しくは、「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」を参照してください。
- -LCAdminPassword <password> : コマンドライン上で管理者passwordを設定できます。この引数を指定すると、プロパティファイルの targetServer.adminPassword プロパティが上書きされます。

8.4.11.7 PDF Generator のシステム準備設定を確認します。

PDF Generator のシステム準備設定の確認操作では、次の構文を使用する必要があります。

```
pd़fg-checkSystemReadiness
```

8.4.11.8 PDF Generator の管理者ユーザーの追加

PDF Generator の管理者ユーザーの追加操作では、次の構文を使用する必要があります。

```
pd़fg-addAdminUser -f <propertyFile>
```

説明：

- -f <propertyFile> : プロパティファイルには、必要な引数が含まれています。プロパティファイルの作成について詳しくは、「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」を参照してください。

8.4.11.9 Connector for IBM Content Manager の設定

Connector for IBM Content Manager の設定操作（オプション）では、次の構文を使用する必要があります。

IBMCM-configurationCLI -f <propertyFile>

説明：

- -f <propertyFile> : プロパティファイルには、必要な引数が含まれています。プロパティファイルの作成について詳しくは、「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」を参照してください。

重要 : [LiveCycle root]\configurationManager\bin\ ディレクトリにある
cli_propertyFile_ecm_ibmcm_template.txt という名前の <propertyFile> を修正します。

- 1 アプリケーションサーバーの再起動
- 2 LiveCycle 管理コンソールから以下のサービスを開始します。
 - IBMCMAuthProviderService
 - IBMCMConnectorService

8.4.11.10 Connector for IBM FileNet の設定

Connector for IBM FileNet の設定操作（オプション）では、次の構文を使用する必要があります。

filenet-configurationCLI -f <propertyFile>

説明：

- -f <propertyFile> : プロパティファイルには、必要な引数が含まれています。プロパティファイルの作成について詳しくは、「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」を参照してください。

重要 : [LiveCycle root]\configurationManager\bin\ ディレクトリにある
cli_propertyFile_ecm_filenet_template.txt という名前の <propertyFile> を修正します。

Connector for IBM Content Manager の設定を完了するには、次の手順を手動で実行してください。

- 1 (FileNet 4.x の場合のみ) Java オプション -Dwasp.location=[FileNetClient root]/wsi をアプリケーションサーバー起動オプションに追加します。
- 2 アプリケーションサーバーを再起動します。
- 3 LiveCycle 管理コンソールから以下のサービスを開始します。
 - IBMFileNetAuthProviderService
 - IBMFileNetContentRepositoryConnector
 - IBMFileNetRepositoryProvider
 - IBMFileNetProcessEngineConnector (設定されている場合)

8.4.11.11 Connector for EMC Documentum の設定

Connector for EMC Documentum の設定操作（オプション）では、次の構文を使用する必要があります。

documentum-configurationCLI -f <propertyFile>

説明：

- -f <propertyFile> : プロパティファイルには、必要な引数が含まれています。プロパティファイルの作成について詳しくは、「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」を参照してください。

重要 : [LiveCycle root]\configurationManager\bin\ ディレクトリにある
cli_propertyFile_ecm_documentum_template.txt という名前の <propertyFile> を修正します。

Connector for EMC Documentum の設定を完了するには、次の手順を手動で実行してください。

- 1 アプリケーションサーバーの再起動

2 LiveCycle 管理コンソールから以下のサービスを開始します。

- EMCDocumentumAuthProviderService
- EMCDocumentumRepositoryProvider
- EMCDocumentumContentRepositoryConnector

8.4.11.12 Connector for Microsoft SharePoint の設定

Connector for Microsoft SharePoint の設定操作（オプション）では、次の構文を使用する必要があります。

`sharepoint-configurationCLI -f <propertyFile>`

説明：

- `-f <propertyFile>`：プロパティファイルには、必要な引数が含まれています。プロパティファイルの作成について詳しくは、「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」を参照してください。

重要：[LiveCycle root]¥configurationManager¥bin¥ ディレクトリにある
`cli_propertyFile_ecm_sharepoint_template.txt` という名前の `<propertyFile>` を修正します。

8.5 使用例

C:¥Adobe¥Adobe LiveCycle ES3¥configurationManager¥bin から次のコマンドを入力します。

`ConfigurationManagerCLI configureLiveCycle -f cli_propertyFile.txt`

`cli_propertyFile.txt` には、作成済みのプロパティファイルの名前を指定します。

8.6 Configuration Manager CLI のログ

エラーが発生した場合は、[LiveCycle root]¥configurationManager¥log フォルダーにある CLI ログで確認できます。生成されるログファイルには、命名規則に基づいて lcmCLI.0.log のような名前が付けられます。ファイル名の数字（ここでは 0）は、ログファイルがロールオーバーされるたびに増加します。

8.7 次の手順

Configuration Manager CLI を使用して LiveCycle の設定とデプロイを行った場合は、この時点で次のタスクを実行できます。

- デプロイメントの確認（デプロイメントの確認を参照）
- Administration Console へのアクセス（Administration Console へのアクセスを参照）。
- LDAP にアクセスするための LiveCycle モジュールの構成（LDAP アクセスの設定を参照）。

第9章：付録 - SharePoint サーバーでの Connector for Microsoft SharePoint の設定

Connector for Microsoft SharePoint を使用すると、LiveCycle と SharePoint の両方の開発の観点で、ワークフローを統合できます。このモジュールには、LiveCycle サービスと、この 2 つのシステム間のエンドツーエンドの接続を容易にするサンプルの SharePoint の機能が含まれています。

このサービスによって、SharePoint リポジトリでの検索、読み取り、書き込み、削除、更新およびチェックイン／チェックアウトが可能になります。SharePoint のユーザーは、SharePoint 内からの承認プロセスなどの LiveCycle プロセスの開始、ドキュメントの Adobe PDF への変換、PDF 形式やネイティブ形式のファイルの権限の管理が可能です。さらに、SharePoint コンテキスト内から、LiveCycle プロセスの SharePoint ワークフロー内の実行を自動化できます。

9.1 インストールと設定

LiveCycle のインストールを設定した後に、次の手順を実行して SharePoint サーバーでコネクタを設定します。

9.1.1 SharePoint サーバーの必要システム構成

SharePoint サイトを実行するサーバーが次の要件を満たしていることを確認してください。

- Microsoft SharePoint Server 2007 または 2010
- Microsoft .NET Framework 3.5

9.1.2 インストールに関する考慮事項

インストールの計画にあたって、次の点に注意してください。

- Microsoft SharePoint Server 2007 を使用している場合、SharePoint サーバーに Connector for Microsoft SharePoint をインストールすると、インストールプロセスによって Windows IIS Server が停止し、再起動します。
- インストールを実行する前に、他のサイトや Web アプリケーションが IIS Server 上のサービスを使用していないことを確認します。インストールを行う前に、IIS の管理者に問い合わせてください。
- (SharePoint サーバー 2010 のファームインストールの場合) SharePoint 管理サービスは、SharePoint サーバーファームの一元管理サーバーで実行されています。(SharePoint サーバー 2010 スタンドアロンインストールの場合) SharePoint 管理サービスは、SharePoint サーバーで停止します。

9.2 SharePoint Server 2007 でのインストールと設定

9.2.1 Web パーツのインストーラーの抽出

LiveCycle サーバーをインストールしたときに、SharePoint サーバーの Web パーツのインストーラー (Adobe LiveCycle Connector-2007.zip) が [LiveCycle root]\plugins\sharepoint フォルダー内に作成されています。SharePoint をホストしている Windows サーバー上のフォルダーにこのファイルをコピーしてから、抽出します。

9.2.2 バッチファイルの編集

Web パーツのインストーラーから抽出されたフォルダー内に、バッチファイル (Install.bat) があります。使用している SharePoint サーバーに適切なファイルおよびフォルダーのパスを使用して、このバッチファイルを更新する必要があります。

1 Install.bat ファイルをテキストエディターで開きます。

2 ファイル内で次の行を探して編集します。

```
@SET GACUTILEXE="C:\Program Files\Microsoft SDKs\Windows\v6.0A\Bin\ gacutil.exe"  
@SET TEMPLATEDIR="c:\Program Files\Common Files\Microsoft Shared\ web server extensions\12\TEMPLATE"  
@SET WEBAPPPDIR="C:\Inetpub\wwwroot\wss\VirtualDirectories\<port>"  
@SET SITEURL="http://<SharePoint Server>:<port>/SiteDirectory/<site name>/"  
@SET STSADM="C:\Program Files\Common Files\Microsoft Shared\ web server extensions\12\bin\stsadm.exe"
```

- **GACUTILEXE** : GAC ユーティリティがあるフォルダーにパスを変更します。
- **TEMPLATEDIR** : システム上の IIS Server のテンプレートのディレクトリパスを変更します。
- **WEBAPPPDIR** : システム上の IIS Server の WEBAPPPDIR のパスがバッチファイル内のデフォルト値と異なる場合に変更します。
- **SITEURL** : LiveCycle の機能をアクティブにする、システム上の SharePoint サイトの URL を変更します。
- **STSADM** : STSADM ユーティリティがあるフォルダーへのパスを変更します。

注意 : LiveCycle の機能は、SharePoint サーバーの Web アプリケーションにインストールされます。LiveCycle の機能は、URL を指定したサイトでのみアクティブになります。他の SharePoint サイトについては、各サイトのサイトの設定ページで後から LiveCycle の機能をアクティブにすることができます。詳しくは、SharePoint のヘルプを参照してください。

3 ファイルを保存して閉じます。

9.2.3 バッチファイルの実行

編集されたバッチファイルがあるフォルダーに移動してから、Install.bat ファイルを実行します。

バッチファイルが実行されている間は SharePoint サイトで他のサービスを使用できないことに注意してください。

バッチファイルを実行すると、次の作業が行われます。

- AdobeLiveCycleConnector.dll および AdobeLiveCycleWorkflow.dll のファイルが登録されます。これらの動的ライブラリによって、LiveCycle の機能が SharePoint サーバーと統合されます。
- 以前にインストールされていた SharePoint コネクタがアンインストールされます。
- テンプレートファイルが WSS\TEMPLATE ディレクトリにコピーされます。
- リソースファイルが WEBAPPPDIR\App_GlobalResources ディレクトリにコピーされます。
- LiveCycle の機能が、Web サーバーの拡張機能とあわせてインストールされてアクティブになります。
- インストーラーが閉じて、プロンプトに戻ります。

9.2.4 サービスモデル設定の IIS Web アプリケーションのフォルダーへのコピー

SharePoint Connector 固有の設定を、IIS Server の Web アプリケーションのホームディレクトリにコピーする必要があります。これによって、LiveCycle の機能が Web アプリケーションに追加されます。

1 LiveCycle の機能のインストーラーを抽出したときに作成された **sharepoint-webpart** フォルダーに移動します。

2 AdobeLiveCycleConnector.dll.config ファイルをテキストエディターで開きます。

- 3 <system.serviceModel> タグと </system.serviceModel> タグの間の内容（開始タグと終了タグを含む）をコピーしてから、ファイルを閉じます。
- 4 パッチファイルで指定したコンピューター上の IIS サービスの Web アプリケーションのホームディレクトリに移動します。そのフォルダーは、通常は C:\Inetpub\wwwroot\wss\VirtualDirectories\<port> です。
- 5 web.config ファイルのバックアップコピーを作成してから、元のファイルをテキストエディターで開きます。
- 6 コピーした内容を </configuration> タグの前に追加します。
- 7 ファイルを保存して閉じます。

9.3 SharePoint Server 2010 でのインストールと設定

9.3.1 環境変数の編集

stsadm.exe のパスを PATH 環境変数に追加します。stsadm.exe のデフォルトのパスは C:\Program Files\Common Files\Microsoft Shared\Web Server Extensions\14\BIN です。

9.3.2 Web パーツのインストーラーの抽出

LiveCycle サーバーをインストールしたときに、SharePoint サーバーの Web パーツのインストーラー (Adobe LiveCycle Connector-2010.zip) が [LiveCycle root]\plugins\sharepoint フォルダー内に作成されています。SharePoint をホストしている Windows サーバー上のフォルダーにこのファイルをコピーしてから、抽出します。

9.3.3 Connector のインストールとアクティベート

- 1 (オプション) コネクタをインストールする前に SharePoint Server のコンテキストメニューのオプションを選択します。 詳細な手順については、81 ページの「[9.3.4 機能の有効化または無効化](#)」を参照してください。
- 2 次のコマンドをリストの順序どおりに実行して、Connector for SharePoint Server をインストールします。変更がすべてのサーバーに適用されたことを確認するために、各コマンドの後に stsadm -o enumsolutions を実行します。resultant xml に <state>pending</state> タグが追加されるまで、stsadm -o enumsolutions を繰り返し実行します。

```
install.bat -create  
install.bat -add  
install.bat -deploy  
install.bat -install
```

- 3 SharePoint Web アプリケーションからコネクタをアクティベートします。コネクタをアクティベートするには、次の手順を実行します。
 - a ブラウザーで SharePoint Web アプリケーションを開きます。
 - b 「サイトの設定」をクリックします。
 - c 「Site Collection Features」をクリックします。
 - d Adobe LiveCycle Connector 機能および Adobe LiveCycle Workflow 機能について「アクティベート」をクリックします。

9.3.4 機能の有効化または無効化

コンテキストメニューのオプションを変更し、SharePoint サイトの他の機能を無効にすることができます。一連のオプションをデフォルトのまま SharePoint Connector をインストールした場合、SharePoint Server で次のオプションを有効にします。

- Adobe PDF に変換
- Acrobat Reader による注釈機能を有効化
- Adobe ポリシーで保護
- Adobe LiveCycle プロセスを起動

Elements.xml ファイルを変更してこれらのオプションを変更したり、別の機能の有効／無効を切り替えたりすることができます。Elements.xml を変更するには、次の手順を実行します。

- 1 Adobe LiveCycle Connector-2010.zip ファイルを抽出した内容が含まれるフォルダーに移動します。
- 2 Elements.xml ファイルのバックアップを作成します。Elements.xml のデフォルトの場所は <Directory containing Extracted Adobe LiveCycle Connector-2010.zip File>\TEMPLATE\FEATURES\LiveCycle\Elements.xml です。
- 3 Elements.xml ファイルをテキストエディターで開きます。
- 4 無効にする機能の CustomAction 要素を削除するかコメントにします。

Document Server の機能	CustomAction 要素の ID	説明
Reader Extensions	LiveCycle.ApplyReaderExtensions	PDF ドキュメントでの Reader Extensions を有効にします
Rights Management	LiveCycle.RightsManagement.ApplyPolicyToPdf	PDF ドキュメントの権限保護を実行します
	LiveCycle.RightsManagement.ApplyPolicyToDoc	Microsoft Word ドキュメントの権限保護を実行します
	LiveCycle.RightsManagement.ApplyPolicyToXls	Microsoft Excel ドキュメントの権限保護を実行します
	LiveCycle.RightsManagement.ApplyPolicyToPpt	Microsoft PowerPoint ドキュメントの権限保護を実行します
	LiveCycle.RightsManagement.ApplyPolicyToDocx	Microsoft Word ドキュメントの権限保護を実行します
	LiveCycle.RightsManagement.ApplyPolicyToXlsx	Microsoft Excel ドキュメントの権限保護を実行します
	LiveCycle.RightsManagement.ApplyPolicyToPptx	Microsoft PowerPoint ドキュメントの権限保護を実行します
	LiveCycle.RightsManagement.ApplyPolicyToDwg	AutoCAD ドキュメントの権限保護を実行します
	LiveCycle.RightsManagement.ApplyPolicyToDxf	AutoCAD ドキュメントの権限保護を実行します
	LiveCycle.RightsManagement.ApplyPolicyToDwf	AutoCAD ドキュメントの権限保護を実行します

PDF Generator	LiveCycle.GeneratePDFFromPdf	サイトの設定でファイルの種類として標準の OCR が使用された場合に、画像から作成された PDF をテキストベースの PDF に変換します
	LiveCycle.GeneratePDFFromDoc	Microsoft Word ドキュメントから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromPs	PostScript ファイルから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromEps	EPS ドキュメントから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromPrn	PRN ファイルから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromDocx	Microsoft Word 2007 ドキュメントから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromPpt	Microsoft PowerPoint ドキュメントから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromPptx	Microsoft PowerPoint ドキュメントから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromXls	Microsoft Excel ドキュメントから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromXlsx	Microsoft Excel ドキュメントから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromBmp	BMP ファイルから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromGif	GIF ファイルから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromJpeg	JPEG 画像から PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromJpg	JPG 画像から PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromTiff	TIFF 画像から PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromTif	TIF 画像から PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromPng	PNG 画像から PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromJpf	JPF 画像から PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromJpx	JPX 画像から PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromJp2	JPEG 2000 画像から PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromJ2k	JPEG 2000 画像から PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromJ2c	JPEG 2000 画像から PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromJpc	JPEG 2000 画像から PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromHtm	HTM ドキュメントから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromHtml	HTML ドキュメントから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromSwf	SWF ファイルから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromFlv	Flash ビデオファイルから PDF を生成します

	LiveCycle.GeneratePDFFromTxt	テキストファイルから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromRtf	リッチテキスト形式のファイルから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromMpp	Microsoft Project ファイルから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromPub	Microsoft Publisher ドキュメントから PDF を生成します
LiveCycle プロセスを 起動	LiveCycle.InvokeGenericLiveCyclePr ocessOnALL	LiveCycle プロセスを起動します
Adobe Forms ライ ブリ	AdobeFormsLibrary	フォームデータのリポジトリとして SharePoint を設定します。 CustomAction、ListTemplate および ListInstance の各要素を削除します。
LiveCycle ユーザータ スク	LiveCycleUserTasks	ユーザータスクのリストを表示します。 ListTemplate 要素を削除します。
LiveCycle グループタ スク	LiveCycleGroupTasks	グループタスクのリストを表示します。 ListTemplate 要素を削除します。

- 5 Elements.xml を保存して閉じます。

9.3.5 Connector for Microsoft SharePoint Server 2010 のアンインストール

- 1 SharePoint Web アプリケーションから SharePoint Connector のアクティベートを解除します。SharePoint Connector のアクティベートを解除するには
 - a ブラウザーで SharePoint Web アプリケーションを開きます。
 - b 「サイトの設定」をクリックします。
 - c 「Site Collection Features」をクリックします。
 - d **Adobe LiveCycle Connector** 機能および **Adobe LiveCycle Workflow** 機能について「アクティベートの解除」をクリックします。
- 2 コマンドプロンプトで、次のコマンドを順番どおりに実行します。変更がすべてのサーバーに適用されたことを確認するために、各コマンドの後に stsadm - o enum solutions を実行します。resultant xml に <state>pending</state> タグが追加されるまで、stsadm - o enum solutions を繰り返し実行します。

```
Install.bat -uninstall  
Install.bat -retract  
Install.bat -delete
```